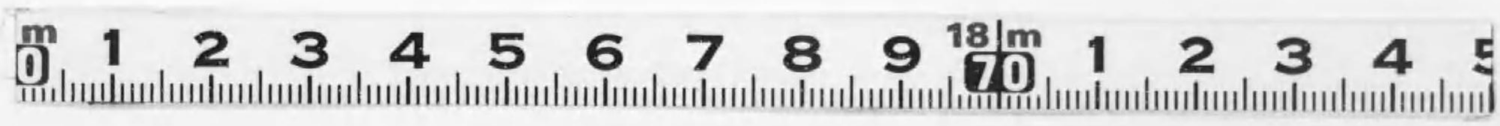

517
6

家庭の幸福

トルストイ著
福永挽歌譯

春秋社

577-6

家庭の幸福

著 トルストイ
譯 福永挽歌

ГЕРБЪ РОДА ГРАФОВЪ ТОЛСТЫХЪ,

春秋社

大正
11. 10. 20
内交

家庭の幸福

課欧挽水編

前編

一

私たちは、秋の始めに死んだ私の母の喪に服してをりました、そして、カーチャとソーニャと私とは、冬ぢゆうを田舍で暮らしました。カーチャは、私の母の古い友だちで、私の家庭教師で、私の記憶してゐる限りは、私が以前から知つてゐた、そして愛してゐた人なのでした。ソーニャは、私の妹です。

ボクローフスコエの私たちの古い田墅で過した冬は、物悲しく陰氣でした。寒くて、風は雪を吹きつけ、窓架の高さまで雪の厚い堆積を作りました、窓硝子は幾日も凍つて閉されてゐました、そして、私たちは徒歩でも馬車でも外へ出ることは殆んどありませんでした。訪問客もたまにあるばかりで、その訪ねて來る僅かな人たちは、愉快な心持や娯樂を持つて來てくれはしませんでした。みんな悲し

さうな顏をして、眠つてゐる人の眼を醒させるのを怖れるとでもいふやうに、息を殺して話をしました、みんな決して笑ひませんでした、そして、黑い着物を着てゐる小さなソーニャは私を見ると、溜息をついたり泣いたりしました。それは丁度、死の使者が、まだ空中を翔けてゐるとでもいふやうでした——怖ろしい死の使者がまだゐるのでそれがために空氣が壓へつけられてゐるとでもいふやうでした。母の部屋は閉されてゐましたが、その閉された入口の前を通る時には、何か見えないものがあつて、その冷たい沈默した部屋の方へ私を引張つて行くやうに感ぜずにはゐられませんでした。

私はまる十七になつてゐました、そして私の母は、その冬は私を交際社會へ連れ出すために聖ペテルブルグへ行くつもりでした。母の死は、私にとつては非常な悲みでした、ですが、私は白狀しなければなりません。母に對する嘆きの最中に、二度目の冬を田舍の死のやうな寂寥の中に送らなければならぬのだといふ考から來る苦しい畏縮をも感じたのでした。

すこし經つと、寂寥と悲嘆と倦怠との縺れ合つた感情がだん〳〵激しくなつて來て、私は決して部屋を出ないし、ピアノをも開けないし、書物に手も觸れないといふほどになりました。カーチャが何か彼かをするやうに勸める時には、私の答はいつもかうでした——『私には出來ないわ。そんなこと詰らないわ。』が、或る聲が私の心の中でかう囁くのです——『自分の一生の最もいゝ日がかうして陰氣に過ぎ去つて行くのに、何故自分で何かをしようとしないのだらう。』この壓へ附けるやうな問ひに

對して、私はたゞ一つの答を持つてゐるだけでした――それは涙です。

私は、みんなが、私が非常に變つて、痩せたといふのを聞きました。しかし、私にはそんなことはどうでもいゝのでした。この歡喜のない寂寥の中で殘る私の生涯を過ごすのが私の運命である――この考が凡ゆる意志の力を私から奪ひ去つたのです。この境涯から逃れようとする希望さへも殆んど奪ひ去つたのです――やうに思はれるのに、どうして私はそんなことに氣を遣つてゐられるでせう。

冬の末になると、カーチャは、私のことをひどく氣にかけ始めました。そして、成る可く早く私をボクローフスコエから他へ移さうと決心しました。しかし、その目的を達するためにはお金が必要だつたのでした。が、私たちは、母の財産を整理した後で、どの位ゐ殘つてゐるのか、まだ知らなかつたのでした。で、私たちは毎日々々、事情を私たちに知らせてくれる筈の、私の後見人の來るのを待ちました。

とう〳〵三月に、後見人が來ました。『まア、よかつた。』と、或る日、私が、うか〳〵と、ぼんやりして、一つの隅から他の隅へ影のやうにふら〳〵してゐた時に、カーチャが、云ひました。『まア、よかつた。セルゲイ・ミハイロ井ッチが出でになりました。貴御飯の時こゝへお出でになるやうに、あの方からお使ひでした。さア、元氣をお出しなさいましよ。可愛いマーセチカさん。』と彼女は賴むやうに附加へました。『あの方は、あなた方をどう思つてゐるでせう。あの方は、あなた方お二人をあんな

に可愛がつてゐらしたのですもの。』

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、私たちの隣人の一人で、年はずつと若かつたが、私の亡くなつた父の古い友人でした。彼の到着が、私の生活の形を全く變へてくれるかも知れないといふことを別にしても、私は、子供の時から彼を愛しもし、尊敬もしてゐたのでしたが、カーチャが、私に元氣を出すやうに望んだのも、不吉な光の中で彼の前に現はれるのは、私たちの知人の中の他の人の前に現はれるよりも、私にとつては一層苦痛であるだらうといふことを彼女が知つてゐたからでした。たゞ單に私が、カーチャや、彼の名附娘のソーニャから、最後の馬丁に至るまで、家中の他のみんなと同じやうに彼を愛してゐたばかりではなく、私は母が嘗つて私の聽いてゐる前で云つた言葉を覺えてゐたのでした。母は、セルゲイ・ミハイロ井ッチのやうな人を私の夫にしたならばどんなに嬉しいだらうと云つたのでした。

その時には、それは私には大へん不思議な考へのやうに思はれました。私の理想は非常に遠つてゐました。理想の人は、若くて、丈が高く、華奢で、青白くて、憂鬱んだ人でした。セルゲイ・ミハイロ井ッチは、それとは反對で、もう若くはありませんでした。そして、彼はずんぐりしてゐて、丈夫で、いつも樂しさうにしてゐました。

けれども、こんなに違つてゐたにも拘らず、母の言葉は、斷えず私の記憶の中に浮んだのでした。

で、六年前、私がやつと十一の年、彼が私を『お前』と呼び、私を菫さんと呼んでゐた當時でも、時々身體の中に慄へを感じて、自分自身にかう訊ねて見るのでした――『若し彼が私を嫁にしようとしたらどうしたらいゝだらうか。』

カーチャは、晝食にクリームと芳薇草を用意しましたが、中食の一寸前に、セルゲイ・ミハイロ井ッチが到着しました。私は、彼が小さな橇に乘つて家の方へ近づいて來る時に、窓から彼を見ました。そして、私は、彼に會はうとは思ひがけなかつたといふ風を裝ふつもりで、應接間へ急いで行きました。けれども、玄關の間の彼の足音と、彼に挨拶するカーチャの靜かな聲に答へてゐる彼の高い快活な聲を聞くや否や、私は自分の決心を忘れて、二人の方へ走つて行きました。

彼は、カーチャの手を握つて、口早やに、笑ひながら、樂しげに話をしてゐました。が、彼は私を見つけると、默り込んでしまつて、じつと立つて、私に言葉もかけず、挨拶の會釋もしませんでした。私の方では、非常にきまりがわるくて、顏が赧くなるのを感じました。

『これはどうだ！さう、あなたでしたね。すつかり見違へました。』と彼はとう〳〵云つて、例の單純な、心を籠めた樣子で、兩方の手で私を彼の方に引附けました。『すつかり立派に成人しましたね。われ〳〵の可愛い菫さんが、滿開の薔薇に變つてしまつた。』

そして、彼は、殆んど痛みを感ずるほど、私の手を握り締めました。私は、彼が私の手に接吻するだらうと思ひましたので、彼の方に身體を屈めました。が、彼は、その明るい、親切な眼で、じつと私を見詰めただけでした。

私は、六年の間彼に會はなかつたので、彼の方でもひどく變つてゐることを私は發見しました。彼は年をとつて、色が黑くなつて、彼の顏に似合はない濃い髯を蓄へてゐました。しかし、彼は以前と同じ單純な開けッ放しな態度と、以前と同じ眞實で、正直な眼と、快活で、殆んど子供のやうな微笑とを持つてゐました。

五分間後、私たちは、彼がお客樣であるのを忘れてしまつて、召使に至るまでも、彼を家族の一人として、彼がして欲しいと思ふことを熱心に注意して彼を見ることを喜ぶのでした。

彼は、私たちと一緒にゐる間は、溜息をついたり泣いたりするのを義務と思つてゐる他の隣人のやうではありませんでした。それとは全く反對で、彼は多辯で、快活で、母のことに關しては最も緣の遠いことでも一言も云ひ及ばなかつたので、私はさういふ無頓着に驚いたのでした。そして、あんなに親しい友だちの間柄では、殆んど許すべからざることのやうにも思つたのでした。後になつて、私はそれが無頓着ではなくて、思慮に富んだことであつたのを知りました。

晝食後、カーチャは小さな客間へお茶を出しました。それは、私の母が大抵その目的のために使つた部屋でした。ソーニャと私は、カーチャの傍に坐りました。そして、年老つたグリゴリーは、セル

ゲイ・ミハイロ井ッチに、父の煙管の一つを持つて來ました。昔と同じやうに、彼は部屋の中を彼方此方歩きながら煙草を喫ひはじめました。

『こゝで、どんなに多くの悲しい變化が起つたことだらう――考へて見ると。』と彼は不意に歩みを止めて、云ひました。

『全くさうですねえ。』とカーチャは、湯沸器の蓋をして、半ば泣き出しさうに、ソーニャと私を見て答へました。

『あなたは、お父さんの事を覺えておいでですか。』とセルゲイ・ミハイロ井ッチが、私の方を向いて、訊きました。

『極くかすかに。』と私は答へました。

『今お父さんがあなたと一緒にゐらしたらどんなに幸福でせうねえ。』と彼は靜かに考深く云つた。

『私はあなたのお父さんがだい好きでした。』と彼は靜かに附加へた。夢見るやうな表情が、彼の眼に現はれました。

『神樣が、あの方を私どもからお召しになつたのです。』とカーチャがナプキンを茶壺の上に投げて言つた。涙が彼女の膝の上に靜かに落ちました。

『さうだ。悲しい變化が幾つも起つたのだ。』とセルゲイ・ミハイロ井ッチが傍を向いて繰り返へしま

した。『ソーニャ、あつちへ行つて、私にお前さんの玩具を見せておくれ。』と彼は一寸間を置いてから言ひ添へて、大廣間の方へ出て行きました。私は、眼に一ぱい涙を溜めて、彼の後姿を見ました。

『實のあるお友だちが一人出來ましたね。』とカーチャが云ひました。

『ほんたうに、さうよ。』と私は、自分の心が、この善良な人の同情によつていつもになく溫められ、慰められたのを感じて、叫びました。ソーニャの笑聲と、あの人の諧謔が、廣間から聞えて來ました。私は彼にお茶のコップを持たしてやりました。と、やがて、私たちは、彼がピアノを開けて、ソーニャの小さな指が鍵板を打つのを聞きました。

『マリヤ・アレキサンドローヴナ。』と彼は呼びました。『さア、こゝへ來て、何か彈いて下さい。』

この單純だが、しかし命令的な調子で物を云ふ彼の聲を聞くのは、私には嬉しかつたので、私は立上つて、直ぐ彼の傍へ行きました。

『これを彈いて下さい。』と彼はベトーヴェンのソナタの緩徐調なる Quasi une Fontasia（『月光の曲』）の一册を樂譜架の上に載せながら、云ひました。『一つお手並を聽かせて下さい。』と彼は云ひ添へて、お茶のコップを取り上げて、部屋の他の端へ行きました。

私は、何故話すことが出來なかつたか知らないけれども、彼の命令に反くことも、練習の缺乏してゐることや、彈きかたの拙いことも話すことが出來ないのを感じました。で、私はピアノの前に坐つ

て、彈きはじめました、私は彼が音樂を好いてゐるばかりではなく、それを理解してゐるのを知つてゐましたので、彼の批評を非常に怖れたのでしたが。

緩徐調は、お茶の卓子でした會話によつて呼び醒まされたのと同じ情緒を語りました、そして、私の演奏は、彼を滿足さしたやうに見えました。彼は、戯謔調は彈かない方がいゝだらうと云ひました。

『いや、あなたにはそれはうまく彈けないでせう。』と彼は私の方に近づいて云ひました。『緩徐調は惡くはなかつた。あなたは音樂を理解してゐるやうです。』

このおだやかな賞讃は、私が赤くなるのを感じたほど、嬉しうございました。私は、新らしい、愉快な感じがしました。私の父の古いお友だちが、子供扱ひにせずに、對等で私に話をしてくれたのですもの。

「カーチャが、小さなソーニャを寢床へ連れて行くために二階へ行つた時に、彼は父の事を私に話しました、どうして彼が父と知り合つたかといふことや、どうして二人の間の絆が、父の死ぬまで毎年強くなつて行つたかといふことや、その頃は私はまだ育兒房にゐた子供で、玩具や小猫に夢中になつてゐたといふことなどを。

私は、始めて、心の崇高い、人好きのいゝ、人を愛しもするし、人から愛されもする性質の私の父が解つたやうに感じました。その後で、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、私の學課や私の好きな職業に就

いて私に訊ねました。彼は、もう私の知つてゐるおどけた、戯談好きの、遊び友だちではなくて、私に同情と尊敬とを示めす、熱心な、眞面目な人でした。愉快ではありましたが、私は時に、何か私が云つたら、私が父の娘に似附かはしくないやうに彼に思はれやしないかといふ惧れを感じました。

カーチャが客間に歸ると、彼女は、セルゲイ・ミハイロ井ッチに私がうつけで元氣がないことを訴へました、それは私が注意して見せまいと努めてゐた事柄なのでした。

『では、この女は、自分に關する一ばん大切な事を私に話さなかつたのだね。』と彼は、私の方に頭を傾けて、半ば戯談に、半ば非難するやうに云ひました。

『何をお話したらいゝのでせう。』と私は答へました。『そんなことなんか、考へるのはうるさいんですもの。それに、どうせ過ぎ去つてしまふことなんですもの。實際、私は、私の憂鬱は、消え去つてしまふだらうと感じてゐただけではなく、もう既に消え去つてしまつたやうに、全く今ではそれが無いやうに感じてゐたのでした。』

『孤獨に耐へる方法を知らないのは不幸です。あなたは、立派なお孃さんですか。』

『えゝ、さう信じてゐますわ。』と私は笑ひながら答へました。

『いや、あなたは、さうぢやない。いや、尠くとも、あなたは、人から大騒ぎされる時だけ幸福を感じて、一人ぼつちになると、陰氣になつてしまふ、いけないお孃さんです。』

『あなたは、私に就て立派な意見を持つておいでになるのね。』と私は、自分の狼狽を隠くさうとして云ひました。

『いや、さうぢやない。あなたは、あなたのお父さんによく似ておいでだ。あなたには、何かゞなくちやならない。』

そして、彼の親切な眼が今一度私に注がれて、不思議な感情をもつて私を充たしました。私は、その時始めて、彼の顔や眼が快活に見えて、一見憂りのない平靜を現はしてゐるにも拘はらず、彼の表情には、その底に深い思慮が供はつてゐて、多少の悲みをも交へてゐるのに氣がつきました。

『あなたは、倦忘を感じてゐることは出來ない筈です。』と彼は言ひ添へました。『あなたには、御自分の好きな音樂や、書物や、いろんな學課がある——あなたの全生涯は、今あなたの前に開かれてゐる、あなたは、今後悔を殘さないやうに、その生涯の準備をするために働かなくちやならない。來年とか何とか云つてゐるうちには、遲れてしまふんですよ。』

彼は、父か叔父がするやうにかう云ひました、そして、私は、彼が私と同じ水平線に身を置くやうに努めてゐるのだと思ひました。私は、彼がひどく彼の下の者のやうに私を考へてゐるのを少し腹立たしく感じましたが、それとは反對に、彼が私のためにかういふ努力をするのをいゝ事だと考へてゐるのを嬉しくも感じました。

その晩の殘りを、彼はカーチャと用談に過しました。

『ぢやア、さようなら、可愛いゝマーチャ。』と彼は、私の手を取つて云ひました。

『今度は、いつ入らつしやいますか。』とカーチャが訊ねました。

『春まではお目にかゝれません、私はこれから、ダニロフカ(私たちの第二の所有地)へどんな狀態になつてゐるか見に行きます、それから私は、モスクワへ行きます、あすこへはひどく行きたくないんですが。ですが、夏には、度々あなた方にお目にかゝれるでせう。』

『何故、あなたは、そんなに永い間他所へ入らつしやるの。』と私が、悲しげに訊きました。私は、毎日彼に會ふことが出來ると思つてゐましたので、私の悲みが急に戻つて來たほどにも、私の心は、私の希望に對するこの打擊によつて搔亂されました。この事は、私の顏色と聲で知れた筈です、何故といふに、セルゲイ・ミハイロ井ッチはかう云ひましたから——『若しあなたが、いつも急がしく何かして入らつしたら、冬は直ぐ經つてしまひますよ。』

彼の調子と態度は、冷めたくて、靜かでした。『春には、私はあなたを試驗してあげませう。』と彼は私の手を落つるに任せて、かう言ひ添へました、そして、脇を向きました。

私たちが彼を送つて出た玄關の間では、彼は大急ぎで毛皮の外套を着て、私を見るのを避けてゐました。『どうしてだらう?』と私は考へました。彼は、私が彼の注意を求めてゐると思つてゐるのだら

うか。彼は、確かに善い人だ、ほんとに善い人だ、だが、たゞそれだけだ。』

その晩、カーチャと私は、ひどく眠られませんでしたので、長い間話をしました、それは彼の事ではなくて、來るべき夏に就て、また、どうして、何處でこの冬を暮らさうかといふことに就てでした。

それは、私たちの心にとつて大切な疑問でした、だが、それは何故でせう。私としては、人生は要するに幸福であるべき筈だといふのが、明瞭で簡單な事柄でした、實際、私は未來には幸福の外には何事も描かないのでした、ボクローフスコエの私たちの陰氣な古い家は、急に光と日光で充されたやうに思はれました。

二

とう〳〵春が來た！私の憂鬱は消えてしまつて、その代りに、長くずつと續いた、夢見るやうな、目的のない、希望と憧れが來ました。私の生活の形全體が變つてしまひました。私は、ソーニャと一緒にいそ〳〵してゐました、私は、今まで嘗つてなかつたやうに音樂を樂みました、私は、新らしい興味をもつて學課を勉強しました、私は綠の花園の小徑を散歩したり、枝を擴げた樹の下に坐つて、夢見たり、希望をかけたり、考へ込んだりしました——何故そんなことをしたかは、神様だけが御存じなのです。

私は、時々、夜ぢゆう、殊に月夜には、窓の傍にゐました。また、長い外套にくるまつて、カーチャが聞きつけないやうに、靜かに家を拔けだしたり、露臺を彼方此方うろついたりしました、時には、露の中を池まで行つて、心を慰めるやうな花の靜さの中を、花園を見廻つて歸つて來ることさへありました。

その時、私が耽つた多くの空想を憶ひだすのは困難です、で、偶然にも、私がそのうちの或るものをうまく記憶してゐたとしても、私は、それが私自身の頭から出たのだかどうだかを考へることが出來ないのです、それは現實の人生とそんなにも不思議な、そんなにも遠くかけ離れたものでした。

五月の末に、セルゲイ・ミハイロ井ッチが歸つて來ました。彼は、私たちが露臺に坐つてゐて、カーチャが命じた茶を待つてゐる所へ、全く突然に、私たちを訪ねました。

花園は、もうすつかり綠色になつて鶯は密生した灌木林の中にその巢を作りました、そして、彼等はその長も美はしい歌でもつて、明るい溫かな日の終るのを壽いでゐました。茂つた紫丁香花の樹は、香のいゝ白や色づいた芽を一ぱい出して、恰度愛らしい香のいゝ花を開かうとしてゐました、そして、樺木の厚い簇葉は、沈まんとする太陽の赤い光によつて照らされてゐました。露臺には、もう冷たい影が横はつてゐました、花の露は、草の葉に宿つてゐました、そして、花園の後の庭では、人々が動き廻つてゐて、野から歸つた羊の群の鳴聲が聞えました。

お人好しのニイコンは、露臺の前を、水桶を載せて、馬車を驅つて行きました、そして、水撒壺から流れ出る冷めたい水の流れは、天竺牡丹畑の周圍の新らしく堀つた土の黑い輪を描いて行きました。私たちの前の丸い卓子の上には、立派に磨き上げられた湯沸器が輝いて、蒸氣を出してゐるし、クリームや、煎餅や、タート(譯者註、一種の饅頭用の菓子)が、白いダマスク織の白布の上に綺麗に並べられてゐるのでした。

カーチャは、眞に家婦らしい風で、その肥つた白い手で茶碗を持ち運んでゐました、そして、私は、お湯に入つた後なのでひどく空腹を感じて、お茶の用意が出來るのを待ちかねて、新らしい濃いクリームをつけた麵麭を喰べ始めたのでした。私は、袖の開いた、麻布の寬衣を着て、濡れた髮の上に白い手巾を結び附けてゐたのです。

カーチャは、最初に、私たちの友だちの到着を見つけたのでした。『まア、セルゲイ・ミハイロヰチ。』と彼女は云ひました。『まア、嬉しい！私たちは、たつた今あなたのお噂をしてゐたところでした。』

私は起ち上つて、衣服を着換へる爲に逃げ出さうとしました、が、彼は私が廣間の入口に着いた時に私を捕へました。

『田舍で何の儀式が要るものですか。』と彼は私の頭の布を揶揄ふやうに見て訊きました。『あなたは、グリゴリーの前ではその着物を着るのを何ともお思ひにならないでせう、それに、何故私の前ではさうなさるんでせう。』

私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチと年を老つたグリゴリーとは、二人の全く違つた人だと心の中で考へましたが、勿論、私はそんな考は、心の中に祕めてゐたのです。が、それにも拘らず、セルゲイは、私をまごつかせるやうな態度で私の力を見てゐました。

『直ぐに歸つて來ますわ。』と私は彼から身體を振りもぎつて、云ひました。

『あなたの身裝がどうして惡いのです。僕は非常に美しいと思ひますがね。』

『なんて變に、あの人は私を見たのだらう。』と私は、着物を着換へてゐる時に考へました。『有難いあの人が歸つてゐらしたんだ。さア、これから私たちも生々するだらう。』

大急ぎで一寸鏡を見た後で、私は梯子を走り降りて、自分が急いでゐるのを隱さうとも考へずに、息せき切つて露臺へ行きました。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、卓子の傍に坐つて、カーチャと用談をしてゐました。彼の眼と私の眼が出逢つた時に、彼は微笑んだが、その會話を途切らせはしませんでした。彼は、私たちの財產が最も都合のいゝ狀態にあることを報告しました、そして、私たちはこの秋より先きもボクローフスコエに止まる必要がないことや、秋には、私たちは、ソーニャの敎育のために聖ペテルブルグに行つてもいゝし、遊山のために瑞西か伊太利へ行つてもいゝといふことなどを話しました。

『あなたも私たちと一緒に來て下さいましな。』とカーチャが溜息をつきました。『私たちだけでしたら、子供が森の中で迷ふやうに、迷兒になつてしまひはしないかと思ひますわ。』

『私もあなた方と一緒に世界の半ばを旅行したらどんなに愉快でせう。』と彼は、半ば戯談で、半ば熱心に答へました。

『ぢやァ、いゝわ。』と私が云ひました。『みんなで世界一週旅行をしませう。』

『さうしたら、私の母と私の仕事はどうなるんでせう、それは兎に角、私がお暇してからあなた方はどうなすつたか話して下さい。』

で、私は、私の仕事の娯樂に就て彼に話しました、そして、私は寂寥のほんの小さな陰をも感じなかつたことを言ひ添へました。彼は、私が子供で、彼が私の生れながらの保護者でゞもあるやうに、私を褒め、私を愛撫しました。で、私がしたあらゆる賞讃すべき事柄についてばかりではなく、丁度彼が懺悔所にゐて、彼が懺悔聽問僧であるとでもいふやうに、彼が好まないと分つてゐる他の事柄をも、彼に話すのが全く正しいやうに思はれました。

その晩は、非常に美しかつたので、私たちは、お茶の道具を運び去つた後でも、露臺の上でぶらぶらしてゐました。そして、會話が、非常に面白くて、私が、生活と勞働の忙しい騒音がだんゞに止んで行つたのに氣が附かなかつたほどでした。

空氣全體が、花の香で充ちてゐました、露は草を濡らしました、鶯は、手近かの紫丁香花の籔の中で啼いてゐました、そして、綠色の星の多い空は、私たちの上へ蔽ひ冠さつてゐました。

夜が私たちに忍び寄つて來たといふことは、露臺の帆布屋根の下へ一匹の蝙蝠が不意に飛んで來て、その羽叩きする羽で私の白い着物に觸れて行つた時に、私は始めて氣がついたのでした。私は、隅へ行つて立ちすくみましたが、蝙蝠が入つて來た處から庭の暗黑の中に消え去つた時には、殆んど叫び聲を出さうとしたのでした。

『私はどんなにか、あなた方のボクローフスコエを好いてゐるでせう!』と、セルゲイ・ミハイロウ井ッチが、話題を變へて云ひました。

『私は、自分の生涯の殘餘をかうして坐つて暮らしたいと思ひます。』

『ぢやァ、さうなさいまし。』とカーチャが云ひました。

『さうだ、ほんとに、さうなさいましだ。』と彼は繰返へしました。『人生はそれを許しませんよ。』

『あなたはどうして御結婚なさらないのですか。』と、カーチャが尋ねました。『いや、カーチャ、あなた方はどうして御結婚なさらないのですか。』

『私がじつと坐つてゐたからですかね。』と、彼は笑ひながら尋ねました。『いや、カーチャ、あなたでも私でも、結婚のことを考へるのはもう遲過ぎますよ。私の知人はみんな、もう長い間、私を結

婚の出來る人間として考へないやうになつてしまひました。で、私自身も彼等に一致してゐるのです——全くですよ！』

この最後の言葉は、無理に生氣をつけて云はれたやうに私には思はれました。

『詰らないことをおつしやつてますわ。』と、カーチャが云ひました。『三十六になつて、もうこの世を御隱居なさるといふのは。』

『そうです、じつと坐つてゐたいといふのが、今の私の最も切な願ひです、でも、もし私が結婚を夢見たならば、たしかに或る非常に違つた野心が必要になるでせう。彼女に訊いて御覽なさい。』と、彼は、點頭て私を指示しながらいひました。『私たちの間で、あなたと私とで、彼女を誰か立派な人に結婚させなければならない、さうすれば、私たちは彼女の幸福を見ることに於て、幸福になれるわけです。』

私が、逃がさなかつた彼の聲と言葉には、その底の方に苦しさが流れてゐました。一寸の間、彼は全く默りこんでゐました、そしてカーチャも私もその沈默を破らなかつたのでした。

『まア、想像して御覽なさい。』と彼は、自分の座席の上で窮屈さうに動きながら、また云ひだしました、『どんな狀態になるか、もし私がある不幸な不意の出來事によつて、十七になる娘と結婚したとしたら、たとへば、マリヤ・アレキサンドロウナのやうな——これは素敵に良い例を見つけたものだ、飛び切り上等の例だ。』こゝで、彼は笑ひました。そして、何故だか知らないが、私も笑ひました。

『ぢやア、ほんたうに、正直に、話して下さい。』と彼はじつと私を見てつゞけました。『あなたは、まだ若くて水々したあなたの生活と、幸福といふ重要な考が休息と安靜とである、年を老つた、疲れた男の生活と結びつけられるといふのは、大なる不幸であるとは思ひませんか、あなたの心や、情の中には、どんな憧れや熱望が醗酵してゐるかたゞ神樣だけが御存知なのですからね。』

この質問は、私に非常に極りのわるい思ひをさせました。そして、私は實際返答に當惑したので、默つてゐました。

『私は、あなたに結婚を申込むんぢやありませんよ。』と彼は笑ひながら云ひました。『だが、打開けて云つて下さい。あなたが、薄明りの中をたゞ獨り花園の小徑を辿つてゐる時に、あなたが夢見る人は、私が今云つたやうな夫であるかどうか。さういふ夫は、たいへんな煩累で、不幸の原因でせう、さうぢやないでせうか。』

『不幸ぢやないでせう。でも——』と私は云ひ始めました。

『しかし、確かに幸福でもない。』と彼は速かに答へました。

『いえ、でも、私が自分を欺いてゐるのかも知れませんわ。』

『それで澤山、あなたは正しいんです。そして、あなたが卒直に云つて下すつたので、私は滿足です。私たちがこの會話をしたことが、私は嬉しい、何故といふに、かういふ結婚の不幸は若い娘にとつては、非常に大きいやうですが、私にとつては、それよりもゝつと大きいだらうと思ひますからね。』

『あなたは、何て妙な方でせう！』とカーチャは、晩餐を命じに家の中へ入つて行く時に、云ひました。『あなたは、一寸もお變りになりませんのね。』

カーチャが、私たちの傍を去つた後、みんなは、私たちの周圍の自然のやうに靜かであつた。鶯の歌の他には、何の響もしなかつた。そして、その歌は、宵の口のやうに間を置いて響くのではなくて、壓へつけたやうな、長く引つぱつた顫音が、美しい旋律をもつて、花園全體に溢れてゐました。この頃では始めてゞある第二の鶯が、遠くの籔からそれに應へました、一寸の間第一の唄手が默つてゐる、と、やがて、二つの聲が一緒になつて、夜の世界に靜かな諧調を漂はせました。

園丁は、道具小舍の寢床に行くために、傍を通つて行きました、二聲の鋭い口笛が、往還の方で聞えました。夜の微風は、簇葉を動かし始めました。私たちの上にある日覆は、靜かに彼方此方搖れて、風と一緒に、新鮮な香が露臺の上に漂ふて來ました。

『人生は、なんて美しいんでせう！』と彼はとう〳〵云ひました。私は、深い呼吸をつきました。

『どうかしましたか。』と彼が尋ねました。

『さうですわ。人生は美しい。』と私は繰返へしました。そして、私たちは、再び深い沈默に陷りました、私の不安は大きくなりました。それは、私が彼の年を老つてゐると考へたことを承認することによつて、彼を怒らしたのを惧れたのでした。で、私は辯解をするか、說明をしたいと思つたのですが、私にはどうすればさう出來るか解りませんでした。

『おやすみなさい！』と彼はとう〳〵云つて、不意に立上りました。『母が晩食を喰べるために家で待つてゐるのです。私は、今日は母に碌々口も利きませんでした。』

『でも、私はあなたに新らしいソナタを彈いてお聽かせしようと思つてゐましたのに！』

『この次ぎに。』と彼は、冷やかに答へした。『さようなら！』

私は、この時になつて、私が彼は感情を害ねたのだと全然信じました。そして、それが私をひどく悲ませました。尤も、私はどうしてそれを償ふべきかを知らなかつたのですが。

カーチャと私は、彼と一緒に外庭の階段まで行きました、私たちはそこに立つて彼が見えなくなるまで彼を見送りました。やがて、彼の馬の蹄の響が遠くの方へ消えて行きました。で、私は、露臺に歸つて、庭を見ながら、彼方此方歩き始めました。そして、私は、私の想像が見させたり、聽かせたりするものを見たり聽いたりして、濕つた靄と夜の響の中を遙つたのでした。

それから、二三度、セルゲイ・ミハイロ井ッチが訪ねた後、この不思議な會話が私に吹き込んだ、奇妙な不愉快な感情は、消え去つてしまひました。彼はきつと一週に二三度訪ねて來ました。そして、私はやがて、この訪問に馴れて、彼が來ない時には、失望を感じたばかりではなく、この訪問がなければ、殆んど人生が耐え得られないものでもあるやうに思はれたほどでした。

彼は、今ではもう私を親しい友だちとして取扱ふやうになりました、私に忠告したり、同情したり、時には叱つたり、ひどく私を笑つたりしました。そして、彼は信實と單純な親切とにも拘らず、私は、いつでも、彼の性質の底には、私が頒けて貰ふことの出來ない、思想と感情の大きな世界があるやうに感じてゐました。

私は、彼と一緒に住んでゐた母親に對する心遣ひや、彼自身の所有地の管理や、私たちの後見の他に、彼が、恰度その頃、彼に多くの骨折と苦勞をかけてゐる他の用事をもつてゐるのだといふことを、カーチャから聞いてゐました。

けれども、私は、一言でも彼の仕事、彼の計畫や希望に就いて話してくれるやうに彼を誘ふことは出來ませんでした。彼は、いつでも、『どうぞそんな事は訊かないで下さい。あなたに關係のないことなんですから。』とでもいふやうに、妙な風に彼の額に皺を寄せて、話を全然違つた方へ向けるのでした。

最初、この事が私の氣持を惡くさせました。けれども、暫く經つと、私は、私たちに關係したことだけを彼が話すのに馴れてしまつて、それを自然で愉快なことに思ふやうになりました。

また、最初彼が私に對してしたもう一つの事は、彼が私の外貌に對してひどく冷淡だつたことです。彼は、言葉でも眼附でも、決して彼が私を美しいと思つてゐると諷かしたことはありませんでした。いや、その反對で、若し誰かゞ彼の眼の前で私を褒めるならば、彼は眉に皺を寄せて、嘲笑的に笑ふのです。或る特別の場會に、カーチャが私に着けさすのが好きな流行の着物や頭飾は、彼から皮肉と嘲笑を受けるだけで、それがカーチャと私を困らせました。

彼が私を好いてゐると、自分の心の中で決めてゐた可哀想なカーチャは、私が一ばんよく似合ふやうに、凝つた身裝をした時は、何故彼が私の方を見ないかゞ解らなかつたのです。が、私は、やがてその理由を了解しました。彼は、私が全く虛飾に捕はれないやうに望んでゐたのでした。で、それがわかると、私は、着物や擧動に媚びの痕跡が一つもないやうにしました。が、その後、私は、簡素そのものでもつて媚びるやうになり始めました。

それが、女としてであるか、子供としてゞあるかはまだ私には問題とならなかつたのですが、私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチが確かに私を好いてゐるのだと感じました。そして、私は、彼から私が彼の望んでゐるやうな者でないと思はれたくなかつたので、知らず識らず彼を欺きだしました。尤も、私

は、有りの儘よりもよく見せるやうに努力したならば、實際によくなるのだと考へてゐたのですが。

私の外貌は、彼には熟知されてしまつて、欺くことが出來ないのを私は知つてゐたのですが、彼は充分に私の心を知りませんでした。で、この點では、私は彼を欺くことが出來たのです。彼が、戯談に紛ぎらさうと努めた感情で、『さうだ、實際あなたには、何かあると信ずる。』と私に云ふ時にはいつでも、どんなに私は幸福だつたでせう。

では、どんな場合に、彼が、嫉しさのために私の心を踊らせるかういふ言葉を吐いて、誇りと滿足を以て私を充たしたでせうか。

それは、私が、その小さな孫に對する年老つたグリゴリイの愛を了解することが出來たといふことを云つた時か、何かの物語か詩を讀んで感動して涙を流した時か、私がシュールホフよりもモツァルトの方がいゝと云つた時かに限るのです。今から振り返つて見ると不思議に見えるのですが、誤らざる本能を以て、善なるものや、眞實なものを選ばうとしました、そして、私がそんなことをするのには何の理由もなかつたのです。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、決して私の娯樂や仕事に干渉しませんでした。が、私が以前に好いてゐたことを全く好かないやうにするには、彼は自分が眉を一種特別な動かし方をすればそれでいゝのでした。若し彼が何事かに就て私に忠告しようとする時には、私は、彼が何を云はうとしてゐるかを

前以て察しました。若し彼が眼附で何事かを私に尋ねやうとする時には、この眼附が、直ぐに彼の知らうとしてゐる考を私の心の中から引出すのです。實際、私の生涯のこの時代に於ける私の思想と意見は、私自身のものといふよりは寧ろ、私の他の鈍いものを輝かし照らすために私に貸與へられた彼自身のものであつたのです。」

私は、無意識に、異つた眼で一切の人——カーチャや、ソーニャや、召使ども——を見るやうになりました。新たな光の中に現はれた私自身の仕事でさへも、さうでした。以前には時を過し、寂しさを忘れる唯一の手段であつた讀書が、今では私の重る悦びとなりました。何故といふに、セルゲイが選んだ書物を私たち二人で讀むのですから。ソーニャに物を敎へることは、以前には私にとつては苦しい仕事でしたが、彼の監督の下では、ソーニャの進歩が、私の最高の誇りになりました。

以前には、私は音樂の一曲を完全に練習することは不可能だと思つてゐましたが、今では、私は『●●の人がそれを聽いて、多分それを褒めるだらうといふことがわかつてゐました。そして私は、同じ曲調を四十遍も、氣の毒なカーチャが、失望して、音を遮ぎるために耳へ綿を詰めるまで、疲れずに繰り返へすことが出來ました。

私が自分の一部分であるほどに愛してゐたカーチャも、また、私の眼には、新らしい人間になりました。この時始めて、カーチャが、母親として、友だちとして、私やソーニャの奴隷として働くのが

彼女には重い義務ではなかつたのだと私は思ひました。それから、この時始めて、カーチャの愛すべき性質の自己犠牲と獻身や、私が彼女に對してどれほど多く(一)義務を負ふてゐるかといふことや、私がその義務をすつかり果すのが全く困難だといふことを私は了解しました。

私はまた、この地所にゐる僕婢の勞働者に對しても、すつかり別の考を抱くことを敎へられました。私は、十七年の間彼等の中に暮らして來たのですが、彼等も私と同じやうに、愛したり、願つたり、惱んだりするのだといふ考は、一度も私の心に起りませんでした。且つまた、私が生れて以來知つてゐる私たちの花園や、私たちの森や、私たちの田野が、急に私には新らしいものに見えて來ました、そして、私はその美を嘆賞しました。

或る日、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、人生に於けるたゞ一つの實際の幸福は、他人のための生活の中にあると云ひました。最初それは私には非常に變に思はれましたが、だん〳〵彼の意味が明瞭になつて、全く私自身の特種の樂みと衝突せずに、新らしい興味と悅樂の大きな世界が、私の前に開けて來ました。私の子供の時代から、陰鬱と沈默との中で包まれたまゝになつてゐた一切のものが、俄かに生々として來ました。それらの物が私の心を幸福で充しながら、顯はに語り出したり、心に訴へたりするためには、セルゲイ・ミハイロ井ッチの姿が見えさへすればよかつたのです。

その愛で、私は床へ入つても睡られぬことが度々ありました。時とするとと、私は起き上つて、カー

チャの傍に坐つて、どんなに私が幸福であるかを繰り返し〳〵彼女に語りました。そんなことは、今想ひ出す通り、彼女には解つてゐたのですから、全く不必要なことなのでした。いつでも彼女は、彼女もまた幸福で、現在の生活に全く滿足してゐると云ひ〳〵しました、が、時々、彼女は眠くなるのでした、それで、私を叱つて、床へ入れと云ひました、私は床の中で、來るべき幸福の期待でもつて身震ひしながら、多分何時間も眼を醒ましたまゝ横になつてゐるのが常でした。

時とすると、私の胸が一ぱいになつて、私は起き上つて、私の生活の上に下し賜はつた祝福に對して神樣に感謝するために、二度も跪くことがありました。そんな時には、どんなに靜かだつたでせう！眠つてゐるカーチャの規則正しい呼吸と、私の懷中時計の單調なカッチ〳〵や或は閉ぢ込められた蠅の唸聲が聞えるだけです。戸も鎖戸も鎖されてゐました、そして、私は部屋を出るのを決して嬉しく思ひませんでした、私が經驗した感覺を追ひ出す曉を見るのを決して嬉しく思ひませんでした。

私の夢や、憧れや、祈りは、私のために闇黑を集め、私の寢床の傍に坐り、枕の上を翔け廻りました、そして、一つ〳〵の考はあの人に關係してゐたのです。一つ〳〵の感情はあの人のためだつたのですけれども、その當時は、私はそれが戀であることをちつとも知りませんでした。

収穫の終る頃、或る日の晝過ぎに、ソーニャとカーチャと私は、晝飯を濟ましてから、庭へ出て、古い菩提樹の下の、私たちの氣に入りの席に坐つてゐました。それは往還の近くで、私たちは、往還を隔てた彼方に、茂つた森のある畑を眺めることが出來ました。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、三日間ボクローフスコエに來ませんでしたが、彼が收穫の畑を見て來るといふ約束をしたと云ふので、その日の午後は確かに彼が訪ねて來る筈でした。

二時頃に、私は、彼が刈り手の忙しい群の中を彼方此方馬で乘り廻はしてゐるのを見ました。カーチャは、彼が大好きな桃と櫻實を持つて來させました。そして、彼女は後へ倚りかゝつて、手巾を顏の上へ載せて、眠つてしまひました。私は、彼が來る筈の畑に通ずる小徑を見守りながら、カーチャを煽いでやるために、菩提樹の枝を折りました。

ソーニャは、木の切株に坐つて、彼女の人形のために四阿を建てゝゐました。日は熱くて、風がちつともありませんでした。時々、私は遠雷の鳴るのを聞き、水平線を縁取つてゐる黑い雲の端から出る稻妻の閃きを見ました。

すぐ傍の路上には、穀物を積んだ大きな荷馬車が、キイ〳〵車の音をたてながら通り過ぎてゐました、そして、積荷を下すと、ガラ〳〵音をさせながら戻つて來ました。その車の上には、農夫が鞭をパチ〳〵いはせ、襯衣をバタ〳〵させながら立つてゐるのです。埃塵の深い畑から多くの人聲が聞えて來ました、そして私は、黃色い刈束を結んでゐる女たちが、彼方の森のくすんだ綠色に對してはつきり浮彫になつてゐるのを見ることが出來ました、私の目の前で、夏が秋に代りつゝあるのでした。

けれども、そんなに多くの人が、埃塵と熱の中で、勞れて働いてゐるのに、カーチャは彼女の軟かな白麻布の蔽ひの下で眠つてゐました、黑い汁の多い桃實の皿は、園卓の上に旨さうに載つてゐます。古い水瓶の中の氷水は、太陽の光で虹色に輝いてゐました、そして、私は非常に幸福でした。

『こんないゝ目に逢ふ爲めに、私は何をしたのだらう。』と、私は考へました。『私の幸福を他人に頒けるのにはどうしたらいゝのだらう。』

太陽は菩提樹の並木の後に沈みつゝあり、畑の埃塵は鎭まつてゐました、遠方の丘は、集められた薄明りで紫色になつてゐました。並木のむかふの、穀物倉の側に、私は、三つの新らしい稻叢の尖が立つてゐるのを見ることが出來ました。穀物の最後の荷馬車の荷積が去つてしまつて、それから、その肩には、叉把をかつぎ、その帽子に小麥の穗をつけた勞働者たちは、唄をうたひながら家に歸つて行きました。けれども、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、まだ來ませんでした。

不意に、彼の背の高い姿が、先刻私が彼を待ち受けてゐた方向とは全然別の方向に現はれました。晴れやかな顏をして、帽子をあげて彼は私の方へ近づいて來ました。カーチャが眠つてゐるのを見ると、彼は唇をかたく結んで默頭いて爪先きで歩いて來ました。私は直ぐに、彼が彼の最も快活な氣

分の一つ――それは私たちが彼の『狂人じみた快活』と名附けてゐた氣分です――でゐたのを悟りました。

『今日は、小さな菫さん！如何ですね、御機嫌かね。』と彼は私の手を握り締めながら尋ねました。

『僕は頗る上機嫌だ。』と彼は、私からの同じ問ひに答へて、云ひました。『今日は僕は十三の子供だ、お馬の遊びでも、木登りでもしますよ。だが、可哀相なカテリナ・カルロウナはどうしたといふんですね、あなたは、そんなに彼女の鼻を打つたりなんかして。』

その時始めて私は、私が彼女の手巾を除つてしまつたので、私の菩提樹の杖が彼女の罪のない顔を打つてゐたのに氣がつきました。私は笑ひました。

『構ひませんよ、この女が起きたら、きつと寢入つてゐたのぢやないと言ひ張るでせうよ。』と私は低聲で囁きました。カーチャの目を覺まさない爲めにといふよりは、内密話の調子で話をするのが嬉しかつたために。

セルゲイは、恰度それが禁斷の果實でもあつたかのやうに、櫻實の皿を摑んで、ソーニャの遊びの家へ行つて、彼女の人形の席へ坐りました。ソーニャは、不機嫌でした、が、彼はただ笑つて、彼女が不機嫌なのは、彼が櫻實をみんな與らないからだといつて彼女を揶揄ひました。しかし、二人は直ぐに和睦して、一所に櫻實を食べ始めました。

『もつと採りにやりませうか、それとも、私たちが採りに行きませうか。』と私は訊ねました。

答へる變りに、彼は皿を取りあげて、その上にソーニャの人形を載せました、それから、私たちは濕室へ行きました、ソーニャは後から追ひかけて來て、彼女の人形を彼が返すまで、彼の上着の裾を引張りました。

『あなたは菫さんに違ひない。』と彼は云ひました。『今日私が、この近所へ來ると、菫の香ひのやうなものが、私を包んだやうな氣がしましたよ、温室の菫は強い香ぢやないんです。早春の解けて行く雪の間から覗く、早咲きの黒菫の、微かな、甘い吐息ですよ。』

『今日は、畑の樣子はどうでしたの。』と私は、彼の言葉が私の心の中に呼び醒ました祕密の感情を隱くさうとして、訊ねました。

『頗る上首尾、この邊の人は信用が出來ますね、彼等を知れば知るほど、心を籠めて尊敬するやうになりますよ。』

『さうですよ。』と私は答へた。『今日も、あなたが入らつしやる前に、私はあの人たちが仕事をしてゐるのを見ましたの、そして、困難と勞働に充ちたあの人たちの生活と比較して、私の樂な、役に立たない生活を恥しく感じましたわ。』

『さういふ風な、そんな感情で、機嫌をとつてはいけませんよ。』と彼は眞面目で云つた。『神樣は、

かういふ人たちの送つてゐる生活をあなたが經驗するのを禁じてゐらつしやるのですよ。だが、櫻實はどこにありますか。』

温室は、錠がかゝつてゐて、園丁は一人も見えませんでした。ソーニャは、鍵をとりに走つて行きましたが、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、それを待たうとはしませんでした。彼は、塀を攀ぢ登つて、綱を揚げて、その下へ飛び込みました。

『櫻實が要るんなら、皿をお出しなさい。』と彼は云ひました。

『いえ、私は自分で摘りたいんですの。鍵をとつて來ませう、ソーニャにはきつと分らないでせう。』と私が答へました。

しかし、その瞬間に、彼が誰も自分を見ないと思つてゐる時に、彼を見ようとする名狀し難い願ひが、私を襲ひました。私は、温室の他の側を爪先でこつそり歩いて行つて、そこに立つてゐる空樽の上へ乘りました。そして、塀の上へ倚りかゝつて、黒い、甘い果實の實つてゐる、古い節くれ立つた木の茂つてゐる家の中を覗き込みました。一瞬間の後、私は、その眼を閉ぢその帽子を脱いで、一本の古い木に倚り掛つてゐる、セルゲイ・ミハイロ井ッチを見ました。彼は明らかに　私は去つてしまつたので、誰も自分を見てゐないのだと思つてゐるのでした。樹の切株の上に坐つて、彼はその指の間に謬誤の片をまるめてゐました。それから、不意に、彼は、その肩をすぼめ、目を開き、微笑んで、

一言云ひました。この言葉は、私が、自分の人目を偸む行動を恥かしく思つたほど、私を驚かしました。私は、彼が『マーシャ！』と云つたのだと思ひました。

『そんなことがある筈がない。』と私はひとり考へました、が、恰度その時、彼は前よりも、もつと優しく『可愛いマーシャ！』と繰返しました。

私はこの言葉をはつきり聞きました。私の心臟は、嬉しい感情の突進で以て烈しく皷動し、私が自分の落ちるのを防ぐ爲めに塀を摑まなければならなかつたほどでした。

しかし、私の無意識の身動きが、彼に聞えました。彼は見上げて、眞赤になりました。二人の目は出會ひました。そして私は笑つたのです。すると、彼の顏は喜びに輝いたのでした。彼の顏は、幸福でもつてすつかり燃えてゐるやうに見えました、で、彼は、もう服從されたり、尊敬されたりする年を老つた愛嬌のある、叔父ではなくて、私を愛し、私を怖れでゐる、そして、私もまたその人を怖れて愛してゐるさういふ人と同じやうな男でした。

一二分の間、一言も言葉がありませんでした。と、彼は眞面目になりました。彼の唇の上の微笑と、彼の眼の中の光が、消えてしまつたのです。それは恰度、私たちが何か惡い事をしたとでも云ふやうでした、彼が、それに思ひ至つたので、自分に勝たうと努力して、私にも同じやうにしてくれと云つてゐるやうでした。彼は、兄のやうな冷淡さで私にふりかへつて言ひました——『お降りなさい、落

ちて怪我をするかも知れませんよ。そして、髪を撫でつけなさい。何といふ恰好をしてゐるのです！』

私は氣が沈みました。『何故、彼は匿さなければならないのだらう、そして私をこんな風に取り扱はなければならないのだらう。』と私は考へました、そして彼に對して、私の力を試さうとする大きな望みが、私を捕へました。

『いえ、私は櫻實が採りたいのです。』と、私は答へて、兩手で一番近い枝を攫んで、塀の上で身體をぶらぶらさせて、彼が一言いふ前に、溫室の中へ飛び込みました。

『何といふ馬鹿な眞似をするんです！』と、彼は叫びました。實際この私の仕業は、それをするや否や、私をしてひどく極りわるく感じさせたのでした。

『あなたは怪我をしたかも知れなかつた。』と、言ひ添へました。『あなたどうして外に出るつもりです。』

この時、彼は前よりもつと間誤ついてゐるやうに見えました。けれども、彼の困惑はもう私を喜ばせはしませんでした。その反對に、それは私を怖がらせました。私も亦、困惑を感じたのです。私は顏を赤らめて、どう云つていゝかわからないので、腋の方へ身を引きました。そして、私は果實を集め始めましたが、どこへそれを置いていゝか解らなかつたのです。私は自分を咎め、後悔して、怖れを感じました、そして、私は、自分の淺墓な行爲によつて、彼の眼の中で、器量を下げたやうに思はれました。二人は當惑の狀態で、ソーニャが鍵をもつて歸つて來て、私たちを救つてくれるまで、默つてゐました。でも、まだ、私たちはお互に話を避けて、その代りに、ソーニャに話しかけたのでした。

私が前に見透したやうに、睡り込んでゐたのではないと言張つたカーチャの傍へ私たちが歸つて行つた時に、私は幾らか樂に感じました。セルゲイ・ミハイロ井ッチは、この時、例の年を老つた父のやうな口調と態度を執つてゐました。しかし、私は、すこし前にした會話を憶ひ出しましたので、そのことに欺かれはしませんでした。カーチャは、自分の戀を言ひ出すことは、男にとつては當り前のことだが、女が人から云はれもしないのにそんなことをしたら、全世界がその女を叱責するだらう、と云ひました。

『さうぢやない。』とセルゲイ・ミハイロ井ッチが答へました。『男でもその戀を云ひ出せない場合が屢々あるものですよ。』

『何故云ひ出せないのでせう。』と私が訊きました。

『いや、人は、云ひ出したら最期、何か驚くべき現象が起るやうに思ふからですよ。私の考へでは眞面目で、「私はあなたを戀してゐます。」といふ男は往々自分を欺いてゐるか、もしくは、もつと惡いことには、他人を欺くものなのです。』

『ですが、男が何も云はなかつたら、女はどうして自分が愛されてゐることを知るでせう。』と、カーチャが云ひ張りました。

『それは僕には解らない。もし感情があるとすれば、それはきつと自然に現はれるでせう。私が小説を讀むと、ストレーリスキイ中尉や、サー・アルフレッドが、『私はあなたを愛してゐます、エレオノーラ！』といふ時に、どんな馬鹿面をしなければならないかを想はずにはゐられない。彼等は、その時、何か異常な事が起るだらうと考へるのです、けれども、彼等にも、女にも、全く何も起らないのです、顔や、目付や、その他の何でもかでも、全く舊のまゝなのです。』

此時、私は、この戯談が或る匿された感情の藏ひであつたのを知つてゐましたが、カーチャは、彼女の小説の主人公たちが、そんなに、輕蔑して取り扱かはれるのを聞いて、非常に弱つてゐました。

『永久の謎だ！』と彼女が焦焦してつぶやきました。『眞實のことをおつしやいよ、セルゲイ・ミハイロヰッチ、あなたはまだ一度も女の人に愛してゐるとお云ひになつたことがないのですか。』

『いや、私は一度も女の前に跪いたことがなかつた。また、そんなことをしようとも思ひません。』と、彼が快活に答へました。

『彼は私を愛してゐるといふ必要がないんだ。』と私は、溫室の中の光景を思ひ出して考へました。『私は彼が私を愛してゐるのを知つてゐる。で、彼がどんなに技巧を使つても、私の意見は變らないだらう。』

その宵ゆぢう、彼は私に話しかけませんでしたが、私は彼の言葉の一つ々々に、彼の身振りや、彼の目附の一つ々々に彼の愛を見出したのです。たゞ一つ私を感動させたのは、萬事がもうそんなに明瞭になつてゐたのに、私たちが、こんなに容易に云ひ盡せないほど幸福であるのに、彼がまだ、自分の愛を隱すのを必要と考へ、無頓着を裝つてゐたことでした。けれども、それとは反對に、私は、彼と一緒になる爲めに、溫室の中へ飛び込んだのが、惡かつたやうに感じてゐました。そして、私にはまだ、彼はもう私を尊敬し得ないし、私に對して腹立たしく感じてゐるに違ないと、思はれたのでした。

お茶の後で、私はピアノの傍へ行きましたが、彼は私に隨いて參りました。

『何かお彈きなさい。私はずゐぶん暫くあなたのを聽かなかつた。』と彼が云ひました。

『私は知り度いんですの……セルゲイ・ミハイロヰッチ――』と私は云ひ出しました。そして不意に、眞直ぐに彼の目を見詰めました。

『私は知りたいんですの、あなたが私のことを怒つてゐらつしやるかどうか。』

『どうして。』

『今日お晝過ぎ、私が云ふ事を聞かなかつたから。』と私は顏を赧らめて答へました。

彼は私の言ふことを了解して、その頭を振つて微笑み始めました。そして、その微笑は、實際私を

怒りたいのだが、彼はそうする事に必要な力を感じないのだと語つてゐました。

『あの事はもう濟んだのですもの、さうぢやない？で、私たちは又、仲の良いお友達になつたのでせう。』と私はピアノに坐つた時に云ひました。

『さうですとも、無論。』と彼が答へました。

長い、高い部屋は、ピアノの上の蠟燭が照してゐるだけでした。部屋の中の他の部分は、眞暗でした。開いた窓から、夏の夜の和かな空氣が忍び込みました。カーチャが彼方此方歩いてゐる規則正しい足音と、主人を待つてゐる、セルゲイ・ミハイロ井ッチの馬の焦々した嘶きとを除いては、一切の物音が押し默つて來ました。

彼は、私の後に坐つてゐたので、私は彼を見ることが出來ませんでしたが、暗がりの中に、部屋を充してゐた諧調の中に、私は彼のゐるのを感じました。彼の目附と擧動の一つ々々は、私はそれを見ることが出來ませんでしたけれども、私の心臟を貫きました。私はモツァルトの幻想曲を彈きました。そして、私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチのことを考へて、音樂のことを考へてゐなかつたのですが、うまく彈けて、彼を喜ばせたのを感じました。私は、彼が感じた歡樂を頒ちました。そして、彼の眼は、私の上にじつと注がれてゐるのだと思ひました。私の指がまだ鍵板に觸れてゐたのに、その指が何をしてゐるかは知らなかつたのですが、無意識の動作で、私は、見廻はして、光のある空氣に對つ

て立つてゐる彼の頭を見ました。彼は自分の手の上にその額を置いて、邨いた眼で注意深く私を見詰めてゐました。彼の視線を捕へた時に、私は微笑んで、彈くのを止めました。彼も微笑みました。そして、續けてくれと云ふやうに、非難するやうな風で、ピアノの方に向つて、頭で指示しました。私が彈いてゐた間に、月が昇つて、開いた窓から月光が流れ込み、此の時、その銀のやうな光は部屋中に漲つてゐました。カーチャはぶら〳〵歩きを止めて、曲の最も美しい部分で中止するのは、良心に反くことだと云ひました。それから又、私がひどく不注意で彈いてゐたと云ひました。

けれども、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、私がこんなにうまく彈いたことが無いと答へました。それから、彼は、月あかりのさす部屋から暗い廣間へと彼方此方を、その度毎に、微笑んで私を見つめながら、歩き出しました。私も微笑みました。何の原因もないのに、私は聲を出して笑ひたくなりました。そんなに私は幸福を感じてゐたのです。私はカーチャの頸の廻りに兩腕を投げかけて、彼女の顎の下の丸い喉に接吻しました。が、セルゲイがまた部屋へ入つて來た時に、私はまだ笑ひたかつたのですが、眞面目な表情をしました。『今日は、あなたはどうかしたのですか。』とカーチャは困つたやうな顏をして彼に云ひました。彼はそれには答へずに、たゞ私をちらと見て微笑みました。

『何といふ夜でせう！』と彼は云つて庭の方へ歩いて行きました。彼たちもそのあとへ隨いて行きました。實際、私はそれ以來あんな夜を又と見たことがないと思ひます。滿月は家の上の晴れた空に

かゝつて、彫像と日覆の陰影が、私たちの前にある小徑と芝生の上に落ちてゐました。溫室の硝子の覗屋根は、白い光に輝いてゐました。そして巾の廣い庭の小徑は花壇の間に延びてゐて遠方の霞の中に消えてゐました、私たちの右手の家の陰影は、眞暗で神祕的でした。が、それと對照すると銀のボラの夢のやうな尖端はもつと生々してゐます。それは深綠の空へ飛んで行く爲めに翼を廣けてゐるとでもいふやうでした。『散歩をなさいませんか。』と私は訊ました。

カーチャは、贊成しました。けれども、私が下靴を穿かなければ、と云ひました。

私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチが腕を借して下さるだらうと冷やかに答へました。恰度、さうすれば私の足が露に濡れないとでもいふやうに。けれども、誰もその言葉に常と異つた或る意味を見附けたやうには思はれませんでした。セルゲイは、今まで、私に腕を借してくれたことはなかつたのですが、此の時、私は彼の腕を取りました。そして、彼は、私がそうしたのを驚いたやうには見えませんでした。私たち三人は出かけました。私の周圍にある小さな世界全體や、空や、花園や、私が呼吸してゐる空氣は、もう同じものゝやうに見えませんでした。私の前の小徑を見下すと、恰も先へ行けないやうに、世界がそこで盡きてゐるやうに私には見えました。

それから又、一切のものが、動きと變化のない美に硬化つてしまつたかのやうに見えました。けれども、だん〳〵にそれは又、見馴れた花や木のある、光と影の混り合つた私たちの庭になりました。

私の足音や、カーチャのキウ〳〵いふ靴と、歩調を合はすのは、實に彼の靜かな規則正しい足音でした。やさしい月は、菩提樹の並樹の交錯した枝の間から見下ろしてゐました。或る瞬間に、私はあの人を見ました。小徑のその場所は、樹がなかつたので、一ぱいの月光を浴びた彼の顏が、私に見えました。彼は、非常に美しく、非常に幸福さうに見えました。

『おや！蛙がゐる。』と不意に、私の傍で一つの聲が云ひました。

『誰が云つたのか、そして何故。』と、私は、それがカーチャの聲で、彼女は蛙を怖がるのだといふことを憶ひだすまで、不思議に思ひました。私は、小さな奴が私の足下から飛びだして、私たちの前にじつと動かずに坐つて、その小さな陰影が道の上にはつきり映されてゐるのを見ました。

『あなたは、恐くはありませんか。』とセルゲイ・ミハイロ井ッチが訊ねました。私は、彼を見上げました。彼は、『あなたは怖くはありませんか。』と云ひましたが、私の訊いた言葉は『私はあなたを愛する、愛する者よ！私はあなたを愛する！』と云ふのでした。そして光や、影や、空や、地面が、みんな何遍も、『私はあなたを愛する。』と繰返しました。

私たちは、カーチャがもう家の中へ入る時間だと云ふまで歩きました。私は、何故、カーチャが私のやうに若くて幸福で愛されてゐないかと考へて、この哀れな人を可哀相に思ひました。

私たちは、家へ入りましたが、彼はまだ長い間、歸りませんでした。カーチャがもう遲いと私たち

にいふのを忘れたので、私たちは互に間近かに座つて、朝の三時だとは夢にも考へないで、いろ〳〵の事柄、罪のない事柄について話しました。彼が去つた時に、雄鶏が三度鳴きました。彼はいつもの風で、特別に何も云はないで、歸つて行きました。で、私は、この時、彼が自分のものでないが、私は彼を失ひもしなかつたことを知りました。私は、彼を戀してゐると、心の中で思ひましたので、カーチャに萬事を打ち明けました。カーチャは喜んで、私が彼女に打明けたのを甚く感動してゐました。が、哀れな彼女は間もなく寢入りました。私はどうかといふに、長い間庭へ出て、その晩の一語々々と行動の一つ〳〵を思ひ出さうとしました。それから何遍も、私たちが一緒に通つた道をぶらつきました。

私は、終夜床へ入りませんでした。で、生れてから妙めて日の出を見、曉方がどんなものであるかを知りました。私は、そんなに夜や朝を樂しんだことは一度もありませんでした。たゞ私は、何故彼が私を愛してゐると單純に私に話さなかつたのか、と、心の中で訊くのでした。『何故、彼は事をむづかしくするのだらう。』と私は考へました。『何故、私は彼が、萬事がこんなに容易く決定してゐるのに、自分が年を老つてゐるなどゝ云ふのだらう。何故、多分再び歸つて來ない貴重な時を失ふのだらう。彼は、彼が私を愛してゐると私に云はなければならないのだ。彼は自分の手で私の手を握つて、頭を下げて、『私は愛する』と云はなければならないのだ。或る閃きで、彼が私の前で目を伏せたなら、

その時、私は萬事を彼に打ち明けるだらう。いや、私は何も云はないで、私の兩腕で、彼を締めつけて、泣き出すだらう。だが、若し私が間違つてゐたとすればどうだらう。若し彼が私を愛してゐなかつたとしたらどうだらう。

かういふ考が、不意に私の心の中を通り過ぎました。私は怖くなりました。どんなに遠くまで私の感情が、私を連れて行つたかを知つてゐるのは、神樣だけでした。彼の告白と私が彼と一緒になるために飛び込んだ時、溫室の中での私の告白との回想が、既に私に心の苦しみを與へたのでした。涙が私の目を濡ほしました。私は祈り始めました。と、私は安靜を與へ、私の家に希望を甦らせる一寸奇妙な考に捕はれました。私は信心を始めて、私の誕生日を私の許嫁の日に選ばうと決心しました。どうして、何故?どうしてそんな事が實現出來るでせう?私には、解りません。が、その瞬間から私はさういふ風になるだらうと考へました。私がこんな風に考へてゐた間に、すつかり明るくなつてしまひました。そして、實際誰れも彼れも起き出しましたので、私はとう〳〵自分の部屋へ入つてやすみました。

四

聖母昇天祭の斷食が始まりましたが、私の誕生日はその週の終りに當つてゐるので、聖餐を受ける

準備をするといふのは、私にとつて、全く自然な事でした。

セルゲイ・ミハイロ井ッチはその週ぢゆう私たちの傍へ來ませんでしたが、この無沙汰は、私の感情を傷つけたり苦しめたりするどころではなく、私は、たゞ、私の誕生日に彼が來るのを待ち望んで喜びを感じてゐました。その週は毎日私は朝早く起きて、たゞ一人庭を散歩して、再び同じ過失に落ち入らないやうに、過ぎ去つた日の怠慢と違犯の罪を追想しようとしました。

早い朝飯を濟ませた後で、馬車が轢き出されると、カーチャか、女中の一人が私と一所にそれに乘つて私たちは教會まで三哩の間馬を驅つて行くのです。教會に着くと、私は『神を怖れて入つて來る人々』の爲めに祈られるのだと云ふことを思ひ出しました。そして私は、非常に注意して敬虔な心を持つて、二段か三段の草の生へた階段を登つて行くのでした。

日中のその時間には、いつでも、十人か十一二人の人が來てゐるだけでした。それは重に勞働者か農夫でした。私は親しさと、謙遜をもつて彼等の辭儀に答へて、いつでも、聖像の前に供へる燈の點つた蠟燭を、聖器監守人(一人の老兵士)から買ひました。內陣の天門を透して母が刺繍した神壇掛が見えました。それから、聖扉の上には、私の子供らしい目には非常に大きく見えた、星を鏤めた衣裳を着た、二人の天使がゐました。そして、天使の上を、私の幼い心には、驚異と嘆賞の永久に絕ゆる事なき源であるとも見える黃金の圖光をもつてゐる鳩が翼けてゐました、內陣格子の後には、私が

以前に洗禮を受けた洗禮盤が立つてゐました。老祭司は、私の父の柩蓋でこしらへた法衣を着て、彼が、ソーニャに洗禮を施し、私の父と母を埋葬した時に彼が用ひるのを私が聞いたのと同じ單調な聲で、彌撒を讀みました。それから私は、これも耳馴れた唱歌手のカラ〳〵いふ聲と、私が記憶してゐるかぎりいつでも教會で見た婆さんの聲を聞きました。その婆さんは、いつでもそこにゐるので、壁に倚りかゝつて、握り合はせた手の間に手巾を挾んで、內陣の上にある聖像の一つを涙の滲んだ目で見詰めて、齒のない口で祈りをつぶやいてゐるのでした。私は、敬虔な心で祈禱に和して、熱心に神樣に對つて、私が理解しない場合には私の心を開き、無智な爲めに私が過失をする時には、私を宥して下さるやうに願ひました。悔告祈禱文が讀まれる時には、私は自分の過去の生活を思ひ出しました。と、その過ぎ去つた自分の無邪氣な子供時代は、現在の、私の魂の靜隱に比べると、私には眞暗に見えて、私は怖ろしさに心の內で泣くのでした。けれども、それと同時に私は、自分が許されたのを感じました。そして、若し私がまだもつとたくさんの自分を責む可き罪を持つてゐたならば、私の悔悟は、もつと快よかつただらうと感じました。老祭司が、『神の祝福汝等と共にあれ。』と云つた時に、それは恰度、實際の肉體上の慰めと保護が私に與へられたかのやうでした。そして私の心は、光と溫かさで漲りました。禮拜式が濟んで、老僧が、私の傍へ近づいて、夕の祈りを讀むために私たちの家へ行つてはならないかと私に訊いた時には、私はしみ〴〵彼の申出を感謝して、私が教會へ來ること

にしようと彼に告げるのでした。

『實際あなたが來て下さらうとおつしやるんですか。』と彼が尋ねました。

私にはどう答へてよいか解りませんでした。私は高慢のために罪を犯しはしないかと思ひました。

カーチャが私と一緒に來ない時は、何時でも、私は歩いて家に歸りました。沉濤道を歩き出す事が出來るといふのは、實際愉快でした。それは恰度、自分一人の快樂を犧牲にして、何か精神的に、善なるものを得てゐるとでもいふやうに。

或る晩、私は、農夫のシモンが、その日死んだ娘の棺を作るために、いくらかの板を貰いに來たと、私たちの執事がカーチャに話してゐるのを聞きました。

『あの人たちは、そんなに貧乏なの。』と私が訊ねました。

『貧乏で御座いますとも、あの人たちは麵麭につける鹽さへ持つてをりません。』との答でした。

この答は、何か鋭いものが私の心臓を貫いたかのやうでした。それと同時に、私はこの事を聞いたのが嬉しいやうな氣がしました。散歩に行つて來るとカーチャに云つて私は階段をかけあがつて、私の持つてゐるたお金をみんな(實際それは澤山ではありませんでした)集めて、庭を通りぬけて、村の方へ驅けて行きました。私は誰れにも見られないで、シモンの小舍へ行つて、お金を窓闕の上に置いて、戸を叩きました。キィ〳〵いふ戸が開かれて、一つの聲が訊ねました。『誰れだね。』と。私は罪人のやうに畏縮して昂奮して慄へながら、出來るだけ早く家へ走り歸りました。

歸ると、カーチャが、どこへ行つてゐたのか、何か事が起つたのか、と私に訊きました、が、私は彼女の云つた事を會得することさへ出來ませんでした。で、私は、彼女に答へませんでした。私は部屋の中に閉ぢ籠つて、何事をすることも出來ないし、考へることさへも出來ないし、實際、自分が經驗した感覺を思ひだすことも出來ないのを感じて、歩き廻つてゐました。私は、シモンの家族の悅び、彼等がお金を殘して行つてくれた人に注ぐ祝福を心の中に描いて見ました。そしてこの時、私は自分で彼等にお金を渡さなかつたのを後悔しました。私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、私のした行爲を知つたなら、何と云ふだらうと自分の心に訊いて見ました。そして、私は、私が決してそれを知る筈がないのを嬉しく感じたのです。と、實際、私は喜びに充され、自分に對しても、他人に對しても滿足に感じて、死といふ思想でも幸福に充ちてゐるやうに私に見えたほどでした。私は微笑み、祈り、泣きました。そして不意に、私は、不自然な熱情をもつて、地上のあらゆる人を、私自身をもくるめて、愛しました。

私は、可なりの時を福音書を讀んで過しました。そして、私はそれを讀めば讀むほど、その神々しい生活の物語がますます單純な、安靜なものに見え、福音書を通じての私たちの未來の生活の希望が、ますます堅固で安定したものに見えました。で、書物を傍へやつて、再び人間の現在の生活を考へる

と、一切のものが私には明瞭に容易に見えるのです。正しくない事をするといふこと、若くは、何人をも愛し、その代りに愛せられるといふことを避けるのは不可能のやうに見えました。その當時、あらゆる人が、私に對して善良で慈愛があつたかを私は語ることが出來ない位るです。ソーニヤに課業を敎へるのは私には多少苦痛でしたが、彼女でさへも、今では非常に骨を折つて、勉強し、從順でありました。他の人々は、私が彼等に對して仕向けようと勉めた通りに、私に對して仕向けました。聖餐を受ける前に宥しを乞ふために、私が腹を立てさせたかもしれないと思ふ人々のことを考へた時に、私は近所の一人の婦人を思ひ出しました。私は曾て、彼女の友だちの一人の面前で、戯談をしたことがあるのです。で、その婦人は非常に感情を害して、それ以來、私たちを尋ねませんでした。そこで、私は彼女に手紙を書いて、自分の過失を認め、彼女の宥しを乞ひました。彼女は返事もくれて、彼女自身を責め、私に罪のない事を明らかにしました。私は、この簡單な手紙を讀んだ時に喜びのために泣きました。この時、私は、何故セルゲイ・ミハイロ井ッチが、眞の幸福は、他人に對する生活にのみ見出さるべきであると云つたかを始めて理解し始めたのです。私はもう、交際社會や流行のことを夢見ずに、田舍の靜かな家庭生活や、自己犧牲や、愛と平和や、惠み深い、慰めを與へる神に對する感謝を夢見ました。

私が目論んだ通りに、私は自分の誕生日に聖餐を受けました。そして、私は自分の舊の生活に返へ

るのを怖れたほど亢奮の狀態で、敎會を出ました。儀式が濟んでから、私たちが、馬車から降りる前に、お馴染の馬車が、橋の上をごろ〳〵通りました。そして私は、セルゲイ・ミハイロ井ッチを見かけました。と、彼は直ぐに私に祝ひを述べました。そして私たちは一所に家の中に入りました。

私が、その朝のやうに、彼の面前で、自由に感じたことは一度もありませんでした。それは、私が、彼の知らない、彼の上にある世界へ入つて行つたとでもいふやうでした。彼は、特別に柔和に、殆んど從順に、私に仕向けましたから多分彼は私の中に生じてゐたものを、了解したのでせう。私がピアノを開けると、彼はそれを閉ぢ、鍵をかけて、鍵を自分の衣嚢の中へ入れながら、云ひました——

『今日は彈かないがいゝ、あなたの魂の内には、音樂よりももつといゝ諧調があるのだ。』

かう云はれて、私は彼に對して感謝を感じました。けれども、それと同時に、彼が私の心の中に生じてゐたもの——私が何人にも祕密にして置き度いと思つた事柄——をそんなに容易にそんなに明瞭に理解したと云ふことが、むしろ私を惱ませました。

晝飯の間に彼は、彼が來たのは、私に祝ひを述べると同時に翌朝モスクワへ立つことにしたので、暇乞ひを述べるためだと云ひました。

彼が話をしてゐる時に、彼はカーチャを見てゐましたが、私は彼の目が私の顏に惱みを見るのを怖れるかのやうに、私の顏色を見てゐました。しかし私は驚きの色も困惑の色も現はしませんでした。

私は彼が長い間留守にするのかどうかをさへも、彼に訊きませんでした。私は、彼がかういふ事を云ふだらうと豫期してゐました。そして私は彼が出かけて行かないのを知つてゐました。どうして私はそれを知つたのでせうか。今朝はそれを云ひ現すことが出來ません。が、この記憶すべき日には、私は、過去に起つたことも、未來に起るべきことも、一切知つてゐるやうに私には思はれました。私は云はゞ、人が過去と未來を明らかに見る、かの幸福な夢の一つの中にゐました。

セルゲイ・ミハイロウ井ッチは、晝食の後直ぐ歸りたかつたのですが、カーチャが横になつたので彼女に暇乞を云ふために餘義なく待つてゐました。客間は暑かつたので、私たちは露臺へ行きました。私たちが腰を下すや否や、私は、私の愛の運命を決すべき會話を初めました。どこから私の平靜と落着きが來たのか、私には解りませんでした。それは恰度、他の人が私の聲で話をしてゐるやうでした。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは私の向側に坐つて欄干に倚りかゝつて、彼が手に持つてゐた紫丁香花の枝から葉をむしつてゐました。私が話を始めた時は、彼は枝を放して、その頭を手で支へました。それは往々精神の混亂と心の安靜のどちらかを示す態度でした。

『どうしてあなたはお出かけになるの。』と私は彼の顏を充分に見て尋ねました。

『行かなければならぬ或る用事があるのです。』と彼は目を伏せて答へました。私に答へるのにそん

な嘘をつくのが彼にはどんなに苦しかつたかを私は知つてゐました。

『聽いて頂戴。』と私は云ひました。『今日は私にとつてどんなに大事な日だかあなたは御存知でせう。そして、私は、どれだけ私があなたを愛してゐるか、どんなにあなたのゐらつしやることが私に必要なのかを、あなたに隱したくありません。で、今、もう一度伺ひますわ。何故、お出掛けになるの？私は知らなくちやなりませんわ！』

『ほんとうの事をあなたに云ふのはむづかしい。』と彼が答へました。『私は今週、あなたと自分のことに就いて、ずゐぶん考へました。で、私は、出掛けなければならないと決心したのです。何故でせう。あなたは推察が出來る筈です。で、もしあなたが、私のことを思つて下さるなら、これ以上私を苦めないで下さい。』そう云つて、兩手で額を拭いてから、彼は眼を閉ぢて言添へました——『私は非常に辛いんです——そして、あなたには、それが何故だか解る筈です。』

この言葉で、私の心臟は、烈しく皷動しました。

『いえ、私には解りませんわ。』と私は答へました。『話して下さい。どうか、私は、どんなことでも伺ひますわ。』

彼は、窮屈さうにその位置を代へて、再び紫丁香花の枝を摘みあげました。

『いや。』と彼は、一寸の間——その間に彼は、彼のいつもの確乎した聲を取り戻さうと骨を折つた

のです――を置いて云ひました。『私の思ふことを云ひ表すのは、私には殆んど不可能です、が、やつて見ませう。』さう云つた時に、彼は、身體の苦痛を感ずるかのやうに、再び顔を蔽ひました。

『どうしたのでせう。』

『いや、まア考へて御覽なさい。Aといふ疲れた老人と、Bといふ花やかな若い娘とを。Bは人間も人生も知らないんです。特別な家族關係が二人を一緒に結び附けたので、彼は、初めは、娘のやうに彼女を愛してゐたのです。他の方法で彼女を保護するやうにならうとは夢にも考へずに。』

彼は、默りました。が、私は何も云ひませんでした。と、彼はやがて、私を見ずに、前よりも早い、しつかりした調子で、つゞけました。『Aはだん〳〵、Bがそんなに若くて、彼女には、まだ人生が娯樂に過ぎなかつたことを忘れてしまひました。そして、彼は突然、衝動を感じて目醒めた時に、彼は自分の全存在をもつて彼女を愛してゐることを見出したのでした。この發見は彼を怖れさせました。彼の感情は、悔恨を感じてゐるやうに彼を沈ませました。で、彼は、時が經つて、彼等の古い親しい交際がその性質を代へやうとする前に立ち去らうと決心したのです。』

かう云ひながら、彼は、又その目の前に手を當てました。

『ですが、何故彼はその女を愛するのを恐れたのでせう。』と私は平生の態度と思ふ態度で尋ねました。けれども、私の聲には幾らか戲談らしいところがあつたに違ひがありません。彼が沈んだ調子で、

かう答へたのを見ると――『あなたは若い、私はさうでない。あなたにとつては人生は遊びに過ぎない。私にとつては、人生は眞實で眞面目だ、私とお遊びなさるな、それは良くないことのやうです。あなたはいつかそれに氣が附くことがあるでせう。かうAがBに答へました。』と彼は言ひ添へました。

『これで、何故私が出掛けるか解つたでせう。で、その事に就いちやもう何も云はないで下さい、どうか。』

『いえ、いえ。その事をお話しゝなくちやなりません。』と私は、答へました。涙が私の言葉を遮りました。『どうぞ眞實のことを話して下さい。その男は女を愛したのですか、愛さなかつたのですか。』

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、何の返事もしませんでした。

『若し男が女を愛してゐなかつたなら、何故男は、女を子供のやうにして、女と遊んだのでせう。』

『Aが惡るかつたのです。』とセルゲイが答へました。『しかし、男はそれでお終ひにして、二人は友だちとして別れてしまつたのです。』

『それは怖ろしいことです！では、他の解決が出來なかつたのですか。』と私は言ひ張りました。しかし、次ぎの瞬間には、私は自分の言葉に驚いて、後退しました。

『いや。』とセルゲイ・ミハイロ井ッチが答へました。『二つの解決が出來んのです。』この時、彼は眼から手を除けて、じつと私を見詰めました。『もう私を遮らないで下さい。後生ですから、私の言ふこと

を正しく理解して下さい。Aは實際、ほんたうにBを愛してゐたのです。で、それを女に打明けました。だが、女は、笑つて、それは戯談に違ひないと云ひました。それ以來Aは、犯人になつてしまつた。女にとつて戯談に過ぎなかつたものは、男にとつては咀ふべき生活だつたのです。』

私は、身慄ひをして、話しださうとしましたが、彼はそれを許しませんでした。

『お待ちなさい。』と彼は顫へ聲でつゞけました。『或る人は云ひました。女が男に對して憐憫を催しました。まだ人生も人間も知らない憐れな子供が、そして、憐憫が愛だと思ひました。で、女は實際に男と結婚しました――そして、男は、この馬鹿者は、人生が彼の前に新たに開けるものと思つたのです。しかし、間も無く、男は、彼も彼女も欺かれたのだといふことに氣が附いたのです。しかし、この話はもう止めませう。』と彼は、それから先きを云ふことが出來なくなつて、言葉を結びました。そして、彼は焦々した足どりで彼方此方歩きだしました。

『この話はもう止めませう。』と云ふのが彼の最後の言葉でした。けれども、私は、私がどう云ふかを熱心に彼が待つてゐるのを知りました。私は話しださうとしましたが、さうすることが出來ませんでした。私は彼を見ました。彼の顔は白く、彼の唇は顫へてゐました。私は非常な努力で、とう〳〵私を束縛してゐたやうに見えた絆を破りました。微かな、殆んど聞えないやうな聲で、私は云ひました。『で、第三の解決は、かうでした。男は女を愛しませんでした。で、女にひどい悲みを味はせました。男はさうする權利を自分がもつてゐると思つたのです。そして、男は自分の行爲を誇りかに感じて、立ち去りました。さうです。遊んだのはあなたの方で、私ではございません。私は初めからあなたを愛してゐたのですもの――さうです、私はあなたを愛してゐるのです。』――私は繰返しました。そして、この言葉の終りの方は、私を怖れさしたほど若々しい叫聲になりました。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、蒼白い顔をして、私の前に立つてゐました。彼の唇は、だん〳〵顫へだしました。そして、二粒の大きな涙が、彼の頰から轉び落ちました。

『それは、あなたには悪いことでした。』と私は叫びました。と、私は、自分の苦い、堰止められた涙で窒息するやうに思ひました。私は立ち去らうとしましたが、彼は私を止めました。彼の頭は、私の膝の上に沈みました。彼の唇は、私の顫へる手に觸れ、そして、彼の涙が私の手へほた〳〵落ちました。

『おゝ、若し私が前に知つてさへゐたならば！』と彼は囁きました。

『何故？何故？』と私は機械的に繰返しました。と、私の心は、時々忽ち消えてしまふ幸福でもつて、一度消えたら、もう二度とは戻つて來ないだらうと思はれるやうな幸福でもつて、充されました。

五分間後、ソーニャは、『マーシャが、セルゲイ・ミハイロ井ッチの所へお嫁に行くんですつて。』と家ぢゅうに聞えるやうに叫びながら、カーチャの傍へと階段を駈け上つて行きました。

五

私たちには、私たちの結婚を延ばさなければならない理由は一つもありませんでした。けれども、カーチャは、私の嫁入道具を求めるためにモスクワへひどく行きたがつてゐましたし、セルゲイ・ミハイロ井ッチの母親は、古い家の家具を新調し、新らしい馬車を買ひたいと彼に云つてゐたのでした。しかし、私たちは二人とも、そんな細々したことは、後廻はしにしてもいゝのだといふ意見でした。で、私たちは、私の誕生日から二週間後に、極めて静かに、お客もなく、待女郎もなく、三鞭酒もなく、婚禮につきものゝ一切の附加物もなしに、結婚しました。

セルゲイ・ミハイロ井ッチは、彼のお母さんが、こんな場合につきものゝ華飾や外觀が少しもなしに結婚式を擧げるのに非常に不滿足だと云ひました。彼女は、何かの音樂と、澤山の贈物を求めたのでした。そして、三萬ルーブリを使つた彼女の結婚の時のやうに、家が上を下への大混雜になるのを喜んだに違ひないのでした。けれども、現狀を一ばん良いものにするために、彼女は、物置の中のあらゆる箱を探し出したり、彼女が私たちの幸福になくて叶はぬと考へた敷物や、カーテンや、盆に就て、彼女は女中頭のマリユウシエカに長話をしたのでした。

家では、カーチャと私の乳母のクジミニイシュナとが、彼等の家婦振りの熟練を示すために、この

機會の大部分を使つたのでした。彼等は、私たちが、愛と私たちの幸福な未來を夢見るために、私たちの日を過すのを心から欲してゐました。それと同時に彼等は、私の衣服戸棚の細々したことで忙がしかつた。そして、私の着物の刺繍の恰度恰好な巾や、私の新らしいナプキンや卓子掛の緣縫に關する大切な問題を論議してゐました。

ニコリスコエとボクローフスコエとの間には、祕密の使が幾度も〳〵取換はされました。そして、セルゲイ・ミハイロ井ッチの母親とカーチャ・カルロウナとは、いつでも大の仲好でしたが、その頃は誰でも二人の間に或る程度の敵意を含んだ細かい外交術を認めることが出來たのです。

今度私がよく知るやうになつたタチヤナ・セメヨーノウナは、舊派の矢釜しい、嚴格な家婦でした。セルゲイは、彼の母として、彼女を尊敬してゐました。そして、世界中での最も善良な、最も聰明な婦人として、彼女を優しく愛してゐました。タチヤナ・セメヨーノウナは、いつも私たちの家族に親しみをもつてゐましたので、彼女の息子が結婚するのが非常に嬉しかつたのです。でも、私が花嫁として彼女の所に行つた時、彼女は斷えず、彼がセルゲイの配偶として適當だらうといふ事を私に感じさせようと努めたのでした。私は何時もこのことを記憶して、彼女を能く理解し、彼女の意見に逆ひませんでした。

私たちの婚約と結婚との間ちゆう、私たち、セルゲイと私とは、毎日會ひ合つてゐました。彼は、晝

食に來て、眞夜中までゐました。けれども、彼は、私なしには生きることが出來ないと度々私に云ひましたし、私には彼が眞實を語つてゐるのが解つてゐたのですが、彼は決して終日私と一緒に暮したことはありませんでした。そして、規則正しく彼の用事をしました。私たちは、以前と同じ交際をつづけてゐました。私たちは互に『あなた。』と呼びかけました。『お前』といふやうな言葉は用ひずに、彼は私の手を接吻さへもしませんでした。そして、彼は私たちたつた二人でゐる機會を求めなかつたばかりではなく、それを避けてゐました。それは恰度、彼が持つてゐた人きな危險性のある優しさを出すのを怖れたとでもいふやうでした。

このまゐ二週間の間は、非常な暴風雨で、私たちは家に閉ぢ籠つてゐなければなりませんでした。私たちの氣に入りの席は、ピアノと、窓の間にありました。蠟燭の光が暗い窓硝子の内側にゆらめき、その外側には雨の滴が降りかゝりました。屋根の樋に注ぐ水と、庭と露臺の上に立ち罩めてゐる霧とは、私たちの隅を一層暖かに、一層心地よくしました。

『僕がいつか話したAとBの話をあなたは覺えてゐますか。』とセルゲイは、さうした夢見心の或る晩、二人が私たちの居心地のいゝ隅に坐つてゐた時に、私に訊ねました。

『どうしてあんな馬鹿らしい話が思ひ出せるものですか。あのお話が、こんなに都合よく解決したのは、何といふ幸福なことでせう！』

『さうです。僕は易々と自分の過失で僕の幸福を失つたかも知れなかつたのです。あなたは、僕を救つたのです。しかし、あの時、僕は嘘をついたのです。あれ以來僕はその事を恥ぢてゐました。』

『そんな事何でもありませんわ。もう過ぎ去つた事ですもの。』

『おゝ！僕は、自分に道理を說き聞かせようとしてゐたのです。』

『何のためでせう？人は、さうした場合に、そんなことをするものぢやないでせう。』と私が、答へ返へしました。

『全く僕が間違つてゐたのですよ、しかし、僕は、僕のあらゆる失敗や幻滅の後、田舍へやつて來た時には、僕にとつてはもう戀愛はお終ひになつたので、僕のために殘つてゐるのは、ただ中年の義務を忠實に充すことで、考へもし云ひもしたのです。あなたに對する僕の感情を疑ひだす前にずゐぶん永い時が經つたのでした。けれども、とう〳〵、或る晩、『あなたはそれを覺えてゐますか。僕たちが庭を散步してゐる時に、私は突然驚いたのでした。僕の好運は、有り得べきものとしては、餘りに大き過ぎたのでした。僕は非常に多くを受けて、非常に尠く與へねばならぬのでした。あなたはまだ芽です、やつと花を開かうとしてゐるばかりです。あなたは初めて戀をするのです。だから——』

『では。』と私が遮ぎりましたが、當前の彼の答が怖ろしくなつて又沈默して、それから言ひ添へました——『御心配なさらない方がいゝわ。そんな事何でもないんですもの。』

『あなたは、僕が以前に誰かを愛したかどうか知りたいと思ひますか。』と彼は、私の考を察しながら云ひました。『いや、僕は一度も愛しもしなかつたし、愛されもしなかつた。』彼は、恰度何かしら悲しい記憶で感動したかのやうに、躊躇しました。『いや。』と彼は繰返しました。『しかし、要するに、僕はあなたに與へる何物を持つてゐるのか。愛だ、全くさうだ。』

『その愛が、そんなに小さいのですか。』と私が云ひました。彼の眼を見詰めて。

『あなたにとつては小さいんです。ねえ、尤も、僕の幸福は、眠らうとする僕を防めるし、僕は、吾々が何といふ愉快な生活を送ることになつたのだらうと考へはするのですが、僕はもうずゐぶん永い間生きて來ました。けれども、近頃になつて漸く僕が幸福を見附けたやうに僕には思はれるのです。他人に善をなし得る、吾々小さな隱家に於ける愉快な靜かな生活、斷えず收益のある仕事、それから、休養のための書物、音樂、自然、及び少數の友だち。かういふものが僕には幸福なのです。僕が曾つて夢見たよりもより以上の幸福なのです。それから、その上にあなたのやうな妻があつて、多分子供も生れやうといふのです。一言で云へば、人間がこの世界で望み得る一切のものを僕は得たのです。』

『さうですわ。』と私が答へました。

『さうです。僕にとつては、僕の青春は過ぎ去つてしまつたのだから、しかし、あなたにとつては、さうでない。』と彼が答へました。『あなたは、何處か他で幸福を求めようとしたかも知れないし、何處

か他でそれを見付けたかも知れないのです。あなたには、ただあなたが僕を愛してゐるばかりに、僕の云つたことが幸福を意味してゐるやうに思はれるのです。』

『いえ。私は、靜かな家庭生活よりも他のものに憧がれたり願つたりしたことはありません。あなたは、私自身の考をそのまゝおつしやつたのですわ。』

彼は、微笑しました。『あなたには、さう見えるのです、愛する者よ。』と彼が云ひました。『しかし、そんなものは、あなたにとつては少ないんです、少なすぎるんです。あなたは、青春と美をもつてゐるのだ。』と彼は、物思ひに沈みながら云ひました。

私は、彼が私を信じようとしないし、一見彼が私の若さと美のために私を責めてゐるやうなのを見出して、私は幾らかムッとしました。

『では、何故、あなたは私を愛するのです。』と私は焦々して尋ねました。『私の若さのためにですか、それとも、私自身のためにですか。』

『僕には解らない、しかし、僕はあなたを愛する。』と彼は、私を鋭い、心を迷はすやうな眼差しでちらと見て、答へました。

私は、何とも答へないで、無意識に彼の眼を見詰めてゐました。と、不意に、私にとつて甚だ奇妙な事が起つて來たのです。私は、周圍のものが見えなくなりました、彼の顏でさへ私の眼の前から消

えて失くなりました、そして、私が意識を感じてゐるものは、彼の眼から私の眼に閃く火だけでした、で、恰度、彼の眼が私の眼を貫くかのやうに私には見えました。それから萬事が混亂してしまひました。私はもう何物をも見ませんでした。そして、彼の視線が私に傳へた恐怖と愉快の混り合つた感情から逃れるために、私は眼瞼を下げずにはゐられませんでした。

私たちの結婚日の前の晩には、空が晴れて、夏の終らうとする頃に始まつた長雨の後に、最初の、冷々した、明るい、秋の天氣が來ました。

私は、その晩、幸福に、明日はどんなことになるだらうと考へながら、床へ入りました、そして、曉と ともに、眼を醒ましました。私は、庭へ行きました。太陽は、恰度上つたばかりで、半ば葉の落ちた菩提樹を通して、その青白い光を投げてゐました。小徑は朽葉で蔽はれてゐました。天竺牡丹の花は、黑くなつて、その莖の上にグニャリと垂れてゐました。そして、白い霜が、銀の蔽ひのやうに綠の芝土の上や、緣側の鐵の闕の上に置いてゐました。晴れた、寒い空には、一つの雲も見えませんでした。

『もう今日になつたのか。』と私は考へました。『それは有り得べきことだらうか、明日はもう私がこの家を自分の家と思はないといふことは。今日から私はカーチャやソーニャなしに生活しなければならぬのか。私は、もう朝の挨拶のためにソーニャの部屋を叩き、彼女が銀のやうな笑聲で答へる

のを聞かぬことゝなるのか。』

私は、自分の心が不思議な感情で壓迫されるので、焦々してセルゲイの來るのを待つてゐました。彼は、早く來ました、で、私たちは正午頃、私の兩親の追福の祈禱を聽くために、教會へ行きました。

『あの人たちが生きてゐてさへくれたら。』と、私たちが家路に向つた時に、私の心が囁きました。で、私は、彼等の最も親しい友だちであつた人の腕を抑へ付けました。教會の冷たい石の舗石に對して、私が頭を下げた時には、私の父の精神が、私の撰擇を祝福して、私の傍にゐるやうに思はれました。

記憶と希望、喜悅と苦痛が、私の胸の中の感情を不思議に焦ら立てました、そして、新鮮な空氣や、靜寂や、裸かの野や、冷たく明るい太陽の光が、それに同感してゐるやうに見えました。

突然、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、その考深い顏を私の方に向けました。『彼は、私が今考へてゐる事に就て話を始めるだらうか。』と私は考へました、と、その時、彼は、名を云はずに、恰も途切れた會話を續けるかのやうに、私の父の話を始めました。『彼が、或る日、戯談に、云ひました、「君が僕の小さなマーシャと結婚してくれたらいゝなァ。」ッて。』

『では、もし彼が今日のことを知つたら、彼はどんなに幸福でせう。』と私は、セルゲイに一層ぴつ

たり寄り添つて、答へました。

『その頃は、あなたは極く小さな子供でした。』と彼は私の眼を見ながら、續けました。『その頃、僕は、あなたのお父さんの眼に非常によく似てゐるので、その眼によく接吻したものです、私が他日この眼自身のためにこんなにそれを好くやうにならうとは思ひも寄らなかつたのです。』

私たちは、誰も私たちの足音や聲を聞く者のない、人の通じない道を通つて、刈株畑を通して、靜かに家の方へ歩いて行きました。私たちの右手には、灰色がゝつた鳶鳥の牧場が、遠くの森まで擴がつてゐました、私たちの左手には、冬の穀物の條作が、前の晩の霜で、萎れてゐました。長い透徹つた蜘蛛の巣が、綺麗な大氣の中に浮んでゐて、私たちの顏や私の髪に飛びかゝりました、そして、私たちが話をすると、恰も、私たちがこの宇宙に於ける唯一の生物であるかのやうに——この時秋の太陽が非常に明るく照らした青い圓天井の下に、全く私たちだけがゐるかのやうに、私たちの聲の響が、上の方へ、動かない空氣の中を上つて行きました。

私たちが家へ着くと、セルゲイ・ミハイロ井ッチの母親と、二三人のなくてならない客とが私たちを待つてゐました、で、式の後で教會を立去つて、私たちが馬車でニコリスコエに出掛けるまで、私たちはもう二人きりでゐることがありませんでした。

結婚式の間は、教會は殆んど空でした。私は、唱歌手の傍に立つてゐるタチヤナ・セメヨノウナと、

薄紫のリボンを着けて、眼に涙を溜めてゐるカーチヤと、珍らしさうに私を見守つてゐる二三人の田舍娘とを見ました。私はセルゲイ・ミハイロ井ッチの居るのを感じてはゐましたが、彼を見ませんでした。私は祈禱に耳を傾け、適當な場所で聲高かに應答を繰返しましたが、それは私の魂の中に反響を呼起しませんでした。私は祈ることが出來ないで、たゞ放心して、聖像や、蠟燭や、刺繍した法衣や、彩色した窓を見詰めてゐるだけでした。僧が彼の手を私の頭の上に載せて、彼は私に洗禮を授けたが、今私を結婚させる許しを得たのを喜ぶと云つた時、私は始めて昏睡から醒めたのでした。

カーチヤとタチヤナ・セメヨーノウナが私に接吻しました、それから、私はグリゴリイが馬車を呼ぶのを聞いて、私の心や情へどんな異常な感覺も入らずに、一切がお終ひになつたことを考へて、私は驚きと怖れを感じました。私たちは、互に接吻しました、そして、私たちの接吻は、私が『これだけのことなのか。』と考へずにはゐられなかつた私たちの感情にとつては、ひどく奇妙な、他所々々しいものゝやうに私には見えました。

私たちは、教會の前の廣場へ行きました、馬車の轍のゴロ〳〵いふ音が、古い建物の反響を起し、新鮮な空氣が私の顏を撫でました、そして、彼は、腕の下へ帽子を入れて、馬車の中へ私を助け入れました。私は、霜の降つた夜景の上へ月が輝いてゐるのを見ることが出來ました。と、セルゲイは、私の傍に坐つて、馬車の戸を閉ざしました、私を保護するために彼がしたこの行爲が、私に不思議な

苦痛の感覺を起させました。

私たちは出發しました。馬車の一つの隅に身を据ゑながら、私は、家から日光の中に白く横はつてゐる野や道路を見詰めてゐました。私は心の中で不思議に思ひました、そして、期待したやうな平和の祝福が、私の心の中になかつたのを見て、驚きました。みんなでこれだけなのか？私があんなに期待した瞬間が、私にこれ以上のものを與へてはくれないのか？

私は、何か云ふつもりでセルゲイ・ミハイロ井ッチの方を振り向きましたが、言葉を見つけることが出來ませんでした。それは恰度、私は彼に對しては優しさの一鼓動さも感ぜずして、ただ恐怖だけを感じてゐるかのやうでした。

『今まで、僕は實際、眞實にかういふ事にならうとは信じてゐなかつた。』と彼は、私の眼付に答へるかのやうに、靜かに云ひました。

『私は怖い。』と私が云ひました。『何故だか解らないんですけれど。』

『私が怖いんぢやない　可愛い友よ。』と彼は答へて、私の手を取つて、その上へ彼の頭を傾けました。

『いゝえ。あなたが怖いのよ。』と私が言ひ返へしました。私の手は、なされるまゝに彼の手の中にありました、そして、私の心は石のやうに冷たいのでした。と、彼は自分の唇を私の手に觸れました、私の心臓は、再ひ皷動し始めました。私の眼は、薄暗の中で怖の眼を探しました、そして、私は、不意に、私がもう彼を恐れてはゐなかつたこと、そればかりではなく、私のこの恐怖が、以前のよりももつと新らしい、もつと奇妙な、もつと情熱的な愛に變つたこと、彼が私を支配した力は、あらゆる私の未來の幸福の基礎となつたことを感じたのでした。

後編

一

幾日、幾週、とう〳〵まる二ケ月が、田園生活の單調の中に過ぎ去りました。しかし、そこには、一生涯に亘つて擴がるのに充分な幸福と、感情の昂奮がありました。

私の夢想は、實際、全く實現されませんでした。けれども、現實は、概念で考へたものよりも一層愉快なものでした。眞面目な義務の履行や、嚴重な自己犠牲や、私が心の中で描いてゐたやうな他人のための生活は、少しも必要がなかつたのでした。事實は、セルゲイ・ミハイロ井ッチと私が、他の人々のことはすつかり忘れて、お互のためだけに生活したのでした。

無論、彼は、町へ馬車を駈つて行くために、所有地に關する用事に行くために、毎日幾らかの時間の間、私の傍を離れました。けれども、私は、私が自分を私の傍から引き離すためどんな惱みを感ず

るかを認めることが出來ました。そして、その事が、彼の留守中私を慰めました。

彼は、私が傍にゐない時には、何事も彼には興味がないやうに見えると私は自白しました。そして、私もそれと同じなのでした。私は讀書をしました。私は、音樂や、彼の母親のことや、學課のことをしました。けれども、私がそんなことをしたのは、それが彼の希望だつたからでした。で、私が彼に關係のないことをやりだすと、私は退屈を感じて、苦むのでした。私にとつては、世界ぢゆうで、彼だけが存在してゐるのでした。私は、彼が男の中で最も善良な、最も美しい男であると考へました。そして、私は、彼一人のために生きてゐるのでした。私は、彼が私をかうだと判斷した——卽ち、私があり得べき一切の完全を具へた、今迄生きてゐた婦人の中で第一等の、最も人の心を奪ふ婦人であると——そのまゝのものでありたいとしたのでした。實際、私は、世界中で最も善良な婦人にならうと努めたのでした。

或る日、私が聖像の前で跪いてゐると、彼が私の部屋へ入つて來て、卓子の傍に坐つて、書物の頁をひつくり返へし始めました。私は祈りをつゞけましたが、彼の眼が私の上に注がれてゐるのを感じました。

「あなたは、もうお祈りをなすつたの。」と私が訊ねました。

『濟んだ、しかし、お前の祈りを妨げちやいけない。僕はあちらへ行かう。』と彼が答へました。

『ねえ、あなた、私と一緒にこの祈りを一つ讀んで下さいましな。』と私は云ひました。

で、彼はその兩腕を彼の脇へぎごちなく下げて、私の傍へ跪きました。そして、彼は、勵ますためのやうに、時に私を見るために沈默しながら、眞面目な顏で祈禱書を讀みました。彼が讀み終つた時に、私は笑つて彼を抱きました。

『お前は、私を十歳の子供のやうに扱つてゐる。』と彼は云つて、顏を赧らめて、私の手に接吻しました。

私たちのニコリスコエの家は、長く續いたセルゲイ・ミハイロ井ッチの先祖が生死した、古風な田墅でした。空氣そのものが、私がこゝへ來るや否や私のものとなつた善良な皎潔な家族の追憶で香つてゐました。家事は、昔の習慣に從つてタチャナ・セメョーノウナが指圖をしました。私たちの周圍が華麗であつたとは斷言出來ないが、奉公人から、家具や食事に至るまで、萬事が立派で、豐富で、善良でした。

大きな客間には、家族の肖像畫や裝飾された壁に對して、家具が幾何學のやうな順序に置かれてありました。そしてよく磨かれた床には、この家で作られる絨氈が敷かれてゐました。小さな客間には、古いピアノと、不揃ひな二個の置棚と、一對の長椅子と、孔雀を鏤めた二三の小さな卓子がありました。

タチヤナ・セメヨーノウナが特別に氣を付けて整頓した私の部屋には家ぢゆうで一番良い家具が置かれてありました。けれども、それは種類が非常に異つてゐて、その時代もさまざまでした。私は特に、古い寫字樓を憶ひ出します。それは、始めのうちは、一種の身慄ひを感ぜずには見られなかつたのですが、暫く經つと私の親しい友だちになりました。

タチヤナ・セメヨーノウナの聲は、家ぢゆうで決して聞えませんでした。けれども、萬事がよく整つた時計の正確さをもつて運轉しました。家僕は、みんな柔かい平たい上靴を穿いてゐました。それは、私の姑には、キイ〳〵鳴る靴底とバタ〳〵音のする踵とが耐へられなかつたからでした。家僕は、この家族に於ける彼等の地位を誇つてゐました。彼等の女主人に對してはその態度で尊敬の意を表はし、セルゲイ・ミハイロ井ッチや私に對しては、殆んど愛撫しようとしてゐるやうでした。毎土曜日には必らず、床が洗はれ、敷物が叩かれました。毎月朔日に、感謝の禱が行はれ、聖水が分配されました。私の姑とセルゲイ・ミハイロ井ッチの命名日が、いつも宴會と舞踏で祝はれるので、近所の人はみんなそれを知つてゐました。そして、從來タチヤナ・セメヨーノウナの記憶する限りは、それは常例となつてゐたのでした。

私の夫は、家事に就ては何も考へませんでした。彼は、作男を監督するために冬でも朝早く起きました。で、彼はいつでも私が眼を醒ます前に出掛けるのでした。彼が、私たちきりで喰べる朝飯にと

家の中へ入る時には、彼は子供のやうな戯談と上氣嫌で充ちてゐるのでした。

タチヤナ・セメヨーノウナは、いつでも朝ぢゆうは自分の部屋に籠つてゐて、使ひといふ手段で私たちと挨拶を交換するのでした。私は何遍笑ひを耐へ忍んだか知れない。彼女の女中が、腕を重ねて、眞面目な顔で、單調に、一本調子で、かう繰返へした時には——『タチヤナ・セメヨーノウナは、あなた樣がたが永いこと馬車でお出掛けになつてお歸りになつてから、よくお休みになりましたかどうか、伺ひたいとお仰せでございます。それから、御隱居樣は、小脇がお痛みになつたのと、村の犬が吠えたので一晩ぢゆうお寢みになれなかつたと申上げてくれとのことでございます。それから又、新らしい麵麭は、今度はテラスではなくて、ニカラーシャが拵らへたのでございますが、御隱居樣は、始めてにしては非常によく出來たとお御思召してゐらつしやいますが、あなた樣がたは如何でゐらつしやいますか伺ひたいとお仰せでございます。御隱居樣は、輕燒麵麭の方が特別に上出來だとのお思召でございますが、平燒麵麭の方は少し燒け過ぎたとのことでございました。』

朝飯と晝食との間には、セルゲイ・ミハイロ井ッチと私とはお互に殆んど會ひませんでした。それは、私が音樂の練習をしたり讀書したりする時間で、彼の勉強と事務の時間でした。けれども、四時の晝食には、私たちはみんなで客間に集まりました。その時には、母も、家に居合せた客——大抵は零落した貴婦人で、實際、いつでも、さういふ人が一二人逗留してゐるのでした——と一緒にその隱居部

星から出て來ました。

セルゲイは、いつでも母親に彼の腕を借すのです。母はいつでも同じやうに、一方の手を私に取つてくれと云ふのです。で、かういふ樣子で、私たちは食堂へ入つて行くのでした。母は、いつでも食卓の主宰者となりました。そして、會話は大抵、ぎごちなく窮屈でした。尤も、時に、私とセルゲイの饒舌が、この鹿爪らしい食事の嚴肅を邪魔するのでしたが。

晝食後、タチヤナ・セメヨーノウナは、客間の大きな安樂椅子に坐つて、煙草を喫ふか、新らしい書物の頁を切るかしました。セルゲイと私とは、書物を音讀するか、音樂室へ行くかしました。當時私たちは可なり本を讀みましたが、でも依然として、音樂は私たちの主な娯樂となつてゐたのです。私がセルゲイの好きなソナータを彈く時には、彼は部屋の他の端に行くのが常でした。で、私は、薄暗い光で彼を見ることが出來ませんでした。けれども、彼がちつとも期待してゐない時に屢々私は立上つて、彼の傍へ行つて、彼の眼の優しい光の中に、彼の頰の赤らみの中に、彼が全く隱くすことの出來なかつた感情の痕跡を見出しました。

私はいつも、客間に晩のお茶を用意しました。そして、それは極めて嚴肅な事件でした。私がこんなに大きな湯沸器を支配するのを樂に感ずるまでには、ずゐぶん長くかゝりました。私は、こんな鹿爪らしい地位を占めるには若過ぎると感じたのでした。そして盆の上へコップを置いて、『これはマリヤ・ミニイチナのですよ。』とか、『これはペートル・イヴノ井ッチのよ。』などゝ、お茶の甘さはそれでいゝかと訊ねたり、家僕の一人に砂糖の盆を持つて廻らしたりしなければならんのには、全く不適當だと感じたのでした。

『實にうまい、全く女らしい。』と私の夫がよく云ふと、私の混亂は增すばかりでした。お茶の後で、彼のお母さんは、私たちに接吻するのでした。それから、私たちは、私たち自身の部屋に行つて、坐つて、『早くお寢みなさい。』と云ふのが母のお氣に入りのお題目の一つでしたから、母が私たちの聲を聞くのも恐れて、壓へ付けたやうな調子で眞夜中まで私たちは話すのでした。時々、私たちは空腹くなつて、こゝそり階段を下りて、食堂の脇棚に近づいて、冷たい晩飯を探し出し、私たちの部屋へ持て來ました。

セルゲイ・ミハイロ井ッチと私は、殆んどこの大きな古い家の中で外來者として、住んでゐました。この家の上には、タチヤナ・セメヨーノウナに於て具體化された過去の嚴格な精神が動いてゐたのでした。彼女が、畏怖に近い一種の尊敬心を私に吹き込んだばかりではなく、私は、家僕や、古い聖像や、家具そのものに對してさへ、それと同じ感情をもつてゐたのでした。

今思ひ返へして見ると、この不易の秩序と、家僕や客の冗物は、不必要であつたばかりではなく、實際煩はしいものだつたのです。けれども、その事は私たちを一層密接に結び附かせ、私たちの愛の

中に隱家を求めさせました。そして、私たちは、一人とも、物事の定められた秩序に對する不滿足な感情を壓へ附けるやうに注意しました。私の夫は、實際、家僕の側に於ける或る不都合を自分から隱さうとするやうに見えました。

たとへば、食事方のドミトリイ・シドロフは、ひどい喫烟家でしたが、毎晩私たちが音樂室に坐つてゐる間に、彼は夫の書齋へ忍び込んで、煙草を盜むのでした。かういふ場合に、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、どんなに心配さうに爪先で私の傍へ來て、輝く眼と擧げた手で、見られてゐるのを夢にも知らないドミトリイ・シドロフを指さすか、それから、ドミトリイがゐなくなつた時、どんなに夫が私を接吻し、私が愛らしいと云つた——尤も、彼は機會のある毎にそれをしたのですが——か、を見るのは興味のあることでした。

時に、彼の忍耐と盡きない上機嫌が、私を怒らせました。私には、こんなことを私が默つてゐてはいけないのだといふことが解つてゐました、そして、私は、彼が弱くて子供のやうだと思ひました。

『おゝ！可愛い友よ。』と彼は、或る日、私が彼が寬容だといふので彼を責めた時に云ひました。『私がこんなに幸福なのに、どうしてそんな詰らないことに苦しむんだらう。それに、他人の意志を曲げるよりは、自分の意志を曲げる方がずつと樂だといふことを、僕はずつと以前から知つてゐるんだ。僕は、今は、不機嫌になることが出來ないんだ、それに、佛蘭人も云つてゐるぢやないか、Le mieux

est l'ennemi du bien（より良い事は良き事の敵なり）ッて、ねえ。だが、お前はこの言葉を信ずるかしら。僕は、鈴を聞いても、手紙を受取つても、朝眼を醒ましてさへも、人生は過ぎ去つてゐるので、人生に於ては變化が起らなければならぬのだと思はない時はないんだ。けれども、現在よりはよくなるといふ時は、どうしても有り得ないんだ。』

私は、彼の云つたことを信じましたが、でも、充分に彼を了解することが出來ませんでした、それは、現在私たちがあるやうにいつでも幸福であり得ない、いや、もつと幸福であり得ないといふ理由を私が認めることが出來なかつたからでした。

こんな風にして、二ケ月が過ぎ去りました、そして、冬が、雪と暴風雨とをもつて、やつて來ました。その當時、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、私と一緒にゐましたが、私は、私たちの生活の形が單調で、そこには彼にとつても、私にとつても、少しも新らしいことがないのだと思ひだしました。

實際、私たちは、いつも後戻りをしてゐるかのやうに、私には見えました。その頃には、私の夫は、以前よりも一層著しい程度に、用事に精をだし始めました、で　彼の存在の底には、彼が私に許さない取つて置きの隅があるやうに、私に見えました。彼の不易の平穩が私を焦々させました。私は、前と同じやうに彼を愛してゐましたが、私の愛はじッと立停まつてゐました、そして、奇妙な落着かない感情が、私を惱ましました。私は、昂奮が欲しかつたのです、動きが欲しかつたのです。私

は、危險と自己犠牲に憧れました、私は、私たちが暮してゐたこの靜かな生活では、使用法を見出すことの出來ない或る無駄な精力をもつてゐました。そして。私は彼に隱くさうと私が試みた悲みの時間を經驗しました。それから、優しさと快活で有頂天になつて、彼を驚かしました。彼は、前にしたと同じ眼で私を見ました、と、或る日、彼は、私たちは暫らく町へ行かなければならないと、それとなく云ひました。けれども、私は、それが聞きたくなかつたのです、私は、私たちの生活の形を變へないやうに、私たちの幸福の高樓に觸れないやうにしてくれと、彼に賴みました。で、實際は、私は幸福だつたのです。たゞ私は、私の幸福が、私の憧れてゐたやうな或る仕事や犠牲を呼び出さなかつたのを不平に思つたのでした。私は、夫を愛しました。彼にとつては、私が世界ぢゆうの一切であるのを私は認めました。けれども、誰か他人が私たちの愛を見てゐて、私の彼に對する愛を妨げて、それがために、それに反對して、私がもつと〳〵彼を愛するやうになればいゝと思ひました。私は、自分の家では、私の心と感情のための食物を見出したのです。けれども、自分の若さや、何か動くのが必要なことに思ひ至ると、私は、私たちが暮らしてゐるこの靜かな生活に對して、完全な滿足を得なかつたのでした。

何故彼は、私たちが町へ行つて逗留しなければならないと、それとなく云つたのだらう？彼が私にそんなことを云はなくとも、私は多分、私を壓へ附けてゐる感情が有毒な、妄想的なものであつて、

私がそれを自由にさせてはいけないことを了解してゐた筈だ。けれども、たゞ町へ行つて逗留するばかりで、私は退屈から免れ得るかも知れないといふ考が、無意識に私の心の中に起りました。又それとは反對に、それがために、彼が好んでゐる一切のものから彼を引離すことになるかも知れないのでした。私は、さうするのを耻ぢました。且つ又、私は、私を喜ばすだけのために、彼自身の愉樂を控えさせたいとは思はなかつたのです。

時は、過ぎ去りました。雪は、家の周圍にだん〳〵高く堆積しました。餘り遠くない所では、人間の群が、跪いたり、樂しんだり、苦んだりしてゐるのに、私たちの生活は、相變らずの單調さでもつて、進められて行きました。それから、私たちの生活で最も惡いのは、毎日が、この退屈な、機械のやうな生活——その中へ、私たちの感情そのものまでが、規則正しい一定の溝になつて流れ込むのです——へ私たちを結び附けてゐる鎖を締め附けたことでした。朝は、私たちは快活でした、晝は、私たちは慇懃でした、晩には、深い愛をもちました。

暫く經つと、この心の不思議な爭ひが、私の健康に働きかけました。私の神經が苦み始めました。或る朝、私がいつもよりも氣持わるく感じてゐるところへ、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、不氣分で、たゞならぬ樣子で、畑の監督から歸つて來ました。私はそれに氣が附いたので、理由を尋ねましたが、私は、かういふ答を得ただけでした。「話すほどのことぢやないよ。」後で私は、私たちの農夫のこ

とで、役人との間に何か不愉快なことがあつたのだといふことを知りました。で、その時には、彼が自分の苦みを私に話さないのは、彼が、私は事業を理解するにはあまりに子供だと考へたからだと想像しました、それで、私は唐突に彼から振り向いて、私たちを訪ねて來てゐたマリヤ・ミニイチナを朝飯に呼びに行きました。私が出來る丈け早くお終ひにした食事の後で、私はこの客と一緒に音樂室へ行つて、詰らぬことをお喋りしましたが、それは私にはちつとも面白くありませんでした。

セルゲイ・ミハイロ井ッチが、私たちの後から音樂室へ入つて來ました、そして、私たちを見ながら、彼方此方歩いてゐました。彼がゐるといふことが、私の神經に働きかけました、で、私はだん〳〵聲高に話して、殆んどヒステリー的に笑ひました。マリヤがした話は、何でも彼でも、私にはひどく滑稽に見えました。終に、セルゲイは、何も見ずに部屋を出て行きましたが、彼が出て行つて戸が閉るや否や、私の上機嫌は、實際、マリヤがどうしたのだと私に尋ねたほどそんなに不意に、消えてしまつたのです。私は答へることが出來ないで、泣き出しさうになつて坐つてしまひました。

『あの人は私のことをどう考へてゐるのだらう。』と私は考へました。『あの人は、馬鹿々々しいことだと思つてゐるだらうか、それとも、何か惡いことだと思つてゐるだらうか。あの人が尋ねてくれさへしたら、私が話すのに！』

私は、涙が心を壓へ附けるのを感じました。そして、彼に對して腹立たしくなり始めました。けれ

ども、私は、かういふ感情を擅まにするのを不意に止めて、彼の書齋に行きました。

私が入つて行つた時には、彼は書物をしてゐました。私の足音を聽くと、彼は、私はひよいと眼を上げて、それから、靜かに書物を續けました。彼の眼附が私の氣に入りませんでした、で、私は彼に話しかける代りに、書物を取上げました。

彼は、私を見るために、再びその仕事を止めました。

『マーシャ、お前は氣分が惡いのだね。』と彼が云ひました。

私は、冷たい眼付で答へて、漸くこれだけのことを云ひました。『構つて下さらなくともようございます。』

彼は頭を振つて、靜かに笑ひました、が、生涯始めて、私は微笑に對して微笑を返へしませんでした。

『今朝はあなたはどうなすつたのです？』と私が訊ねました。『何故、私に話して下さらなかつたのです？』

『ほんの詰らない面倒だつたんだ。或る農夫たちが、町へ送られたんだよ——』

けれども、私は彼の言葉をお終ひにさせませんでした。『何故、あなたは、朝御飯の前に、私がお訊ねした時に、話して下さらなかつたのですか。』と私が訊ねました。

『僕は氣が焦々してゐたものだから、何かとぼけたことでも云つたのだらう。』

『ですが、私はあの時知りたかつのです。』

『どうしてだね。』

『あなたは、事業の方の面倒な場合には、私はまるでお役に立たないと思つてらつしやるんですものの。』

『そんなことを思つてるものか。』と彼は云つて、ペンを脇へ投出しました。『僕は、實際、お前がなくては生きられないのを知つてゐると思つてゐるんだ。お前は、僕の助けであるばかりではなく、僕の一切なのだ。僕は、ただお前のためばかりに生きてゐるんだ。で、もし僕が人生を甘い愉快なものと認めるとすれば、それは私にはお前があるからだ——それは——』

『えゝ、えゝ。あなたは、私が子供に過ぎないと思つてらつしやるんですわ。だから、いつでも容易しいことばかり云つてらつしやるんですわ。』と私は、彼が驚ろいて私を見詰めたほどの不機嫌で、彼の言葉を遮りました。『私には、もう我慢が出來ませんわ。ですが、あなたは、充分我慢を持つてらつしやいますわ——實際、ひどく充分に、』と私は、ぷり〳〵して續けました。

『まァお聽き。』と彼は、私が云ひ過ぎるのを怖れるとでもいふやうに、口早やに云ひました。『吾々は——』

『いゝえ。私はもう何も伺ひません。』と私は答へました。實は私は彼とよく話したかつたのですが、けれども、彼の默つてゐるのを亂すのが、私には面白かつたのでした。『私は、もう生活の遊びをしたくないんです。私は、あなたと同じやうに眞面目に生きて行きたいんです。あなたと對等になりたいのです。私にはさうなる權利があるんですもの。』私は、こゝで止めました。彼の頬によつた不意の、迅速な赤らみが、私が云ひ過ぎたかも知れないといふことを私に警告したのでした。

『どうしてお前は、私と對等でないと云ふんだね、私が、酔拂ひの農夫や奴等の喧嘩のことをお前に話さなかつたからと云ふのかね。』

『それだけぢやありません。』と私が答へました。

『僕の云ふことを理解しておくれよ。お前。』と彼は云ひ返へしました。『私は、長い間の經驗で、こんな面倒といふものは、いつでもほんの詰らない事ではあるが、厄介で氣の詰まるものなんだ。で、僕はお前を愛してゐるから、一切の煩ひからお前を保護しようと思つたのだ。それは、僕の生涯の事業だ。どうか、私がそれの出來ないやうにしておくれでないよ。』

『勿論、あなたは正しくてゐらつしやるんですわ、いつでも正しくてゐらつしやるんですわ。』と私は、激しく云ひ返へしました。そんなに穏かで、無感動でゐる彼を見ると、又私は腹立たしくなりました。そして、私の心と腦は相爭ふ感情で紛亂してゐました。

『マーシャ、お前はどうしたと云んだね。それは、誰が正しいなんていふ問題ぢやないぢやないか。急き込んで答へずに、ゆつくり考へて御覽。僕も、どうしてお前を怒らしたか考へて見よう。』

私は何を云へばいゝのでせう？どうすれば、彼に私の心を打明けることが出來るでせう？今となつては、彼が私を見破り、私が彼の前では子供のやうで、物事を了解し先見する彼なくしては私は何事もなし得ないのだといふやうな考が、前よりも一層私を苦しめました。

『私は、あなたには逆はふと思ふやうなことは一つもありません。』と私が答へました。『けれども、私はこのいつ迄經つても同じことゝ、この生活の懶い單調に疲れてゐるのです。私は、變化が欲しいんです。けれども、無論、あなたは、變化なんてあり得ないとおつしやるでせう。だから、無論、これもあなたが正しいのでせうよ。』

私は、かう云つて、彼を見ました。矢は標的を射ました。彼の顏には、苦痛と恐怖が見えたのでした。

『マーシャ』と彼は、低い、深く感動した聲で云ひだしました。『今吾々が云つてゐることは、戯談ぢやないんだよ。吾々の未來の生活全體が、その上に懸つてゐるんだよ。何故お前は、そんなに僕を苦めるのかねえ。』

私は、もう一度、彼の言葉を遮りました。『あなたが何を云はうとしてゐらつしやるか、私にはは

きり解つてゐるんですから、もう御面倒に説明をなさらなくともようございます。私が今申上げたやうに、あなたは、いつでも正しいんですから。』私は、恰もそれが自分ではなくて、或る片意地な精靈が私の唇に云はせてゐるかのやうに、全く冷かにさう云つたのでした。

『お前が何をしてゐるか、お前に解つてくれたらなァ！』と彼は、吃り聲で云ひました。

私は泣きだしました。そして、心が輕くなりました。私は耻ぢて、自分の言葉を悔ゐました。けれども、私は、彼を見得なかつたのでした。彼の眼が、輕蔑と憤怒——さうされても仕方ないのを私は知つてゐました——を現はしてゐはしないかと懼れたからでした。しかし、とう〳〵私が彼の方を振り向いた時、優しい、愛を籠めた眼附が、私に注がれてゐました。で、私は彼の手を取つて、云ひました——『御免なさいね。私は、何を云つたか知らないんですよ。』

『あゝ、しかし、僕は知つてゐる。お前は眞理を云つたのだ。』

『何を云つたでせう、では。』

『吾々が、直ぐにペテルブルグへ立たなくちやならないといふことを。もう何の障碍もないんだ。』

『あなたの宜しいやうに。』

彼は、兩腕で私を抱いて、優しく私を接吻しました。

『御免よ、僕は、何の考もなしに、お前のために悪いことをしてゐたのだ。』

私は、その晩、長い間ピアノに坐つてゐましたが、彼は、獨言をつぶやきながら、彼方此方歩いてゐました。それは、彼の習慣で、私は度々、彼の私語を私に繰返してくれと頼んだものです。時とすると、それは詩の斷片でした。時とすると、ただ無意味なことでした。けれども、それはいつでも、彼の心の狀態を解く鍵を私に與へてくれたのでした。

『あなたは、たつた今何を云つてらつしたの。』と私が訊ねました。

彼は、散歩を止めて、微笑みながら、レルモントフの詩の一つの句を繰り返へしました——

されど、彼、痴者は、暴風雨を顧へり
暴風雨の中に、安息あるが如くに

『あの人は、人間以上だ！あの人は、何もかも知つてゐるんだ！どうして私は、あの人を愛さずにゐられやう。』と私は考へました。私は立上つて、彼の手を取つて、彼と同じ長い足歩を執らうとしながら、彼と一緒に歩き廻り始めました。

『いや、その通りぢやないかね、』と彼は微笑みながら訊ねました。

『さうよ。』と私は靜かに囁きました。

と、陽氣な氣分が、私たちの上に來ました。私たちは、だん〴〵大股に歩きだして、とう〳〵爪先で客間に歩いて行つて、母を驚かし、お茶の用意をしてゐたドミトリイ・シドロフを怒らせました。

二

二週間後、祭禮の前に、私たちは、ペテルブルグにゐました。

ペテルブルグの私たちの旅行も、私の親戚やセルゲイ・ミハイロ井ッチの親戚と交際つて、モスクワで私たちが暮らした週間も、面白かつた夢のやうに私の眼の前から過ぎ去りました。何も彼もが珍らしくて明るく、夫の愛とその存在によつて光被されて、私たちの靜かな田舍の生活は、私たちが新たな住居にすつかり落着く前に、遠くへ去つてしまつて、半ば忘れてしまつたやうに思はれました。

私にとつて驚きであり愉快であつたのは、私が知人や親戚から、窮屈な形式的な待遇を期待してゐたにも拘らず、私は單純な心からの歡待を受けたので、私が心から悅び、直ぐに打寛ろいだことでした。それから又、私の豫期に反して、多くの交際社會の團體の中で、第一流の社交團の中でも、夫が、今まで決して私に云はなかつた關係をもつてゐるのを私は發見しました。そして、私は度々、非常に良い人であるやうに思はれる人々に彼が峻嚴な判斷を下すのをそれを不思議に思ひ、不愉快にさへ感ずるのでした。私は、何故彼が彼等をそんなに無愛想に待遇するか、何故彼が、私には知つてゐれば利益があると思はれる人々との交際を避けるかを、了解することが出來ませんでした。私は、立派な人を知つてゐればゐるほど良いことのやうに考へざるを得なかつたのでした。そして、さうした人々

はみんな、立派な人たちでした。

『私たちがニコリスコエを立つ前の日に、夫が私にかう云ひました。『この田舎では、僕等は小さなクレーズ(富豪の意)だが、ペテルブルグでは、貧乏だよ。だから吾々は、復活祭まで逗留しよう。そして、吾々は、交際社會へはあまり出ないやうにしよう、無駄費ひをするやうに誘惑されるかも知れないからね。』

『ようございますとも。』と私は答へました。『私たちは、音樂會や劇場へ行けるんですもの。で、復活祭までにニコリスコエへ歸つて來ませう。』

けれども、ペテルブルグへ着くと間もなく、この決心を忘れてしまひました。私は、突然、自分が、新らしい興味と新らしい娯樂に圍繞された、明るい新たな世界にゐるのを見出しました。それがために、私は、自分の過去の生活と、私たちが以前に作つておいた計畫とをすつかり忘れてしまつたのでした。私の眞の生活が、漸く始まつたことを私は感じました。何故であつたかは知らぬが、田舎で私を苦めた不安と憧れは、この時、魔術をかけたやうに消えてしまひました。夫に對する私の愛は、もつと落着いて來ました。そして、私はもう、彼が初めほど自分を愛してゐないのではないかなどゝいふ疑問で自分を苦めなくなりました。實際、彼は私の考の一つ〳〵を理解して、云ひ出す前に、私の望みを一切充してくれたのですからこの點では私は正當な疑惑をもつてゐる筈がなかつたのです。

度々、ひどく心の中で顫へながら、女主人の役を濟ますと、嬉しいことに、彼はかう叫ぶのが常でした——『實によく出來た、お嬢さん！全く素敵だ！』

私たちが到着後間もなく、彼は彼の母に手紙を書きました。で、手紙を書き加へさせるために、彼が私を呼んだ時、彼は、彼が書いた所を讀まないやうにと云ひました。けれども、私は直ぐに、彼が禁じたにも拘らず、いや寧ろ、彼が禁じたために、極めて自然にそれを讀みました。それはかう書いてありました——『あなたは、マーシャがお解りにならないでせう。私自身でさへ、時々間誤ついてしまふんです。彼女は、何處からあの誘惑的な優雅な擧止と、あの柔和な態勢さを得て來たのでせう。そして、彼女は、その上に、善良で單純なのです、誰でも彼女を好いてゐるんです。そして、私は前よりも尙一層彼女を愛するでせう。もしそんな事が出來るとすれば。』

『まア！』と私は考へました。『私も前より尙一層セルゲイ・ミハイロ井ッチを愛するわ。もしそんな事が出來るなら。』

私は、自分の知らなかつた親戚から歡迎されて、思ひ掛けないお世辭を受けました。こゝに叔父さんがゐるかと思へば、あちらには叔母さんがゐて、私の上へ愛嬌を積み重ねたのでした。或る人は、ペテルブルグでは私に敵ふ者がないと云ふし、他の人は、私が交際社會の花形にならうとする氣さへ起せばいゝのだと考へました。さういふ人たち全體の中で、私の氣に入つた人は、夫の從姉のデ公爵

夫人でした。その女は、もう若くはなかつたのですが、私の腦がひつくりかへるまで、私をお世辭賣めにしました。

この女が、一緒に舞踏會へ行くために私を誘ひに來ました最初の時、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、見えないほどの微笑を浮べて私を見ました。そして、取つて付けたやうに、行きたいかどうか私に聞いたのでした。私は同意の印しに點頭いて、顏を赤らめました。

『罪人が自白をしてゐるやうに顏を赤らめてゐるな。』と彼は、揶揄つて、云ひました。

『あなたは、私たちは交際社會へ出ることが出來まいとおつしやつたでせう。それから、あなたは、それが嫌ひだとおつしやつたでせう。』と私は、微笑と嘆願するやうな眼附で答へました。

『もしお前がたいへん行きたいんなら、一緒に行かう。』と彼が云ひました。

『だけど、行かない方がいゝんでせう。』

『いや、一寸一度交際社會へ行くのは、惡いことではない。あまり度々出掛けて行つて、どうせ酬いられない世間的野心に身を任せると危險なのだ。だが、この舞踏會へはきつと行くことにしよう。』と彼は言葉を結びました。

『實際を云ふと、私は、この舞踏會ほど、行きたいと思つてゐた所は他に何處もないのよ。』

私たちはそこへ行きました。そして、私の豫期してゐた愉快は、思つてゐたより以上でした。それ

は、私が情景全體の中心點であつて、宏大な廣間が私一人のために燈火を點けられたやうに、音樂が特別に私のためのみに奏でられ、群集が恍惚として私を見るためのみに集つたかのやうに、私には見えるのでした。私の髪結や小間使から、舞踏の相手や部屋々々を通して歩き廻つてゐる老人に至るまで、みんなが、私がその人たちを魅惑したことを私に了解させやうとしました。私が從姉から聞いたところによれば、會衆一同の見るところでは、私は他のごの婦人とも全く異つてゐて、田舍の花のやうに單純で清新だといふのでした。

私は、かういふ批評ですつかり醉つてしまつて、二三の他の踏舞會へ一緒に行つてくれるやうに無理にセルゲイ・ミハイロ井ッチを促しました。彼は、その主義にも拘らず、一度は喜んで私を連れて行つてくれました。そして、私の成功を喜んでゐるやうに見えました。

しかし、彼はだん〳〵交際社會を退屈に感じだしました。そして、昂奮が彼を不愉快にしました。でも私はそんなことには頓着しませんでした。で、時々、彼の物を貫くやうな眼附が私の上に止つてゐる時には、私はその意味を理解したくないと思ひました。私は、他の嘆賞や、優雅や、娯樂や、一般の變化に魅惑されてしまつて、私に及ぼしてゐた彼の確乎した、眞面目な感化が、失はれるやうに思はれたほどでした。交際社會に交ることが、私には愉快でした。それはたゞ、彼と並んでゐるからではなく、彼よりも一段高い水平線に自分がゐるといふ感情から、愉快だつたので、而も内心では、增

し加へられた力と獨立心とを以て彼を愛してゐたのでした。そして、彼が、交際社會での成功を樂んでゐる私を見るのを嫌ふのが、私には解りませんでした。私が、舞踏室に入つて、すべての人の眼が私の方に振り向く時に、高まる矜持と、自已滿足とが、私の心の中に起るのでした。けれども、そんな場合に、彼は私の傍から急いで立去つて、恰も私が彼に屬してゐることを恥ぢるかのやうに、傍觀者の中へ消えてしまふのが常でした。

『待つて下さい。』と私は、眼で彼の後を追ひながら、心の中に云ひ〳〵しました。『私たちが再び家へ歸るまで待つて下さい。さうすれば、私が誰のために美しくならうとしてゐるか、私が誰を愛してゐるかをあなたに證してあげますわ。』

たつた一度、私の夫が嫉妬をする場合もあり得るのだといふ考が、私の心に閃きました。けれども、その考は、考へるや否や消えてしまつたほど、彼はいつでも落着いてゐましたし、私の會つた若い男は、彼と比べても目立たないのでした。しかし、そんなに多くの人々が、私が訪ねた應接間で、私に注いだ注意は、ひどく私を嬉しがらせ、私の虛榮心を滿足させ、それから、私がしてゐるやうに夫を愛し續けるのは、私としては非常に賞むべきだといふことを、だん〴〵加はり行く保證と投げ遣りの態度で、私が考へるやうにさせさへもしたのでした。

『あなたがN、N夫人とどんなに親しくしてゐらしたか、私は見てゐましたわ。』と私は、舞踏會が

濟んだ或る朝、脅かすやうに彼の方に向つて私の指を震はしながら、彼に云ひました。私がさう云つた婦人は、私の大の仲好しの一人で、ベテルブルグでは評判の婦人でした。彼は、その日は、彼が特に默つてゐましたから、彼を少し揶揄ふつもりだつたのです。

『マーシャ、お前はそんな事を僕に云ふのが。』と彼は食ひしばつた齒の間で云ひました。『そんな戯談はお前には似合はないよ。そんな事は他の人にさせておくがいゝ。そんな技巧的な遣り方は、吾〻の愛とお互の尊敬とを汚すだけだ。もしさういふものが今までに汚されてゐなかつたとすれば。』

私は、耻しく感じて、沈默しました。

『いや、マーシャ、お前はどう思ふね。』と彼が訊ねました。

『私たちの愛と、お互の尊敬は、汚されてはゐませんわ。そして、決して汚されるやうなことがありませんわ。』と私が答へました。かう云つた時に、私は、自分の心全體でこの事を信じてゐました。

『それならば重疊だ！』と彼が答へました。『兎に角、もう吾〻が家へ歸るべき時だと僕は思ふ。』

その後、彼は再びニコリスコエに歸ることを暗示かしませんでした。私は、如何に彼が都會生活に疲れてゐるかを知つてゐました。けれども、私はそれと同時に、私が如何に苦んだかを覺えてゐましたので、私は、そんな生活の狀態に戻るのが云ふに云はれぬほど怖ろしかつたのでした。

冬が、驚くべき速やさで過ぎ去りました。そして、私たちの豫定に反して、私たちはベテルブルグ

で復活祭をしました。復活祭の後の火曜日に、鞄が包められて出發の用意が出來た時に、贈物や、田舍で私たちに必要のある家財の買入を濟ました夫は、またすつかり快活に人壞つこくなりました。けれども、突然彼の從姉のデ公爵夫人が來て、次ぎの土曜日まで逗留して、ベ伯爵夫人の舞踏會に出席するやうに懇願しました。

『伯爵夫人が、殊の外、あなたのお相手をしたがつてゐるんですよ。』と彼女が私に云ひました。『それは、公爵M――が、あなたは露西亞で一ばん美しい婦人だとおつしやつてね、あなたが出席なさらなけりや、公爵も出席を辭るとおつしやるからなんですよ。實際、私は、この時季のこの最後の一ばん立派な招待會の前に、あなた御自身を生きながら埋めてしまはうとあなたが主張なさるどんな理由にでも反對しようと思ふんですよ。』

公爵夫人が話してゐた間、セルゲイ・ミハイロ井ッチは、部屋の他の端で家僕に物を言つてゐましたから、彼が彼女の話を聞いたかどうか確かでなかつたのでした。

『では、どうなさるの、マリイ。』と私たちの從姉が云ひました。『ゐらつしやるの。』

『私たちは、明日ニコリスコエへ歸ゐんですの。』と私は、夫の方をチラと見て、答へました。私たちの眼が會ひました、と、彼は素早く脇を向きました。

『逗留なさるやうに私があの人に說きますよ。』と公爵夫人は言ひ張りました。

『でも、さうすると私たちの計畫がすつかり毀れてしまふんですもの。』と私は、讓步したいと願つてはゐたのですが、云ひました。

『今晩お前が出掛けて行つて、公爵に御挨拶した方がよくはないかね。』と夫が、私が前に見たことがないほど昂奮して、答へました。

『は、は！』と從姉は笑ひました。『この人は、ほんとに嫉いてゐるんだよ。面白いわ。靜かなこの人が威勢よくなつたのを見たのは、これが初めてだわ。だけど、實際、セルゲイ・ミハイロ井ッチ、私たちがこんなにマリイさんに來て貰ひたがつてゐるのは、公爵のためばかりぢやないんですよ。』

『彼女は彼女の好きなやうにしていゝんだ。』と夫は、云ひ返へして、部屋を出て行きました。私は、彼が不思議に昂奮してゐるのを見ました。で、私は、公爵夫人にきつぱりした答をしませんでした。

彼女が歸つてしまふと、私は夫を探しに行きました。そして、彼が考に沈んだ顏をして、圖書室を彼方此方步いてゐるのを見つけました。

『あの人は、ニコリスコエのことを考へてゐるんだ、私たちの心持のいゝ小さな部屋の樂しい朝飯のことを考へてゐるんだわ。』と私は心の中で云ひました。『それから、彼の畑のことや、彼の農夫のことや、音樂室の私たちの樂しい宵のことや、その直ぐ後で私たちが晩御飯を盜み出すことを考へてゐるんだわ。どうして、どうして！世界ぢゆうの舞踏會全體でもあの人の優しい愛には價しないんだ。

千人の公爵の媚や注意をもつてしても、彼の樂しげな微笑の一つを私は與へないだらう。』

彼が私を見て、ひどく怖い樣子で彼の額に皺を寄せた時に、私は、明日家へ歸るといふ私たちの始めの意志を守りたいんだと彼に云はうとしました。溫順な、考深い表情が、彼の顏から消えてしまつて、その代りに若々しい、陰鬱な表情がありました。と、不意に、彼は、洞察する智慧と、靜かな保護を湛へた眼附をしました。彼は、決して、單純な人間性を彼の顏に現はすのを好みませんでした。私に對しても、彼は臺座の上に立つ牛神のやうになつてゐるのを望みました。

『どうしたの、お前。』と彼は、振り向いて私に向ひ合つた時に、何心なく尋ねました。

私は、初めは、答へませんでした。私は、私が好いてゐる通りの彼でなくて、私を作つてゐる彼を見るのを苦しく感じました。

『お前は、土曜日のその舞踏會に出やうと思つてゐるの。』と彼は尋ねました。

『出たいには出たいんですが、荷造りも出來てゐますし、それに、あなたには不愉快でせうから。』と私は答へました。彼の冷淡な調子を腹立たしく思ひましたので、私は冷やかに答へました。そして、それと同時に、私は、私が自ら進んで犧牲にしたのを彼が妨げたので、焦れたのでした。

彼も、冷やかに私を見ました、實際、今まで彼がそんなに冷やかに私を見たり、私に話しかけたりしたことは一度もなかつたのです。

『僕は、來週の水曜日まで立たぬことにしよう。』と彼が云ひました。『そして、荷を一切解くやうに命じよう。』昂奮する時いつもするやうに、彼は、早い、焦々した足取りで、床の上を彼方此方歩きました。

『私は、ほんたうにあなたが解らない。』と私は、眼で彼の行動を追ひながら、云ひました。『どうして、あなたは、そんな變なことをおつしやるの。私は、いつでも、あなたのために私の愉樂を犧牲にする氣ですのよ、どうして、あなたは、私にそんなに冷淡になさるの。』

『お前が、僕のために犧牲に！』と彼は、最後の言葉に力を入れて云ひました。『ぢや、僕の方でもお前に一つ犧牲をしやう、さうすれば、とんぐ〜だ。どんな幸福な夫婦からでも、これ以上のことが期待出來るものか。』

私が、こんな嘲弄的な言葉が彼の唇から漏れるのを聞いたのは初めてでした。で、その結果は、私を怒らせて、私を固くならせました。

『あなたは、たいへんお變りになつたのね。』と私は、溜息をついて云ひました。『どうしたんです の。怒つてらつしやるの。きつと、今度の夜會のことだけぢやないんでせう。あなたは、きつと以前から何か私がお氣に入らぬことがあつたのでせう。どうなのか打明けて下さいな。』

『あの人は、どう云ふだらう。』と私は、彼が私のことでは、これんばかりの無分別もしなかつたこ

とを憶ひ出して、滿足して、尋ねました。さう云つた時に、私は、彼が歩いてゐるためにどうしても私の所を通らなければならない、部屋の眞中へ歩いて行きました。

『あの人は、私の所へ來て、私を抱擁するだらう、そして、すつかり仲好くなるだらう。』と私は顧ひました。けれども、彼は、部屋の他の端で立停つて、私を見ました。

『お前には、私が解らないんだね。』と彼が尋ねました。

『いゝえ。』

『それでは、今初めて私の心の中で働いてゐる感情は、僕が直ぐに鎭めることの出來ないものだといふことを、お前に云はして貰はう。』

さう云つた時に、彼は、彼の聲の荒々しさで幾らか衝動を感じたかのやうに、じつと立停りました。

『それは、どういふことですの。』と私は、我を忘れて泣きながら、尋ねました。

『かういふ譯だ。お前が公爵の御趣味に適つたからと云つて、お前が、夫や、お前自身や、女の權威を忘れてしまつて、公爵の後を追ひかけて行くといふのが、僕は腹が立つのだ。お前自身が、權威の一切の自意識を忘れたので、お前の夫が何を感ずるかといふことさへも、お前には了解出來ないんだ。それどころぢやないんだ、實際、お前は、夫の所へ來て、かう云ふたんだ。お前がいつでも自分

を犧牲にするだなんて。それは、「私は、公爵を悅ばすことが出來れば嬉しいのですけれど、私の夫の僻見が氣になるから、私はその滿足を忍ぶんだ、」と云ふのと同じなんだよ。』

さう云つた時、彼はだん〳〵熱心になつて、自分の聲や言葉で昂奮させられてゐるのでした。彼の顏は輝やいてゐました。そして、私は彼が怖くなりました。と、私の自尊心は傷けられて、私は彼に讓歩しようとは思ひませんでした。

『私は、いつかこんな事が起るだらうと期待してゐました。』と私は云ひました。『さあ、おつしやい。』

『お前の方で何を期待してゐたか、僕は知らん。だが、僕は、贅澤と、怠慢と、放埒とのこの渦卷の中で、毎日々々お前に注目しながら、一ばん惡い事を期待してゐたんだ、僕は今日事實となつたやうに、恥辱を受けるのを怖れてゐたんだ、お前の友だちがやつて來て、その汚れた手で僕の心臟を引裂き、僕の嫉妬を嘲笑したんだ——僕が誰に嫉妬をしてゐると云ふんだ？お前も僕も少しも知らない男ぢやないか！そして、お前は、僕を了解が出來ない。お前は僕に犧牲を捧げると云ふ——僕はお前のためにも自分のためにも恥ぢる——犧牲だと、實際！』

『何といふ人なのだらう。』と私は考へました。『私はあの人を怒らすやうなことは何一つしなかつた。けれども、私が跪いて、あの人が怒るのは無理がないといふことを私が認めたなら、あの人は

私を好くだらう。私はそんなことをしない。』

『いゝえ。私はあなたに犧牲を捧げはいたしません。』と私は云ひました。私の鼻孔は擴がり、頬は燃えました。『私は、土曜日にペ伯爵夫人の家へ行きます。』

『澤山樂しんでゐらつしやい。』と彼は、侮蔑をもつて、叫びました。『けれども、吾々の間は、みんなもうお終ひだ。僕は實際馬鹿だつた——』この時、彼の唇は顫へました。そして、露はな努力でもつて、彼の言葉をお終ひまで云つてしまふまいとしました。

その時、私は彼を憎み、彼を怖れました。私は、どんなに喜んで、侮蔑に侮蔑をもつて答へ、嘲笑に嘲笑をもつて答へたことでせう。しかし、私は、ひどい歔欷に終るのを惧れました——それは無言の屈服でした——ので、口を開き得ませんでした。

私は、默つて部屋を出て行きましたが、彼の足音が聞えなくなるや否や、私は、一度私たちを結び附けた幸福な絆を私が斷切ることが出來るかどうかを考へて見たのでした。私は、半ば彼の所へ歸つて行かうと決心しました。けれども、彼が正しくて、私の過失であつたことを認めて、私が仲直りに來たものと解釋するのを私は怖れたのでした。彼は、高慢に落着き拂つて、私を赦してはくれないだらう！おゝ！どうして彼はあんなに私に腹を立てさしたのだらう。あんなに私を愛してゐた彼が！で、私は獨り自分の部屋に止まつて、諷刺の一語々々を憶ひ出しました、そして、優しい、落着い

た考が出て來て、私が抱いてゐた荒々しい考を一掃するまで、默つて泣いてゐました。

私が、中食の食卓に坐つた時、そこにはお客のO——氏が坐つてゐましたが、私は、私たちの間にほんたうに大きな溝があるのを感じました。O——氏は、何時ペテルブルグを立つ積りかと訊ねました。

私が答へる前に、セルゲイ・ミハイロ井ッチが答へました——『次ぎの火曜日に。私たちは、土曜日にペ伯爵夫人の夜會に行きます。お前も行くだらう、ねえ。』かう彼は、皮肉な嘲笑的な表情で、私に云ひました。

『えゝ。行かうと思つてゐますわ。』と私はおづ〳〵彼を見ながら答へました。

その晩、O——氏が歸つた後で、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、私の悦へ來て、私に手を借してくれと、叫びました——『今朝お前に云つたことは、どうか宥しておくれ。』

私は、彼の手を取りました、顫へる微笑が、私の頭上を飛び廻はつて、私の眼は涙で一ぱいになりました、しかし、彼は荒々しく彼の手を引いて、怡も彼がこの光景を怖れてゐるかのやうに、離れて坐りました。

『彼は、まだ自分が正しいと考へてゐる、そんなことが有り得るだらうか。』と私は疑ひました、そして、私は、彼が有體に打明けてくれて、夜會に行かないでもいゝと云つてくれるやうに、舌の先き

まで言葉が出かゝつたのでした。

所が、夫が不意にかう叫びました――『僕は、吾々の旅行を延ばしたことをお母さんに云つてやらなくちやならない、さうでないとお母さんが心配するから。』

『では、何時立つんですか。』

『次ぎの火曜日に。』

『もう他に何にも差支へが起らなければようございますがねえ。』と私が云ひました。所が、彼は、それがために、會話を進めることが出來なかつたやうな、その眼に奇怪な色を浮べて、私をじつと見ました。

私たちは、舞踏會へ行きました、そして、外見上ではすつかり、私たちは再び仲が好いやうに見えましたが、ほんたうは、過去とは非常に違つてゐるのでした。公爵が私に近づいた時に、私は二人の貴婦人の間にゐました、そして、私は、無論、立上らずにはゐられませんでした。私がさうした時に、私はセルゲイ・ミハイロ井ッチの方をチラと見ました、彼は顔を背けました。私は、良心を感じて、公爵の凝視の下に、自分が顔を赧らめて、間誤々々してゐるのをひどく不愉快に感じました。私たちの會話は簡單でした、公爵が私の傍に坐るにも、空席がありませんでした、そして、彼が私の傍を立ち去る時に、彼は私の夫と知己になりたいものだと云ひました。

その晩遅くなつてから、私は、二人が、部屋の他の方で一緒に立つてゐるのを見ました。公爵は、微笑を浮べて私を見ましたから、何か私のことを話したに違ひないのです。突然、セルゲイ・ミハイロ井ッチが、赧くなつて、低いお辭儀をして、荒々しく公爵の傍を立ち去りました。『公爵は私のことをどう思つてゐるだらう、殊に私の夫のことをどう思つてゐるだらう。』と私は考へました。私は、こゝに出席してゐる殆んど誰も彼もが、如何に公爵がセルゲイ・ミハイロ井ッチによつて遇はれたかを見たに違ひないと思ひました。『みんなが何と思つたかは神樣だけが御存じなのだ。』と私は心の中で云ひました。『多分みんなは私たちの間の狀態を推察したに違ひない。』

私の從姉が、私を馬車に乘せて家へ連れ歸つてくれました、で、その途中で、私はこの不幸な夜會のために、私たちの間が面倒になつたことを彼女に話しました。彼女は、私を慰めて、そんな小さな暴風は、どんな結婚生活にも起るものだが、後には何の痕跡をも殘さずに過ぎ去るものだ、と云ひました。それから、彼女は、私の夫が、たいへん奥底のある、高慢な人だと云つて非難しました、それがために、私は彼の性格を一層理解し、今までよりも穩かな方法で彼の行爲を判斷することが出來たやうに思はれましたので、私はその意見に同意しました。

けれども、家に歸つて、獨りになると、その言葉が石のやうに私の意識の底に横はつてゐました、そして、私は、私たちを隔てた間隙が、私自身の過失を通じて、だん〳〵廣く、だん〳〵深くなりつ

ゝあるのを感じました。

三

その日以來、私の生活の形に大きな變化が來ました。私たちは、二人だけでゐる時に、もう安慰を感じませんでした、そこには私たちが議論するのを避けてゐる或る問題が横はつてゐました。そして、第三者がゐることは、いつも救ひとして喜ばれたのでした。會話が進んで行くうちに、夜會か田園生活に就てこれんばかりでも云ひ出さうものなら、不思議な光が、私たちの眼の中で躍り出して、お互を見るのにひどく狼狽するのでした。私たちは二人とも、何處で、どうして、その溝が私たちを隔てたかを知つてゐるかのやうに、そして、私たちが、その崖の縁に近づくのを怖れてゐるかのやうに、見えました。私は、彼が高慢で、片意地であつて、私が、彼の缺點との如何なる衝突をも避けるために注意深くなければならないのだと深く感じました。それから、彼は、彼の力では、私は交際社會から離れて、生活が出來ないし、田園生活には私は適しないのだし、彼は私のこの不幸な趣味を放任しなければならぬのだと信じてゐました。かうして、兩方で、私たちは、一切の不愉快な問題を直接に話し出すのを避けて、私たちが互ひに間違つた判斷をしてゐたのでした。私たちが、お互ひのために世界ぢゆうでの最も完全な存在でなくなつてから、ずゐぶん經ちました、いや、それ所ではなく、私た

ちは、私たち自身を吾々の周圍の他人と比較し、各々別々に自分の意見で、私たちの性格の缺點を察と考へてゐたのでした。

私たちがニコリスコエへ立つ前の日に、私は病氣にかゝつたので、ペテルブルグに近い貧別莊に移つて、そこから夫だけが母のところへ歸つて行くことになりました。彼が立つ時には、私は彼と一緒に出掛けられるほどに恢復してゐたのですが、彼は、私の健康が氣がゝりだといふ口實の下に、止まるやうに私を說きました。私は、彼は私の健康のために惧れてゐるのではなくて、私たちが田舍では仲好く暮せないのを惧れてゐたのだと感じましたので、私は、極めて穩かに、自分の意見を通さずに後へ殘ることにしました。

彼がゐないので、私は、退屈で淋しく感じました、けれども、彼が歸つて來た時には、彼が會て附加へたものを私の生活に附加へなかつたのを見ました。私たちの以前の關係——どんな思想でも、どんな印象でも、彼と一緒にそれを味はない時は、犯罪のやうに私を苦めたあの時分のです、彼の行爲の一つ々々、彼の言葉の一つ々々が、完全の典型のやうに思はれて、互に見交はす時に、喜びのために笑つたあの時分のです——あゝいふ關係は、それが無くなつてしまつたのを私たちも見附けることが出來なかつたほど知らず識らずの間に他の狀態に移つて行きました。私たちはいづれも、別々の興味を見付けて、現在ではそれを頒たうとしなかつたのでした。私たちが、お互ひに隱してゐる別々の

祕密の世界を持つてゐるのを苦にしないやうにさへなつたのでした。私たちは、さういふ考に馴れてしまつて、一年後には、眼を見合しても、氣まづく感じないやうになりました。私に對する彼の開けつ放しの快活や、彼の子供らしさや、彼の寛大や、以前には私を苦めた彼の放心は、全く消えてなくなつてしひました、以前には私を當惑させ、私を喜ばしたあの凝視はもうなくなりました、祈禱や恍惚もなくなりました。私たちは、度々互に見合さないやうにさへなりました。彼は、斷えず旅行に出て留守で、私を殘しておくことを恐れもしなければ、悔みもしませんでしたし、私は始終交際社會に出て、彼の必要を感じなかつたのでした。

私たちの間には、もう芝居も爭ひもありませんでした、私は彼を滿足させやうと試みました、彼は私の希望をみんな充してくれました、そして、私たちは、或る意味でお互に愛してをりました。

私たちが二人でゐることは滅多にありませんでしたが、若し二人でゐる時には、私は、彼と一緒にゐることに何の喜悅も、感情も、當惑をも感じませんでした、それは恰度、私がたつた一人でゐるやうでした。私は、それが私の夫――ちつとも珍らしくなく、知らない人ではなくて、善良な人である――私が自分を知つてゐるやうによく知つてゐる夫であることがよく解つてゐました。私は、彼が何をなし、何を云ひ、どんな樣子をするかを悉く知つてゐました、で、もし彼が私の期待してゐたやうな行爲をしないか、若くは私の期待してゐたやうな樣子をしない場合には、それは彼の間違ひから來

たやうに私には思はれるのでした。私は、彼から何ものをも期待しませんでした。實際、彼は私の夫で、それ以上の何ものでもないのでした。私には、これは實際、さうでなければならぬので、それよりも以外の關係は何處でもあり得ないので、又私たちの間にはこれと違つた關係がなかつたやうに思はれました。彼が出掛けた時は、殊に最初彼が出掛けた時は、私は淋しさと焦燥とを感じました。彼がゐなくなると、私は彼が私を支へてくれてゐる價値を一層鋭く認めたのでした。彼が歸つて來ると私は悅びに滿ちて彼の頭に縋りつくのですが、二時間經つと、私はこの悅びをすつかり忘れてしまつて、何も彼に云ふことがなくなつてしまふのです、たゞ私たちの間に起る、靜かな、眞面目な柔和の瞬間には、何かゞ間違つてゐるやうに思はれて、私は心に痛みを感じました、そして、彼の眼の中にも同じものを讀んだやうに思はれました。私は、彼が越えることも出來ないし、私も越えることが出來ない感情の限界を意識しました。時とすると、それは私にとつては悲みでしたが、私にはそれに思ひ耽つてゐる暇がありませんでした、そして私は、この悲みを、いつも私には出來る娯樂の中の漠然たる變化で忘れようと試みたのでした。最初はその光彩と私の虛榮への媚びによつて私を眩惑した社交生活は、やがて私の嗜好をすつかり支配し、習慣となり、私を束縛してしまひ、そして、感情のために存在する私の心の中の空間全體を占領してしまひました。私は決して一人でゐることがなくなつて、私の地位を思ひ沈むのを怖れたのでした。朝遲くから夜遲くまで、私の時間全體は忙がしかつた

のでした。そして、何處へも出掛けない時でさへも、それは私のものではないのでした。それは、現在では、私にとつて嬉しくも退屈でもありませんでした。いづれにせよ、それは、いつでもさうでなければならないのだと私には思はれました。

こんなにして三年は過ぎてしまひました、その間に、私たちの關係は、やはり同じで、全く停止し、結晶して、善くも惡るくもなることが出來ないやうでした。この三年間に、私たちの家庭生活に二つの重要な出來事が起りました、けれども、それは私の生活に影響を與へませんでした。それは、私の長子の出生と、タチヤナ・セメヨーノウナの死とでした。最初は、母親の感情が、非常な力で私の中に起り、心の中に思ひ掛けない恍惚の情を生ぜしめて、私のために新たな生活が始まるのだと思はれたほどでした、けれども、二ケ月經つて、私が又交際社會に出掛け始めると、この感情は、だんだん弱くなつて、習慣と冷たい義務の履行とに變つて行きました。私の夫は、それとは反對で、私たちの長男の出生以來、以前のやうな柔和な靜かな人になつて、いつも家にゐて、以前のやうな優しさと快活とを、今度は子供に注ぎました。子供に夜の祝福をしてやるために、舞踊衣のまゝで育兒室へ入つて行つた時に度々、私はそこに夫がゐるのを見ました、私は、非難してゐるやうな、嚴めしく凝視してゐるやうな彼の眼が私の上に注がれてゐるのを見て、恥しく感じました。私は、突然、子供に對する自分の無關心を思つて戰慄し、自分に訊くのでした。『私は、他の女たちよりも惡いのだらう

か。でも、私はどうすることが出來やう。』と私は考へました。『私は私の子を愛してゐる、けれども、私は何日間も私と一緒に坐つてゐることは出來ない、それは私には退屈だ、そして、私は何事にでも自分の感情を伴ることは出來ない。』私の母の死は、私にとつては非常な悲みでした。私が云つたやうに、母が亡くなつてから、ニコリスコエにゐるのは、彼にとつては苦痛でした、けれども、私にとつては、彼女のために傷み、私の夫の悲愁に同感したにも拘らず、今では田舍にゐるのが以前よりも樂しく、住心地よくなつたのでした。このまる三年間の大部分を、私は都會で暮らしました。田舍へは二ケ月に一度行つたきりでした、そして、三年目には、私たちは外國へ出掛けて行きました。

私たちはその夏を或る浴場で過しました。その時、私は二十一でした。私たちの狀態は、景氣がいゝやうに私には思はれました、私は家庭生活から、それが與へたより以上の何ものをも要求しませんでした。私が知つてゐる人は誰も彼も、私を愛してゐるやうに見えました、私の健康は良好で、私の衣裳は溫泉では最新流行のものでした。私は自分が美しいのを知つてゐました。天氣は晴朗で、美と典麗の特種の空氣が私を圍繞してゐました、そして、私は非常に幸福でした。私が、自分の心の中で幸福であることを感じた時に、私がその幸福に値ひしてゐるのを感じた時に、私の幸福は大きいが、人はだん〳〵大きな幸福を願ふものだから、私の幸福がもつと大きくなるべき筈でさへあるのだと感じた時に、私は、ニコリスコエで幸福であつたやうには幸福ではないのでした。あの時は別な心持で

した、けれども、この夏も亦、私は滿足してゐました。私は、何ものも欲しくはありませんでした、何ものをも望みませんでした、何ものをも恐れませんでした。私の生活は、充實してゐて、私の良心は平靜であるやうに思はれました。

この季節に私が會つたあらゆる若い人々の中で、私が何かの道で殘餘の人たちから目立つて違つてゐると思つた人は一人もゐませんでした。ひどく私に注意を寄せてゐたわが國の公使である年寄の公爵Kからさへも目立つて違つてゐる人は一人もゐませんでした。或る者は若く、或る者は老人でした。或る者は金髪の英國人で、或る者は口髭のある佛蘭西人でした。みんなが私には一樣でした。みんなが私にとつて欠くべからざる人でした。この一樣に特徴のない人たち全體が、私の周圍に歡樂の雰圍氣を作つたのでした。彼等の中でたゞ一人、伊太利人の侯爵D——だけは、彼が私に對して示した感嘆の表現の大膽さで、殘餘の者よりも一層私の注意を引きました。彼は、私と一緒にゐたり、舞踏したり、倶樂部などで私と一緒にゐたり、私が美しいと云つたりする機會を決して逸しませんでした。時とすると、私は、私たちの家の傍の窓から彼を見ました。時とすると、彼の輝やいた眼の不愉快な、意味ありげな凝視が、私をして顔を赧らめさせ、私をして脇を振り向かせました。彼は、若くて、美しくて、優雅でした。そして就中、その微笑と眉の表情が、私の夫に似てゐました。尤も、彼は夫よりも遙かに好男子でしたが。全體に、彼の唇や、眼や、長い顎には、私の夫のもつてゐる親切の絶

美なる表情と理想的な平靜の代りに、何か粗野な、動物的なところがあつたが、この夫との類似が、私を牽きつけました。

その當時、私は、彼が私を狂熱的に愛してゐると想像してゐました。そして時としては、誇りのある憐憫をもつて、彼のことを考へました。私は、時々、彼を穩めて、温和な、半ば愛を籠めた信頼の調子に彼を導かうと試みました。けれども、彼は斷然この企てを斥けて、如何なる瞬間にも表現を見出さんと脅迫する彼の無言の情熱によつて不愉快にも私を困亂させ續けたのでした。私は自分自身ではそれを承認しなかつたのですが、この男を怖れ、自分の意志に反して、この男のことを考へました。私の夫は、彼と知合つてゐましたが、私たちの他の知合——その人々の前では、彼はその妻の夫としてのみ存在してゐるのでした——よりももつと冷淡に、もつと横柄にさへ彼に對して擧動つてゐたのでした。

この季節の終る頃、私は病氣にかゝつて、二週間の間家を出ませんでした。私が病後初めて、音樂を聽きに夜外出した時に、私は、永い間期待されてゐた、有名な美人のSといふ婦人が、この二週間の間に到着したのを見出しました。一團の人が私の周圍に集まりました。人々は悅んで私を迎へましたけれども、全くそれよりも良い人の團體が、この有名な美人の周圍に集まつてゐました。私の周圍にゐた人が誰も彼も、その婦人と彼女の美の他には何事も話しませんでした。人が彼女を私に指示し

ました。所が、彼女は確かに魅惑するほど美しかつたのですけれども、私を不愉快に感じさせたのは、彼女の顔の高慢らしい表情でした。で、私はさう云ひました。その日は、私には、前に愉快に見えたものが、何も彼も退屈に見えました。翌日、S夫人は、城見物の會を催ほしましたが、私は仲間へ加はるのを斷りました。誰も私と一緒に殘つてゐる者はゐませんでした。そして、一切が私の眼には變つてしまひました。何も彼もが、誰も彼もが、私には馬鹿げて退屈に見えました。私は泣きたくなりました。大急ぎで私の療治を終つて、露西亞へ歸りたくなりました。私の魂の中には、一種の惡い感情があつたのですが、私はまだ自分にはそれを承認しませんでした。私は、まだ丈夫になつてゐないのだと信じました。そして交際社會に出るのを止めて、たゞ時々朝鑛泉を飲みに行つたり、私の相識の露西亞夫人のL・Mと附近の田舍へ馬車を驅つたりしました。私の夫は、當時不在でした。彼は暫らくハイデルベルヒへ行つてゐて、私の療治が終つて、露西亞へ歸るのを待つてゐました。そして彼は、時々私に會ひに來るだけでした。

或る日、S夫人は、そこの交際社會全體を遊獵に連れて行きました。そして、L・Mと私は晝食の後で城へ馬車を驅りました。私たちは、胡果の古木の下の旋回した坂路を靜かに馬車を驅り、その木の間から日沒の太陽に照らされた遠方に、バーデンの美しい典雅な郊外を見ながら、前にしたことのないやうな眞面目な調子で話をしました。永い間知合つてゐたL・Mがこの時初めて、私は、どん

な事でも話の出來る。友だちにして愉快な、善良な智慧のある婦人であるのを私は深く感じました。私たちは、家庭のことや、子供のことや、こゝの生活の空虛なことに就いて話しました。私たちは、露西亞とその田園生活を憧れ、一種の快よい憂鬱を感じました。この眞面目な感情の影響を受けながら、私たちは城の中へ入つて行きました。城壁の中は、涼しく蔭つてゐましたが、太陽の光はまだ廢墟の上を這ふてゐて、足音と人の聲が聞えてゐました。私たちは、私たち露西亞人の眼には冷たいが、極めて美しいバーデンの風景が、城門で恰度額縁の中へはめられたやうになつてゐるのを見ました。私たちは、休むために坐つて、默つて日沒を眺めてゐました。人聲が先程よりもはつきり聞えて來ました。そして、私の苗字が話されてゐるやうに私は思つたのです。私は耳をそばだてました。と、知らず識らず一語〳〵々々を聽き取りました。

それは私の知つてゐる聲でした。それはD侯爵と、彼の友人で、私も知つてゐる佛蘭西人でした。二人は、私と夫人のことを話してゐるのです。佛蘭西人は、私と彼女を比較して、二人の美しさを解剖してゐました。彼は何も無禮なことは云はなかつたのですが、彼の聲を聞くと、血が私の心臟に突進みました。彼は、私とS夫人の良い點を細かに數へあげてゐるのです。私にはもう子供があるが、S夫人はやつと十九にしかならない。私の髪は優つてゐるが、S夫人の姿は私のよりも優婉だ。S夫人は家柄の貴婦人である。『君のは。』と彼は云ひました。『中流階級に屬するので、近頃こゝへ度々やつ

て來る、小さな露西亞貴族の一つに過ぎないんだ。』彼は、私がS夫人との競爭をやめて、バーデンで埋もれてしまふ方がいゝのだと云つて、語を結びました。

『それでは、彼女のために氣の毒だ。』

『彼女が、君によつて自ら慰めやうとせざる限りはだね……』と彼は、娯樂の殘酷な笑聲とともに、言ひ添へました。

『もし彼女が立つたら、僕は彼女の後を追ふ！』と一つの聲が、伊太利風のアクセントで、粗野に云ひ切りました。

『幸福な男だね、まだ戀することが出來るのは！』と佛蘭西人が云ひました。

『戀！』とその聲が云つて、默りました。『僕は戀をしないではゐられない——戀がなくちや生活がない。生活から小説を作ることが、たつた一つの價値あることだ。そして、僕の小説は、中途で止めにはしない。僕はきつとお終ひまで持つて行つて見せる。』

『"Bonne chance, mon ami"（幸運を祈る、わが友よ。）と佛蘭西人が云ひました。

二人は角を曲りましたので、私たちはそれから先きを聽きませんでした、そして、私たちは、他の方角に二人の足音を聞きました。彼等は、階段を降りて來ました、そして、數分間後には、側門を出て來て、私たちを見て非常に驚きました。D侯爵が私に近づいて來た時に、私は顏を赧くしました。

そして、城を立去る時に、彼が私に腕を差出したので、恐怖を感じました。私はそれを辭することが出來ませんでした。で、私たちは、侯爵の友だちと一緒に歩いてゐるL・Mの後に隨いて、私たちの馬車まで一緒に歩いて行きました。

私は、密かに、佛蘭西人は、私が自分が感じてゐたことを言葉に言ひ表はしたに過ぎないのだと認めてはゐましたが、彼が私に就いて云つたことを、私は屈辱に感じました。けれども、侯爵の言葉の粗野なのは、私を驚かせ、私に衝動を感じさせました。私は彼の言葉を聽いたのだが、それにも拘らず、彼が私を憚かつてゐないことを考へると私は淺間しくなりました。私は、彼が私の傍にゐるのを感じて、嫌に思ひました。そして、彼を見ず、彼に答へずして、私は、L・Mと佛蘭西人の後を追ふて急いで歩いてゐる間に、彼の云つたことを聽かないやうに、私の腕の位置を保たうと試みました。

侯爵は、美しい景色に就いて、私に逢つた思ひ掛けない幸福に就いて、それから尙何か他のことを云ひましたが、私はそれを聽きませんでした。恰度その時、私は自分の夫や、子供や、露西亞のことに就いて考へてゐました。私はそれを恥ぢ、何事かを悔み、何事かを憧れてゐました。そして、恰度今私の心の中に起りかゝつたすべての事に就て、閑暇に任せて物思ひに沈むために、オテル・ド・バード（旅館の名）の私の寂しい部屋に歸るのを急いでゐました。けれども、L・Mはゆつくり歩いてゐました。馬車まではまだ距離がありました。私の護衛者は、私の想像では、私を引き止めようとして

るるかのやうに、執拗にその歩調を緩やかにしてゐるやうに思はれました。『そんなことがあつていゝものか！』と私は考へたのでした。そして、心を決して早く歩きだしました。けれども、彼は眞實に私を引き止めました。そして、私の腕を締めつけさへするのです。L・Mが道の角を曲つたので、全然私たちだけになりました。私は恐怖を感じました。『御免なさい！』と私は冷かに云つて、私の手を自由にしようと思ひましたが、私の袖のレースが彼の釦に引掛かりました。彼の胸を私の方に曲げ屈めて、彼はそれを外づさうとしました。そして、彼の手袋をはめてゐない指が、私の手に觸れました。私にとつて全然新たな感情——半ばは恐怖で、半ばは嬉しい——が私の背中を身顫ひのやうに走り下りました。私は、私が彼に對して感じた一切の輕蔑を冷やかな眼附で示めさうとして彼を見ました。けれども、私の一瞥は、さういふことを表はしませんでした——それは、驚きと亢奮を表はしました。私のこの顏に近づいてゐる、彼の顰やいた、濡ひを帶びた眼は、私を、私の頭を、私の胸を、狂熱的に見詰めてゐました。彼の兩手は、私の腕の手頸の上に觸れてゐました。彼の開いた唇は、何事かを云ひました——彼が私を愛してゐること、私は彼にとつては一切であることを云ひました——それから、その唇は、私に近づかうとしてゐたのです。そして、その手は尙一層強く私の手を締めつけて、私を燒くかと思はれました。火が私の血管を通つて走りました。私の眼の前に霧が覆ひかゝりました。私は身慄ひしました。そして、彼を止めようとした私の言葉は、喉の中で死んでしまひ

ました。不意に、私は頰の上に接吻を感じました。そして、惡感と戰慄を感じて、私は立停つて、彼を見詰めました。口を利くことも動くことも出來ないので、私は何事かを豫期し、且つ願ひながら、恐怖の中に立つてゐました。すべてかういふ事は、一瞬間の間だけ續いたのでした。けれども、その一瞬間が恐るべきものでした。その瞬間に、私は、彼の全體をすつかり見ました。私は、彼の顏を非常に完全に了解しました。麥藁帽子の下にある、私の夫の眉によく似た、險しい、低いその額や、膨らんだ小鼻を持つてゐる、美しい、眞直なその鼻や、その口髭と油で尖らした小さな髯や、その滑かに剃つた頰と日に燒けた頸を。私は、彼を憎み、彼を怖れました——彼は、或る別世界の人でした。けれども、その瞬間に、私の中にある或ものが、その憎むべき他人の昂奮と情熱に、非常に強く反應しました。その粗野な、美しい口の接吻に、美しい血管を持つて、指に指輪をはめてゐる、その白い手の抱擁に、私自身を委ねやうとする征服し難い怖れが、私の心の中にありました。私の足下に不意に開けた、禁斷の快樂の誘惑的な深淵へ、自分を眞逆まに投込まんとする慾望が、私を捕へました。

『私は、非常に慘めだ。』と私は考へました。『災厄がもつと〳〵私の周圍に集まつてくればいゝ。』

彼は、一本の腕を私の身體へ廻はして、私へ屈みかゝりました。

『恥辱や罪惡が、もつと〳〵私の頭の上に堆積してくればいゝ。』

『Je vous aime.』（私はあなたを愛する。）と彼は、私の夫の聲によく似た聲で囁きました。その聲

で、今では一切關係が斷えてゐるが、長い間私にとつては尊重すべき存在であつた私の夫と子供が私に戻つて來ました。所が、不意に、その瞬間に、L・Mが道の曲角で見えない所から、私を呼びました。私は、我に返つて、私の手を振りもぎつて、彼を見ずに、L・Mの後を追つ駈けました。私たちは馬車に乘りました。その時になつてやつと、私は彼をチラと見たのでした。彼は帽子を脱いで、微笑みながら、私に話しかけました。この瞬間には、私が彼に對して感じてゐた云ふに云へない嫌惡を、彼は少しも感づいてゐないのでした。

私の生活は不幸で、未來には希望がなく、過去は暗いやうに、私には思はれました。L・Mが私に話しかけましたが、私には彼女の云ふことが解りませんでした。彼女は、私が彼女の中に呼起した輕蔑を隱くすために、たゞ憐憫の情から私に話しかけてゐるやうに、私には思はれました。一語々々に、眼附の一つ々々に、この輕蔑と屈辱的な憐憫を見るやうな氣がしました。かの接吻は、恥辱でもつて私の頰の上に燃えてゐました。夫と子供のことを考へる、と、耐へ難い思ひがしました。私は、自分の部屋でたつた一人になつた時に、私の地位を考へたいと思ひましたが、私には一人でゐるのが怖かつたのでした。私は、誰かゞ持つて來た茶を飲みませんでした。そして、何故そうするかを自分にも知らずして、直ぐに、熱病のやうな迅速さで、夫の所へ行かうとして、ハイデルベルヒ行きの夜汽車に乘る用意をしました。私が小間使と一緒に空いた馬車に乘つた時に、汽罐車が動きだして、新鮮な

空氣が、窓から私に吹きつけた時に、私は初めて自意識を回復して、自分の過去と未來を一層はつきりと心に描き始めたのでした。私たちがベテルブルグに移つた時からの私の結婚生活全體が、不意に新らしい光に照されて私の眼の前に現はれ、非難するやうに私の良心の上に横はりました。この時初めて、私は私たちが田舍に一緒にゐた初めの頃のことや、私たちの計畫を歴々と思ひ出しました。この時初めて、この間ぢうの私の悦樂は何であつたかといふことを、ふと自分に尋ねて見ました。そして、私が彼に對して惡い事をしてゐるのだと感じました。『けれども、何故あの人は私を止めなかつたのだらう。何故あの人は、私に對して伴はつてゐたのだらう。何故あの人は、私に打明けて話すのを避けたのだらう。何故あの人は彼に屈從してゐたのだらう。』と私は自分に尋ねて見ました。『何故あの人は、愛があの人に與へた力全體を私に對して用ゐなかつたのだらう。若くは、彼は私を愛してゐなかつたのだらうか。』けれども、どれほど彼が非難すべきものであつても、他人の接吻が私の頰の上にあつて、私はそれを感じたのでした。ハイデルベルヒに近づけば近づくほど、ます〳〵恐しくなるやうに思はれたのでしを想像しました。そして、近づきつゝある彼との會見が、ます〳〵恐しくなるやうに思はれたのでした。『私は、何も彼もあの人に打明けよう。何も彼も、後悔の涙で一切を拭ひ落してしまはう。』と私は考へました。『さうすれば、あの人は私を宥してくれるだらう。』けれども、私が彼に云はうとしてゐる『何も彼も』が何であるかが解りませんでした。そして、彼が私を宥してくれるだらうとは、自分で

信じてゐないのでした。

しかし、夫の部屋に入つて、驚いてはゐるが、靜かな彼の顏を見るや否や、私は、自分が、彼に云ふべき何ものをも、告白すべき何ものをも、宥しを乞ふべき何ものをも持つてゐないのを感じたのでした。私の悲哀と悔恨は、私の心の中に閉ぢ込めて置かねばならぬのでした。

『どうして、かういふ思ひ附きをしたのだね。』と彼は云ひました。『いや、僕は明日お前を訪ねようと思つてゐたんだよ。』けれども、もつと接近して私の顏を見て、彼は驚いたやうでした。『どうしたんだね、何か事が起つたのかね。』と彼は云ひました。

『何にも。』と私は、涙を抑へることが出來ないで、答へました。『私は、善い事をするために來たんですの。明日、露西亞へ立ちませう。』

彼は、やゝ長い間默つて、つく〴〵私を眺めてゐました。

『だが、どんな事が生じたのか話してお聽かせ。』と彼は云ひました。

私は、顏を赧らめて、眼を落さずにはゐられませんでした。彼の眼の中には、屈辱と怒りの輝きがありました。私は、彼の心の中に起るかも知れない考を怖れました、そして、今まで自信のなかつた出任せの佯りをもつて、云ひました——

『何にもあつたのぢやなくつてよ、ただ一人でゐるのが退屈で、憂鬱になつたんですの、私は私た

ちの生活のことや、あなたのことをいろ〳〵考へて見ましたわ。これまで、どんなに長い間、私はあなたに對して濟まないことをしてゐたでせう！あなたは、どうして、あなたが氣が進まないのに、私と一緒にこゝへゐらしたのでせう。私は、長い間、あなたに濟まないことをしてゐましたわ。』と私は繰返しました、と、又眼に涙が上るのでした。

『田舍へ歸りませう、そして、いつまでも田舍にゐませう。』

『あゝ、お前、さういふ感傷的な芝居は遠慮して貰ひたいね。』と彼は冷淡に云ひました。『田舍へ歸りたいと云ふんなら、歸らうよ、金が足りなくなりかけてゐるところだから、それは好都合だ、しかし、お前の「いつまでも」は空想だよ。僕はお前が長い間ゐられないのを知つてゐる。まア、お茶でもお飲み、さうすれば、氣分がよくなるよ。』と彼は言葉を結んで、給仕人を呼ぶ鈴を押すために立上りました。

私は、彼が私に就いて考へてゐるらしい一切のことを想像しました、そして、彼の疑深い、耻辱に傷けられたやうな眼が、私の上に注がれてゐるのを見た時に、彼が抱いてゐるだらうと思ふ恐るべき考のために、私は傷けられてゐました。いや、彼は私を理解することも出來なければ、理解しようともしないのだ！私は、行つて、幼兒が見たくなつたと云つて、部屋を出ました。私は、泣いて、泣いて、泣くために、一人になりたいと思ひました。

四

ずゐぶん長い間、空虚で火の氣の無かつたニコリスコエの家は、再び活氣づきましたが、その家に住んでゐた人はさうではありませんでした。私の姑は、もうゐませんでした、で、私たちだけが顔を突き合はせてゐるのでした。けれども、私たちはもう、孤獨を欲してはゐませんでした、實際、孤獨は、私たちにとつては束縛でした。健康が勝れなかつたので、この冬は殊に私には辛かつたのでした、實際、私は二ばん目の男の兒を生んでから、漸く健康を囘復したのです。

私と夫との關係は、やはり都會生活を送つてゐた間と同樣に、冷やかな友だちのやうな關係でした。けれども、田舍になると、食臺の一つ々々が、壁の一つ々々が、安樂椅子の一つ々々が、以前夫が私に與へたものや、私が失つたものを思ひ出させるのでした。それは、宥すことの出來ない罪が私たちの間に横はつてゐるかのやうに、彼が何事かのために私を罰してゐながら、それに就ては何も知らないやうな顔をしてゐるかのやうに思はれるのでした。宥しを乞はなければならぬ事は何もないのでした、恩惠を乞はなければならぬ事は何もないのでした、彼はただ、以前のやうに彼自身全體を、彼の靈魂全體を私に與へないことによつて私を罰してゐるのでした。けれども、彼は、それを持つてゐないかのやうに、それを誰にも、如何なる物にも與へないのでした。時折、彼は私を苦めるため

に、こんな風を裝つてゐるので、昔の感情は、やはり彼の中に生きてゐるのだと思ひました、そして、私はその感情を呼出さうと試みました。しかし、その度毎に、彼が愛情に就いて私を疑つてゐて、あらゆる感情を滑稽なものとして怖れてゐるかのやうに、彼は打明けた態度に出るのを避けてゐるやうに思はれました。彼の眼附と調子は、かう云つてゐるのです——『僕は、何も彼も知つてゐる、僕は何も彼も知つてゐる——そのことを話す必要はないんだ、そして、お前が話したいと思つてゐることも、僕はみんな知つてゐるんだ。それから僕は、お前が或ることを云つておきながら、別のことをするのも知つてゐるんだ。』初めのうちは、かうして打明けた態度を避けることが、私を怒らせました、けれども後になつて、それは、打明けた態度を怖れるのではなくて、打明けた態度に出たいといふ希望がないのだと考へるやうに馴れて來ました。今は、私が彼を愛してゐると彼に云はうとしても、自分も一緒に祈禱書を讀んでくれと云はうとしても、私が奏樂してゐる時に聽いて下さいと云つて彼を呼ばうとしても、私の舌は安々と動かないのでした。今では、私たちの間には、禮讓の或る定まつた契約があるやうに人は感ずるに違ひないのでした。私たちは、互ひに別々の生活を送つてゐました、彼は、今ではもう私が彼とそれを頒つ必要もなければ希望もない彼の仕事をしてゐるし、私は、今ではもう以前のやうに彼を苦めたり悲ませたりしない私の怠慢に耽つてゐるのでした。子供たちは、まだ小さ過ぎて、私たちの間の絆にはなりませんでした。

それでも、春はやつて來ました、カーチャとソーニャが夏を送るために田舍へ歸つて來ました、ニコリスコエの家は修繕をしなければならなかつたので、私たちはボクローフスコエに移りました。古い家は、昔のまゝで、そこには、緣側と、疊卓子と、明るい廣間のピアノと、白い窓掛をかけた、その家に忘れたまゝになつてゐるやうに見えた處女の夢の漂ふてゐる私の昔の部屋がありました。その部屋には、二つの寢床がありました——その一つは、昔の私の寢床で、その中には、私の肥つた小さなココーシャが横はつてゐて、晩になると、私は彼の上で十字を切つてやつたのでした。それから、他の一つには、幼ないブーニャの小さな顏が、その寢衣から覗いてゐました。十字を切つてから後で、私は度々靜かな部屋の眞中にじつと立つてゐるのでした、と、突然、部屋のあらゆる隅々から、壁から、窓掛から、古い、忘れられた青春の幻が現はれて來ました。昔の聲々が、又處女の歌を唱ひ始めました。で、かういふ幻は、何處にゐたのでせう。これ等の甘い、優しい歌は、どうなつたのでせう。私が待ち望んでゐなかつたすべてのものが、現はれて來たのでした。互ひに溶け合つてゐた漠然した夢は現實になり、現實は、退屈な、困難な、歡喜のない生活となつたのでした。

でも、すべてのものは、昔と同じでした。窓から見える同じ庭、同じ小徑、その向ふにある峽の上の腰掛、同じ鶯の歌が池の附近から流れて來るし、同じ紫丁香花は一面に花をつけてゐるし、同じ月は家の上にかゝつてゐるのです——そして、それにも拘らず、すべてのものが、こんなに悲しく、こ

んなに信じられないほどに變つてしまつたのです！あんなに貴く、あんなに人の情に近かつた一切のものが、こんなに冷めたくなつてしまつたのです！

昔と同じやうに、客間に坐つて、カーチヤと私は、靜かに話しました、私たちは彼のことを話しました。けれども、色が黃ろくなり、皺が寄つて、彼女の眼は、歡喜と希望で輝かないで、同情の苦痛と憐憫を表はしてゐました。私たちは、昔のやうにセルゲイの讃美歌を唱はないで、彼を批評してゐるのでした、私たちは、どうしてこんなに幸福であるかを怪まなかつたのでした、又昔したやうに、私たちの考へてゐることを全世界に對つて語りたいとは願はなかつたのでした。陰謀者のやうに、私たちは互ひに囁き合つて、百度も、どうして一切のことがあんなに悲しく變つたかを、訊き合ふのでした。

でも、彼は昔のまゝでした、ただ眉の間の皺が深くなつて、顴顎の周圍の髮が一層白くなつて、彼の眼の中にある深い、强い眼容が、いつも雲に蔽はれてゐるやうに見えるだけでした。私も亦、昔のまゝでした、けれども、私はもう愛してもゐないし、愛したいと願つてもゐないし、仕事に對する憧れをも持つてゐないし、自分自身を滿足してもゐないのでした。私の昔の法悅や、彼に對する愛や、昔の充實した生活が、今では遠くして不可能に私には見えるのでした、私は、今ではもう、曾つてはあんなに私にとつて高價で正しい事であつたものを——他人のための生活の幸福を了解することが出

來ませんでした。人は自分のために生活することすら願つてゐないのに、どうして他人のために生きることが出來るだらう？

私たちがペテルブルグへ移つて以來、私は音樂をすつかり止めてしまひました、けれども、今は、昔のピアノが、昔の樂譜が、再び私にとつての隱家となりました。

或る日、身體の具合が良くなかつたので、私はたつた一人家にゐました、カーチャとソーニャは、新築の家を見るために、ニコリスコエへ彼と一緒に馬車で出掛けたのです。お茶の卓子は、用意が出來てゐました、私は階下へ降りて行つて、彼等を待つてゐる間、ピアノへ坐りました。私は擬幻想曲を開いて、それを彈き始めました。誰も見てゐる者もなく、聽いてゐる者もありませんでした、窓は庭に向つて開かれてゐました、そして、親しみのある、嚴かに哀しい音樂が、部屋中に反響しました。私は第一部を終つて、無意識に、昔の習慣で、以前に彼が私の音樂を聽く時によく坐つてゐた隅の方を振り返へりました。しかし、彼はそこにゐませんでした。長い間動かされなかつた椅子が、隅に立つてゐました、そして、開かれた窓を通して、私は明るい夕日の中の紫丁香花を見ました、夕暮の爽やかさが、部屋の中へ流れ込みました。私はピアノに肘を突いて、兩手で顏を蔽ふて、物思ひに耽りました。さうして私は長い間坐つて、心の痛みを感じながら、返らぬ過去を憶ひ出し、來るべき事をおづ〳〵考へました。けれども、私の前には、何ものもないやうに見えました、私は何事をも欲してゐないし、何ものをも望んでゐないやうに思はれました。『私の生涯が終つてしまつたといふやうな事がどうして有り得やう。』と私は戰慄して考へました、そして、頭を上げて、もう一度演奏して、自分を忘れ、考から逃げやうとしました、で、もう一度、同じ平調を彈き始めました。『わが神よ！』と私は考へました『もし私に過失あらば、それを宥して下さい、以前にはあんなに善良であつたものを私の靈魂の中へ返へして下さい、それから、何をなすべきか、今後如何に生活すべきかを敎へて下さい！』

轍の響が、芝生の上や、入口の方から聞えて來ました。『私の生涯が終つてしまつたといふやうな事がどうして有り得やう。』と私は戰慄して考へました、そして、頭を上げて、もう一度演奏して、自分を忘れ、考から逃げやうとしました、で、もう一度、同じ平調を彈き始めました。『わが神よ！』と私は考へました『もし私に過失あらば、それを宥して下さい、以前にはあんなに善良であつたものを私の靈魂の中へ返へして下さい、それから、何をなすべきか、今後如何に生活すべきかを敎へて下さい！』

轍の響が、芝生の上や、入口の方から聞えて來ました、そして、聞き馴れた足音が、緣側を注意深く歩いて來て、止まるのが、聞えて來ました。けれども、昔の感情は、この聞き馴れた足音に應へて、呼び起されはしませんでした。彈き終つた時に、私は自分の後に足音を聞きました、と、一つの手が私の肩の上に置かれました。

『なんて悧巧な兒だらう、ソナータを彈くなんて！』と彼は云ひました。

私は、口を利きませんでした。

『お茶を飲んだかね。』

私は、頭を振りました、そして、私の顏に殘つてゐる感情の痕を現はすのを怖れて、彼の方を振り向きませんでした。

『みんなも直ぐ來るよ、馬が騒いだものだから、みんなは往還から歩いて來たんだ。』と彼が云ひました。

『みんなを待ちませう。』と彼が云ひました、そして、彼が後から來るやうにと願ひながら、廊下へ出ました、けれども、彼は子供たちのことを尋ねて、彼等のところへ行きました。彼が眼の前に來たことゝ、彼の單純な、親切な聲とは、又、私が何ものかを失つたのではないかといふ疑ひを起させました。『これ以上、何を私は願ふべきであらう。彼は親切で、柔和なのだ、彼は善良な父なのだ、そして、これ以上私が何を欲してゐるかゞ私には解らないんだ。』私は露臺に出て、日覆の下の、私たちが互ひに愛の誓ひもしたその日に坐つてゐた同じ席に坐りました。太陽は、恰度沈んだばかりで、暗くなりかゝつてゐました、そして、春の暗い雨雲の一つが、家と庭の上に懸つてゐました。たゞ樹の間から、光の消え行く、宵の明星の輝やいてゐる空の晴れた綠が見えただけでした。風は落ちて、一枚の木の葉も、一枚の草の葉も動きませんでした、空氣全體が花であるかのやうに強い、紫丁香花と櫻の香が、不意に薄くなつたり、濃くなつたりする流れとなつて、庭と露臺の上に漲つてゐました、誰でも、眼を閉ぢて、何にも見ず、何にも聞かずに、この甘い香の他は何も彼も閉め出してしまひたくなるほどでした。ダーリヤや、まだ花の咲かない薔薇の藪は、よく堀り返へされた黑い土の上に、動かずに眞直に立つて、恰もその白く刮られた支柱に沿ふて、靜かに成長してゐるかのやうでした。蛙

は、水の中へ彼等を追ひ込む雨の降る前に、最後に鳴くのだとでもいふやうに、峡から、精一ぱいに、鋭い合唱をもつて、鳴いてゐました。水の單調な、間斷のない響が、蛙の鋭い鳴聲よりも高く聞えてゐました。鶯は、間を置いて歌つてゐました、そして、彼等が驚いて、一つの場所から他の場所へ移つてゐるのが聞えました。この春も亦、一羽の鶯が、窓の下の籔の中へ巣を作つてゐました、で、私が外へ出ると、その鶯が並樹道へ飛び出て、そこで一度歌つて、それから暫らく沈默して、更に歌ふ時を待つてゐました。

私は、徒らに心を沈めようとしました、そして、何事かを待ち望んで、悲みました。彼は二階から戻つて來て、私の側へ坐りました。

『みんなは、濡れるね。』と彼が云ひました。

『えゝ。』と私は答へました、そして、私たちは、永い間默つてゐました。

雲は、風の無い空をだん〳〵低く下りて來て、一切のものが、前よりも押し默り、前よりも強く香ひ、前よりも靜かになりました、と、突然、一滴の雨が落ちて來ました、そして、もう一滴は恰も跳び上るやうに、露臺の帆布の日覆の上に落ち、もう一滴は小徑の砂利の上に飛び散りました、午蕚の葉の上にもバラ〳〵當りました、そして、大粒の鮮かな雨が、強く降り始めました。鶯と蛙は、すつかり沈默してしまつて、たゞ水の弱い響だけが、雨のために一層遠く隔つたやうに見えながらも、響

きつゞけてゐました、多分露臺の近くの、乾いた葉の中に隠れてゐた何鳥かゞ、單調な二聲の歌を規則正しく繰返へしました。彼は立上つて、去らうとしました。

『何處へゐらつしやるの？』と私は、訊ねて、彼を引止めました。『こゝは眞實に好い心持ぢやありませんか。』

『僕は、みんなに傘と上靴を持たしてやらうと思ふんだ。』と彼は云ひました。

『その必要はありませんわ、直ぐに舞れるでせう。』彼は私に同意しました、で、私たちは一緒に、露臺の欄干に寄りかゝつてゐました。私は、濡れてすべ〳〵した手摺の上に手を置いて、頭を出しました。爽やかな雨が、私の髪や頭に、其方此方バラ〳〵降りかゝりました。雲は、だん〳〵明るく、薄くなつて、私たちの上を通り過ぎました、一樣にバラ〳〵降つてゐた雨は、ポト〳〵落ちる滴に變つて、空や葉から、不規則に落ちてゐました。再び蛙が、低い所で鳴き始めました、再び鶯が動き始めて、濡れた籔の中で、或は一方の側から、或は他の側から、互ひに呼び交はしてゐました。空全體は、私たちの前で再び明るくなりました。

『なんて好い心持だらう！』と彼は云つて、私の側の欄干に腰を掛けて、彼の手は私の濡れた髪の上を撫でました。

この單純な愛撫が、非難のやうに私にこたへました。

『人間には、これ以上何の要求があらう。』と彼は云ひました。『僕は、今何にも要求するものがない位ゐに滿足してゐる、全く幸福だ！』

『以前には、あなたはあなたの幸福に就いてお話しなさる時は、そんな風ではありませんでしたわ！』と私は考へました。『どんなに幸福が大きくても、あなたは、いつでも、もつとそれ以上でありたいとおつしやつてました。けれども、今は、あなたは安心して滿足してゐらつしやるのです、私の心は、言葉に出して言へいな悔恨、流れない涙とでもいふやうなもので一ぱいになつてゐるのに。』

『私も、好い心持ですわ。』と私は云ひました。『でも、私の眼の前のものが、みんなこんなに美しいので、悲しい氣持がしますわ。私の中にあるものはみんな、關係がなくて、不完全なのですもの、こゝでは、こんなに平和で、幸福ですのに、私は何ものにか斷えず憧れてゐるんですの。あなたもきつと、あなたが自然をお樂みになる心の中に、一種の悲みが交るのをお感じなさると思ふわ、恰度、あなたが、過去の何ものかにお憧れになる時と同じやうに。』

彼は、私の頭から手を除けて、暫らくの間默つてゐました。

『さうだ、僕はいつでもさうだつた、殊に春は。』と彼は、憶ひ出すやうに、言ひました。『だから、僕はよく徹夜、憧れたり願つたりしながら、坐つてゐたものだ、あれは幸福な夜だつた！……しかし、その當時は、萬事が未來にあつたが、今は一切が後にあるんだ、今僕は現にあるもので滿足して

ゐる、僕はそれで充分なのだ。』と彼は、それを聽くことは私には苦痛であつたが、彼は眞實を語つてゐるのだと私が信ぜずにはゐられなかつたほど眞實らしい、平氣さで、言葉を結びました。

『では、あなたがお望みになることはもう何もないんですね。』と私は訊ねました。

『出來ないことは何も望まないさ。』と彼は、私の感情を推察しながら、答へました。『御覽、お前は頭を濡らしてゐるよ。』と彼は、子供を愛撫するやうに、私の髪をもう一度撫でながら、言ひ添へました。『お前は、雨が葉や草を濡らすのを羨んでゐるんだ、お前は、葉や草になりたがつてゐるんだ、しかし、僕はたゞそれを樂しんでゐるのだよ、僕が世界ぢゆうの、善良で、若くて、幸福なものに對してするのと同じやうに。』

『では、あなたは、過ぎ去つたことは何にもお歎きなさらない?』と私は、自分の心がだん〴〵重く沈むのを感じて、疑問をつゞけました。

彼は、物思ひに沈んで、又默つてしまひました。私は、彼が眞面目に答へたいと思つてゐるのを見ました。

『あゝ。』と彼は、簡單に答へました。

『さうぢやないでせう、さうぢやないでせう!』と私は云つて、彼の方を向いて、彼の眼を見ました。『あなたは、過ぎ去つたことをお歎きなさらない?』

『あゝ。』と彼はもう一度繰返へしました。『僕はそれを感謝してゐる。しかし、僕は過ぎ去つたことを歎かない。』

『あなたは、過去を引戻さうとは望まないとおつしやるんですの。』と私が云ひました。

彼は、振り向いて、庭を眺め始めました。

『僕は、そんなことは望まない、恰度僕が翼が生えるのを望まないと同じやうに。』と彼は云ひました。『それは、不可能なことだ。』

『それでは、あなたは、過去を矯正さうとはお思ひにならない、あなたは、御自身や私を非難なさらない?』

『決して!みんな最も善いことだつた。』

『聽いて下さい。』とは私を、彼の方に向かせるために彼の腕に觸つて、云ひました。『聽いて下さい。何故あなたは、あなたがお望みになるやうに私に生活させたいと、一度も私におつしやらなかつたのです。何故あなたは、私が利用することを知らない自由を私にお與へになつたのです。何故あなたは、私を敎へて下さるのをお止めになつたのです。もしあなたが、保護して下すつたら、あなたが私を違つた風に私を支配して下すつたら、何にも、何にも事は起らなかつたでせうに!』と私は、冷たい怒りと非難のだん〴〵強く現はれる聲で、云ひました。そして、その聲には、昔の愛は少しも現はれて

ゐませんでした。

『何が起らなかつただらうと云ふんだね。』と、彼は、驚いて、私の方を振り返つて、云ひました。『何にも起りはしなかつたんだよ。實際、萬事が旨く行つてゐるんだ。非常にうまく行つてゐるんだ！』と彼は、微笑みながら言ひ添へました。

『そんなことが有り得るだらうか。この人に解らないなんて、もつと惡いことには、この人が解りたいと思つてゐないなんて！』と私は考へました、そして、涙が私の眼に浮びました。

『私が起らなかつたでせうと云ふのは、私があなたに對して何にも惡いことをしてゐないのに、あなたの無關心によつて、あなたの輕蔑にさへよつて、私が罰せられてゐることです！』と私は、唐突に、云ひ放ちました。『私が起らなかつたでせうと云ふのは、私には過失がないのに、あなたは、私にとつて貴重なすべてのものを私から奪つておしまひになつたことです。』

『どうしたんだね。お前。』と彼は、私の言ふことが解らないかのやうに、云ひました。

『いゝえ。私に云はせて下さい……あなたは、私からあなたの信用も、あなたの愛も、あなたの尊敬すらも奪つてしまつたのです。私は、將來あなたが昔のやうに私を愛して下さるとは信じませんからね。いゝえ、長い間私があんな慘めな目に會つてゐたことを、一度でいゝから云つてしまひたいんです。』と私は、彼が再び云ひ出さうとするのを遮つて、云ひました。『私が、人生に就いて何も知らな

かつたのは、私の罪でせうか、あなたは、私に一人で人生を求めさしたのです……今私は、自分で一ぱん大切なものを見附けだして、殆んど一年の間あなたに返へさうと腕いてゐるのに——あなたが、私の求めてゐるものが解らないやうな風をして、私を撥ねつけてゐらつしやるのは、私の罪でせうか、そして、あなたは、誰もあなたを非難することが出來ないやうな、それでゐて、私には過失があるやうに見えて、私が不幸になるやうな、さういふ遣り方で、いつも私を撥ねつけてゐらつしやるのです。さうです。あなたは、私たち二人の不幸になるやうな生活に、私を追ひ返へさうとしてゐらつしやるのです。』

『だが、どんな風にして、僕はお前にそんなことをして見せたかね。』と彼は、心から訝り且つ驚きながら、訊ねました。

『あなたは、たッた昨日おつしやつたぢやありませんか、あなたは、いつでもおつしやつてゐらつしやるぢやありませんか、私がこゝにはゐたゝまるまいなんて、それから、この冬は、私たちは、私の嫌いなペテルブルグへ歸つて行かなくちやならないなんて。』と私は續けました。『私を支へて下さる代りに、あなたは、打明けた話を一切避けて、私の心からの優しい言葉をかけるのを避けてゐらつしやるのです。そして、私が、全く倒れてしまつた時に、あなたは、私を責めて、私の倒れたのを笑はうとしてゐらつしやるんです。』

『おやあ、おやあ！』と彼は、嚴かに、冷やかに云ひました。『お前が今云つてゐることは、宜しくない。それは、お前が僕に對して惡意をもつてゐるのを證明するだけだ。お前が私を――』

『あなたを愛してゐないことを、でせう……おつしやつておしまひなさい。おつしやつておしまひなさい！』と私は彼の云ふことをすつかり云つてしまひました。そして、涙が眼から流れ出ました。私は、腰掛の上に坐つて、手巾で顏を隱くしました。

『彼は、私の云ふ意味をさういふ風にとつたんだ！』と私は、私を窒息させた歔欷を抑へようと努めながら考へました。『私たちの昔の愛は、お終ひになつたのだ。お終ひになつたのだ！』と或る聲が、私の心の中で云ひました。彼は、私に近づきませんでした。私を慰めませんでした。彼は、私の云つたことで腹を立てゝゐました。彼の聲は、濕ひがなくて、落着いてゐました。

『僕は、お前が何に對して僕を非難するのか解らない。』と彼は始めました。『もしそれが、僕が以前に愛したやうにお前を愛してゐないと云ふ點にあるのなら……』

『愛してゐらつしやいましたわ！』と私は、手巾の中で叫びました。と、苦い涙が、手巾の中へ一層烈しく流れ出ました。

『それに對して非難しなればなけらぬのは、時と、私たち自身だ。いづれの時代にもその時代に特有な愛がある。』彼は暫らく默つてゐました。『で、お前が打明けて話してくれと言ふのなら、眞實のこ

とをすつかり言つてしまはう……僕がお前を知つた年に、僕はお前のことを考へて、幾晩も眠らずに過して、自分のために僕の愛を育てゝ行つた。そして、その愛は、僕の心の中でだん〳〵成長して行つたのだ。それと恰度同じやうに、ベテルブルグや外國でも、僕は眠らない夜を幾晩も過して、僕を苦めてゐたその愛を破壞して、切々に引裂いてしまはうとしたのだ。僕は、その愛を破壞せずに、僕をゐるんだ。だが、前とは違つた愛で。僕は平和になつた。そして、今でもお前を愛してゐるんだ。

『さうです。あなたは、それを愛とお呼びになる、だけど、それは苦痛ですわ！』と私は言ひました。『何故あなたは、私を交際社會へお出しになつたんですの、もしあなたが、それがために私に對する愛をお失ひになつたほど、交際社會は有害なものとお考へになつたのだつたら。』

『それは、交際社會ぢやなかつたんだよ。お前！』と彼は言ひました。

『何故あなたは、御自分の權力をお用ひにならなかつたの。』と私は續けて言ひました。『何故あなたは、私を束縛なさらなかつたの、私をお殺しにならなかつたの。現在ではさうされた方が、私を幸福にした一切のものを奪られてしまふよりは、ましですわ。私は幸福でゐなくちやならないんですもの、恥を受けてはゐられないんですもの。』

私は、また歔欷して、私の顏を藏ひました。

その時、カーチャとソーニャが、ずぶ濡れになつて、快活に、聲高にお喋りをしたり笑つたりしながら、露臺へ入つて來ました、しかし、私たちを見ると、彼等は靜かになつて、直ぐ家の中へ入つて行きました。

二人が出て行つてしまふと、私たちは長い間默つて坐つてゐました、涙を拭くと、私は前より氣持がよくなりました。私は、彼をチラと見ました。彼は兩手で頭を支えて坐つてゐました。そして、彼の眼付に答へて何か言はうとしました、けれども、彼は深い溜息をついただけで、再び肘に倚りかゝりました。私は彼の傍に近づいて、彼の手を取りました。彼の兩眼は、私の上へ夢見るやうに注がれてゐました。

『さうだ。』と彼は、恰も彼の思想の續きを追ふてゐるかのやうに言ひました。『吾々はみんな、殊にお前たち女は、眞實の人生に立返るためには、人生の凡ゆる馬鹿なことを通り越して見なければならないのだ。吾々は、吾々以外の他人を信ずることは出來ないからね。お前は、あの當時はまだ〳〵、僕がお前を見る時によく譖嘆したあの快よい、魅惑的な愚事をし盡してはゐなかつたのだよ、僕はそれを味ひ盡すことをお前に任せておいたんだ、そして、僕にはその時代がずつと以前に去つてしまつたからと云つて、お前を妨げる權利を僕は持つてゐないのだと感じてゐたんだ。』

『何故あなたは、私と一緒にそんな生活をお送りになつたの、そんな愚事をする私を放任つてお置

きになつたの、もしあなたが私を愛してゐらつしたんなら。』と私は云ひました。

『それは、お前がそれを試みるに遠ひなかつたからだ、お前が僕を信じないに決つてゐたからだ、お前は自分で發見しなければならなかつたんだよ……そして、お前は、それを今發見したんだ。』

『あなたは、理性で考へたんですわ、理性で深く考へたんですわ。』と私は云ひました。

『あなたは、少しゝきや愛さなかつたんですわ。』

再び、私たちは沈默しました。

『たつた今お前が云つたことは、殘酷だが、眞實だ！』と彼は不意に云つて、立上つて、露臺を歩き廻りました。『さうだ、それは眞實だ。僕が惡いんだ。』と彼は言ひ添へて、私の正面で立停まりました。『僕は、全然お前を愛さないか、もつと單純にお前を愛すべきだつた、さうだ！』

『そんなことは、みんな忘れてしまひませうよ……』と私は、おづ〳〵しながら云ひました。

『いや、過ぎ去つたことは、もう返つて來ないんだ、誰でもそれを引戻すことは出來ないんだ！』

そして、かう云つた時に、彼の聲は和らいでゐました。

『一切のことが、今返つて來たんですわ……』と、私は、自分の手を彼の肩にかけて云ひました。

彼は、私の手を取つて、それを握り締めました。

『いや、僕が過ぎ去つたことを歎かないと云つたのは、眞實ぢやなかつたんだ。いや、僕はそれを

歎いてゐる、僕は吾々の過去の愛のために泣いてゐる――その愛はもう失くなつてしまつたので、もう二度と返つては來ないんだ。誰が惡いのか、僕には解らない、愛はまだ殘つてゐるが、それは昔の愛ではない、愛の場所は殘つてゐるが、それはすつかり痩せ衰へてゐる、その中には、力もなければ實質もない、記憶と感謝は殘つてゐる、けれども――』

『そんなことを云つちや嫌！』と私は遮りました。『すべてのものをもう一度以前の通りにしませうよ……出來ますよ、さうぢやなくつて？』と私は訊いて、彼の眼の中を見ました。けれども、彼の眼は澄んで、何の曇りもありませんでした、そして、それは私の眼を深くは凝視めませんでした。彼は私には老人らしい微笑のやうに見えた、靜かな、柔和な微笑を浮べてゐました。

『お前はなんて若いんだらう、僕はこんなに年を老つたのに！』と彼は云ひました。『お前の求めてゐるものは、僕の中にはないんだ……もう吾々は自らを欺くまいか。』と彼は、尙同じ微笑を浮べて、言ひ添へました。

私は、默つて、彼の傍に立つてゐました、そして、私の心の中には、前よりも大きな平和がありました。

『僕たちは生活を繰返さうと試みるのを止さうぢやないか。』と彼は續けました。『僕たちは、自ら欺くのを止さう。昔の心痛や感情が過ぎ去つてしまつたのは、實際有り難いことだ！　僕たちは、求めたり惱んだりする必要がないんだ。僕たちは、求めてゐたものを見出したので、充分の幸福が僕たちの運命に落ちて來たんだ。今は、僕たちが脇に寄つて、道を作つてやる時だ、御覽、この人間のために！』と彼は、露臺の入口に立つてゐた乳母の腕の中のワーニャを指して云ひました。『さうだらうぢやないか、お前。』と彼は云つて、彼の方へ私の頭を引き寄せて、それに接吻しました。それは戀人ではなくて、私に接吻する昔の友だちでした。

と、庭から、夜の香氣ある爽やかさが、益々甘く、益々濃く立ち上つて來ました、夜の響と靜寂がだん〳〵嚴肅になつて來ました、そして、星が前よりも濃く空に集まりました。私は彼を見ました、と、私を苦めた病んだ道德の神經が取除かれたかのやうに、私の靈魂の中に不意に安易な感覺が起りました。その途端に、私は、あの時の感情は、時そのもののやうに一度去つては二度と返らぬのであつて、それを引戻さうとするのは、不可能なことであるのみならず、苦しい無理なことであるのだと瞭然、和かに感じました。で、實際、私にとつてあんなに幸福に見えたあの時分は、其樣に好かつたのであらうか？　しかし、それはみんな、遠い、遠い昔のことであつた！

『しかし、もうお茶の時分だね。』と彼が云ひました、で、私たちは一緒に客間へ行きました。入口で、私たちは又乳母とヴーニャに會ひました。私は赤坊を抱いて、その裸かの赤い小さな足指を蔽ふてやつて、抱き締めて、私の唇が漸く彼に觸れる位るに、彼に接吻してやりました。ヴーニャはまだ眠

つてゐるやうに、皺のある指を擴げて、その小さな手を動かしました、そして、何ものかを求め、何ものかを憶ひ出してゐるかのやうに、ぼんやりした眼を開きました。突然、その小さな眼が、私の上に止まりました、智慧の閃きが、その眼の中に輝いてゐました、すつかり突き出てゐた唇が動き始めて、微笑に變りました。『私のだ、私のだ、私のだ！』と私は考へて、私の四肢に幸福な緊張を感じて子供を傷けまいと自分を制しながら、彼を胸に抱き締めました。

そして、私は、その小さな、冷たい足や、小さなお腹や、手や、和かな髮の疎らに生えてゐる小さな頭を接吻し始めました。夫が私の傍へ來ると、私は子供の顏を大急ぎで隱して、又それを開けました。

『イワン・セルゲーイチ！』と私の夫は、子供の顎の下を觸りながら云ひました。けれども、私は又手早やにイワン・セルゲーイチを隱してしまひました。私のほかには、誰も彼を長く見てはいけないのでした。私は夫をチラと見ました、私が見守つた時、彼の眼は笑つてゐました、そして、久し振りに初めて、彼の眼の中を見詰めるのが、私にとつて心安く、快よく思はれたのでした。

この日でもつて、私と私の夫との戀物語はお終ひになりました、昔の感情は、決して返らぬ貴い記憶になつてしまひました、けれども、私の子供たちと子供たちの父に對する愛の感情が、他の生活の基礎を置きました、それは全く違つた意味で幸福な生活で、私は、まだ現在までもその中に生きてゐるのです。（完）

大正十一年十月十一日印刷
大正十一年十月二十五日發行

家庭の幸福

定價金七拾五錢

著作者　福永挽歌
發行者　神田豐穗　東京市神田區表神保町十番地
印刷者　寺田國太郎　東京市牛込早稲田鶴巻町三六二
印刷所　早稲田印刷株式會社　東京市牛込早稲田鶴巻町三六二

發行所　東京市神田區表神保町十番地　春秋社　振替東京二四八六一番　電話神田二一三八番

トルストイ名著集

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリー・エージ・プレスの効を没すべからず。曩に吾邦曠古の大出版たりしトルストイ全集を完成せし吾社は、茲に江湖の熱需に促されて該全集中の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。

1. 宮島新三郎譯　**人生論**　四六版仮綴　定價金八拾錢　送料金八錢
2. 木村毅譯　**藝術とは何ぞや**　四六版仮綴　定價金拾圓　送料金拾錢
3. 細田源吉譯　**私の懺悔**　四六版仮綴　定價金四拾五錢　送料金八錢
4. 福永挽歌譯　**短篇三種**　四六版仮綴　定價金七拾錢　送料金八錢
5. 春秋社譯　**神の國は爾曹の衷にあり**　四六版仮綴　定價金壹圓八拾錢　送料金拾四錢
6. 木村毅譯　**家庭のための物語**　四六版仮綴　定價金壹圓參拾錢　送料金拾錢
7. 加藤一夫譯　**宗教とは何ぞや**　四六版仮綴　定價金七拾錢　送料金八錢
8. 飯田敏雄譯　**國民傳說**　四六版仮綴　定價金六拾錢　送料金八錢
9. 春秋社譯　**民話**　四六版仮綴　定價金八拾錢　送料金八錢
10. 福永挽歌譯　**家庭の幸福**　四六版仮綴　定價金七拾五錢　送料金八錢

577
6

終